

埋蔵文化財調査研究報告 I

じん ない
陣内第2遺跡

はす が いけ
蓮ヶ池横穴墓群
—遺物編—

1987.3

宮崎県総合博物館

埋藏文化財調査研究報告 I

陣内第2遺跡

蓮ヶ池横穴墓群

—遺物編—

1987.3

宮崎県総合博物館

は じ め に

近年の国土開発には目ざましいものがあり、それにとまなう遺跡の発掘調査は増加の一途をたどっています。このような中で、埋蔵文化財保護への期待は高まり、時代の要請に応えるべく県総合博物館の一部門として昭和57年10月2日埋蔵文化財センターが開設されました。

ここに報告する「陣内第2遺跡・蓮ヶ池横穴墓群」は県教育委員会によって発掘調査が行われましたが、諸般の事情により公表が遅れていたものです。

県総合博物館では、これらの出土品整理を埋蔵文化財センターの事業の一つとして開設以来精力的に進め、このたび「埋蔵文化財調査研究報告Ⅰ」として発刊の運びとなりました。

学術資料および学校教育・社会教育資料として御活用いただければ幸いです。

昭和62年3月

宮崎県総合博物館

館長 黒木 淳吉

陣内第2遺跡

例 言

1. 本報告は、昭和42年7月3日から7月6日にかけて宮崎県教育委員会によって行われた西臼杵郡高千穂町大字三田井字車迫に所在する陣内第2遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査以来諸般の事情により報告が遅れていたが、昭和58年度から61年度にかけて埋蔵文化財センターの事業として整理を行い、その結果を報告するものである。
3. 整理には昭和58年度は主任茂山護（現日之影町立八戸中学校教頭）、整理専門員津隈久美子、整理作業員永峰まり子があたり、59年度から主任主事岩永哲夫、主事谷口武範、津隈久美子、永峰まり子があつた。
4. 遺物実測トレースは岩永・谷口・主事菅付和樹・津隈・永峰、写真撮影は岩永・谷口が担当した。執筆・編集には岩永（61年度・主任）・谷口があたり、各項の末尾に文責名を記した。
5. 整理した遺物等の資料は台帳登録の上、埋蔵文化財センターで保管している。
6. 黒曜石の同定については、薬科哲男氏（京都大学原子炉実験所）のご教授によるものである。
7. 出土土器の「色調」については、「新版標準土色帖」を使用した。

本文目次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	3
III 遺物	4
1. 土器	4
2. 石器	11
3. 玉類	13
IV 結語	14

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 遺跡周辺地形図	2
第3図 発掘区図	3
第4図 縄文後期後半土器編年図	5~6
第5図 鉢形土器の変遷解説図	9
第6図 土器実測図(1)	16
第7図 土器実測図(2)	17
第8図 土器実測図(3)	18
第9図 土器実測図(4)	19
第10図 土器実測図(5)	20
第11図 土器実測図(6)	21
第12図 土器実測図(7)	22
第13図 土器実測図(8)	23
第14図 土器実測図(9)	24
第15図 土器実測図(10)	25
第16図 土器実測図(11)	26
第17図 土器実測図(12)	27

第18図	土器実測図 (13)	28
第19図	土器実測図 (14)	29
第20図	土器実測図 (15)	30
第21図	土器実測図 (16)	31
第22図	土器実測図 (17)	32
第23図	土器実測図 (18)	33
第24図	土器実測図 (19)	34
第25図	土器実測図 (20)	35
第26図	土器実測図 (21)	36
第27図	土器実測図 (22)	37
第28図	土器実測図 (23)	38
第29図	土器実測図 (24)	39
第30図	土器実測図 (25)	40
第31図	土器実測図 (26)	41
第32図	土器実測図 (27)	42
第33図	土器実測図 (28)	43
第34図	土器実測図 (29)	44
第35図	土器実測図 (30)	45
第36図	土器実測図 (31)	46
第37図	土器実測図 (32)	47
第38図	土器実測図 (33)	48
第39図	土器実測図 (34)	49
第40図	土器実測図 (35)	50
第41図	土器 (36) および円板状・有孔円板状土製品実測図	51
第42図	石器実測図 (石鏃)	78
第43図	石器実測図 (石鏃・石錐・スクレイパー・玉類)	79
第44図	石器実測図 (石斧)	80
第45図	石器実測図 (石斧)	81
第46図	石器実測図 (磨製石斧・円盤状石器・打製石鏃)	82
第47図	石器実測図 (2次加工のある剥片)	83

表 目 次

第1表	土器観察表	52
第2表	円板状・有孔円板状土製品観察表	76
第3表	石器計測表(1)	83
第4表	石器計測表(2)	84

図 版 目 次

図版1	遺跡付近の現況	87
図版2	出土土器(1)	88
図版3	出土土器(2)	89
図版4	出土土器(3)	90
図版5	出土石器(1)	91
図版6	出土石器(2)	92
図版7	出土石器(3)	93
図版8	出土石器(4)	94

I 調査の経緯

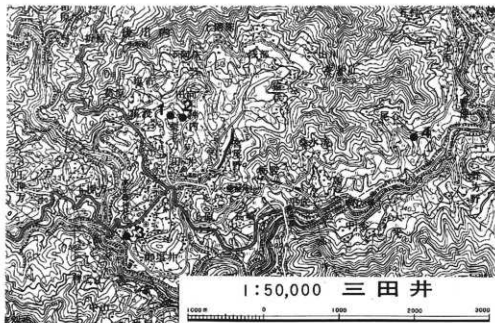
陣内第2遺跡は昭和42年7月3日から同月7日までの5日間発掘調査が行われた。水田化に際しての調査であった。発掘は、石川恒太郎（当時・県文化財専門委員）、日高正晴（同）の両氏を中心に進められ、栗原文蔵氏（当時・県立博物館学芸員）が応援するという形で、町教育委員会関係者、土地所有者の方などの参加協力を得ている。

栗原氏の調査メモによると、発掘は幅2m、長さ10mのトレンチを設定し、AからE区の5区に分けられ、A区から進められたが、時間等の都合もあり、約13m²ほどの発掘面積に留まっている。栗原氏の調査日誌（抄）を次に掲載させていただく。

昭和42. 7. 3 雨のち曇一時晴

幅2m、長さ10mのトレンチを設定。A～Eの5区に分ける。A区25cm、B区35cm掘り下げる。木炭・獣骨片まじりの包含層で、土器・石鏃等多数。

主な遺物；石器時代勾玉、B区西壁深さ-25cm。



第1図 遺跡位置図

- 1.陣内第2遺跡 2.陣内遺跡 3.セベット遺跡 4.梅木原遺跡

昭和42. 7. 4 うす曇り

前日に引き続き、掘り進み、A区はほぼ完掘。丸玉、十字形石器、有孔円板、土器注口部等々出土。

昭和42. 7. 5 曇午後小雨

1A・1B完掘。3時頃より2Aに移る。2Aより藍胎漆器(?)かと思われる朱の広がりを検出。層序は不明瞭である。夕方、小雨となる。

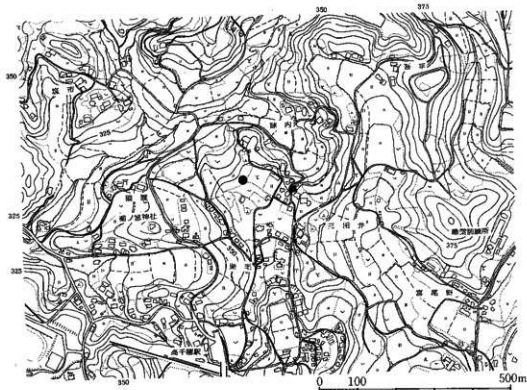
昭和42. 7. 6 うす曇、一時うす日さす

2Aを掘り進む。1Aに近い部分から丸玉2ヶ検出。3時頃に終わり、2B区を設定する。

昭和42. 7. 7 曇のち雨

2Bを掘り進み、11時頃終わる。道具片づけ等をなし、午後、埋め戻し。5時、無事終了し、調査完了となす。後日(11月~3月)あらためて県教委で調査するとかいう話。

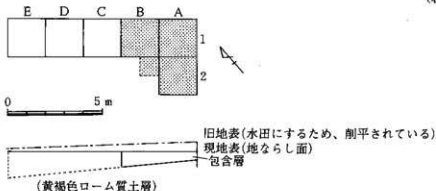
結局、この後の調査は行われなかった。



第2図 遺跡周辺地形図 (● 陣内第2遺跡・■ 県指定史跡陣内遺跡)

出土遺物の整理は、昭和58年度から61年度にかけて埋蔵文化財センターで行ったが、発掘面積に比して、出土量（主に土器・石器）の多さには驚かされた。昭和55年町道改良工事にもなう緊急調査として行われた陣内遺跡第2次発掘調査の出土も夥しい量にのぼり、陣内地区遺跡の性格を示すものとして肯けるものであるが、遺物の出土状況等詳細な点は調査資料が少なくよくわからない。

(岩永)



第3図 発掘区図(アミ目部分)

II 遺跡の位置と歴史的環境

陣内第2遺跡は西臼杵郡高千穂町大字三田井字車迫にある。

高千穂町は祖母山の南側にあり、九州山地に源を発する五ヶ瀬川およびその支流によって開折された穏やかな台地が三田井を中心に分布している。陣内第2遺跡は五ヶ瀬川の北岸、三田井の中心部から約1km北へ登りつめた小台地に所在する。国指定史跡陣内遺跡（昭和51年3月26日指定）とは所在の台地を同じくし、約140m離れた西北斜面にある。

高千穂町内の縄文遺跡は、土偶・石棒の出土で知られる後期を主体に営まれた陣内遺跡が(1)よく知られている。しかし、中期を除く早期から晩期までの数多くの遺跡が詳細分布調査の(2)結果、確認されている。最近発掘されたセベツ遺跡からは楕円形プランの竪穴住居跡(3)（晩期前半中葉）1軒、土壇1基が検出された。遺物は、晩期前半中葉から後葉にかけての土器類、石鏃・尖頭器・扁平打製石斧・敲石・磨石・搔器・削器・石錐・石棒片などの石器類が(4)出土している。梅木原遺跡からは遺構の検出はみられなかったが、西平式から晩期前半までの土器類、石鏃・石錐・扁平打製石斧・磨石・尖頭器等の石器が出土している。

縄文時代を考える場合、本地方は宮崎県中央部よりはるかに肥後・豊後に近く、九州中央山岳地帯を中心に形成された文化圏に含まれる西臼杵地方の拠点的位置を占めるものとして把握しておく必要がある。

(岩永)

註 (1) 宮崎県教育委員会「陣内遺跡」1962

(2) 高千穂町教育委員会「高千穂町遺跡詳細分布調査報告書

(三田井・押方向山地区)」1983

(3) ————— 「セベツ遺跡」『高千穂町文化財調査報告書第3集』1984

(4) ————— 「梅ノ木原遺跡」『高千穂町文化財調査報告書第4集』1985

III 遺物

陣内第2遺跡からは遺構の検出はなかったが、多量の土器・石器類の出土があった。

1. 土器

縄文早期から晩期まで各時期に亘って出土している。主体をなすのは後期西平式期から御領式期にかけてであり、三万田式期において最も豊富な器種器形がみられる。

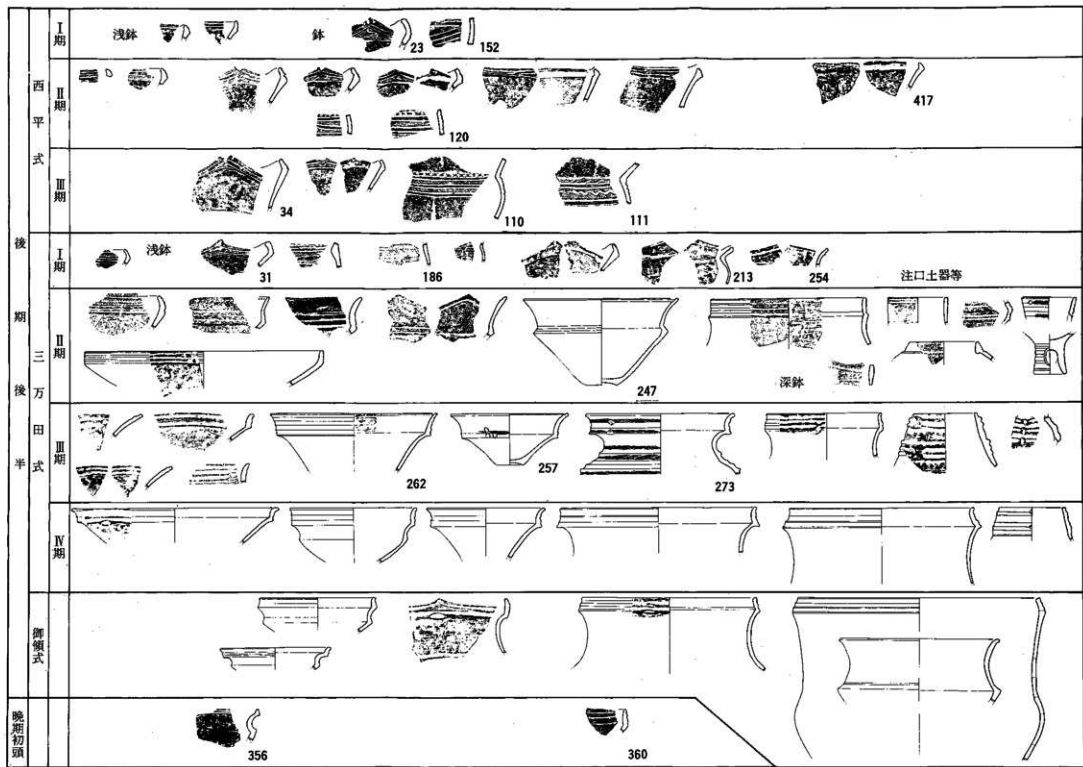
土器の整理では全ての出土土器を報告しようと心がけてきたが、無文土器の破片は接合復元の困難なものが多く、時期的にも明らかにし得ないので、有文土器を中心に報告し、無文土器は実測可能なものを含みある程度復元できたものに限ることとした。個々の土器については土器観察表に記載しているので、実測図と合わせ参照していただきたい。

ここでは、主体をなす縄文後期中後葉から晩期初頭にかけての土器群についてその概要を編年的に述べていきたい。

西平式

I 期

量的には多くない。鉢形土器(23)は西平貝塚出土の西平式に先行するもので、口縁部施文帯が広い。波頂部には二方向からの口唇部刺突を行い、縄文施文後、3条の沈線を口縁端に沿って巡らせている。三角形に囲まれた部分に垂下曲線を描き、磨消は施していない。口



第4図 縄文後期後半土器編年図

縁部に直接つながる胴部片はないが、頸部に細かな刺突列点を施し、胴部に沈線によって三角形を形成するモチーフをもつのではないかと考えられる(152)。セットになる他の器形は明らかでない。

Ⅱ 期

従来言われてきた西平式にあたる。鉢形土器でしか述べようがないが、口縁部の特徴として山形口縁・波頂部に1～2個の深い切り込み(または押圧)・2～3本の沈線と磨消縄文・三角形に広がる施文帯には下から上へ開く四方向からの弧文・口縁内面の太い凹線などがあげられる。<字形に屈折する頸部には一条の刺突、胴上半部には磨消縄文とともに数条の横～斜沈線・円形押圧文を配している(120)。内面に太い凹線を巡らせる無文鉢形土器(417)があるが、器形的にみてこの時期に比定しておきたい。

Ⅲ 期

Ⅱ期に類するが、口縁部の施文帯が狭まり、沈線は2本になる。波頂部のみ3本沈線になる(34)など後退現象がみられる。三万田Ⅰ期への過渡的な様相を呈する⁽¹⁾。また、(111)のように頸部刺突が斜めの刻目になり、胴部の縄文帯に波状(鋸歯状)文を施す土器も少なからず出土しているが、沈線が深く、粗剛さがみられるなど西平式の流れになじまない点もある。しかし、波状文をx字状の弧文によって止めるなど三万田式期への萌芽とも感じられることから不明確ではあるが、一応この時期に比定しておく⁽²⁾。(110)の胴部片はⅡ期に入るかも知れない。

三万田式

Ⅰ 期

西平式の影響を残し、一部鉢形土器に浅い磨消縄文がみられるが、波頂部の深い切り込み・押圧は影を潜め、外面からの弱い押圧文に変化する(31)。胴部には数条の沈線でx字文を描き、磨消縄文の消えるものがみられる(186)。一方、西平式の器形を踏襲する無文の鉢形土器もあるが、口縁部の内傾部が狭くなるとともに頸部からの立ち上がりの短いものもあらわれる(213)。内面には一条の沈線がめぐる。

Ⅱ 期

浅鉢・鉢・深鉢形土器のほかに注口土器・高杯形土器など器種器形が豊富になり、細線羽状文が登場する。細線文土器には研磨されているものが多い。鉢形土器(247)では頸部が外に張り出し、胴部の膨らみが消失し、直線的に底部へ続く。口唇部は丸く、内面に一条の沈線が巡る。また、肩の張った無文の深鉢形土器が顕著になるが、内面にはやはり一条の沈線が巡る。

Ⅲ 期

細線羽状文が最も盛行し、黒色磨研技法の確立・定着の時期である。凹線の幅が広くなるとともに対峙する三角形削り文・扇状貝匠文が登場するが、鉢形土器の内面に巡らせる一条の沈線はこの時期まで残る(257・262)。273の深鉢形土器は細線羽状文を多用しており、華麗な土器文化を想起させる⁽³⁾。無文の深鉢形土器はやや粗製で、Ⅱ期までみられた内面の沈線は消失し、口縁端部が丸くなる。

Ⅳ 期

文様が簡略化され、細かな文様を施さない。凹線部分を強調し、凹線の幅を最大限まで広げる。円形押印文は楕円形押印文に変化する。また、口縁部の特徴としてどの器形においても外反度が著しくなる⁽⁴⁾。

御領式

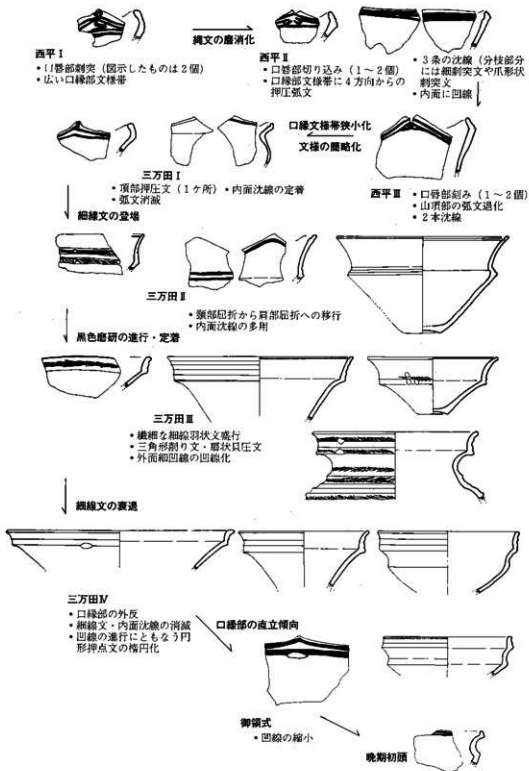
浅鉢・鉢・深鉢形土器のいずれも口縁部文様帯が縮小退化の傾向にあり、主文様の凹線も幅が狭くなる。器形的にも口縁部外反がなくなり、内傾・外傾化する。楕円形押印文は三万田式に引き続き、アクセント的に残る。無文深鉢は大型のものが主流を占める。

晩期初頭

量的には極めて少ない。浅鉢(356)の口縁部施文帯は更に狭まり、2本の沈線が巡る。深鉢(360)においては沈線が細く、迫力がなくなるなど三万田式に盛行した凹線に対する文様意識が次第に薄れていったことが理解できる。

土器小結

九州の縄文後期後葉については、諸先学の研究により西平式→三万田式→御領式の編年が



第5図 鉢形土器の変遷解説図

ほぼ確立しているといえる。しかし、最近の調査研究では当該期遺跡の増加により遺跡間の比較研究が行われ、各期の細分化・再編化の傾向が著しい。ことに西平式・三万田式→御領式という大きな流れに変動はないものの地域によって内容は複雑な様相をみせているため、地域性の究明を中心に展開されている。陣内第2遺跡もこのような流れの中に位置づけることができるが、本遺跡出土の土器をみた場合、全体の流れについて断絶部分はなく、器形・文様ともに極めてスムーズな移行が認められ、西平式・三万田式それぞれの細分を可能にした。「西平式」「三万田式」の名称は、内容の不明瞭な点はあったにしても、学史的にも評価を受けるものであり、特に変更しなければならない程の理由もみあたらないので、本稿ではそれぞれを冠して〇期と呼ぶことにした。熊本における太郎迫式⁽⁵⁾・鳥井原式⁽⁶⁾の型式設定は富田紘一氏の研究成果によるもので、対象とされた地域の型式名として地域性把握の大きな役割を果たすものである。また、大分県大野川上・中流域の調査成果からの坂本嘉弘氏による⁽⁷⁾編年があるが、陣内遺跡とも密接な関係にあり、注目しておくなければならない。更に、三万田式土器に焦点を絞って宮内克己氏⁽⁸⁾・沢下孝信氏の論考⁽⁹⁾があり、西平式を含めて磨消縄文系・細線文系・凹線文系の分析の中から様式としての新しい型式設定が行われている。全九州出土土器を対象に検討されたものであり、後期後葉を包括する意味で十分評価される内容であるが、宮内論文にみられる西平式の取扱いに関して、三万田式とは一線を画すべき型式として検討の余地がありそうに考えられる。

本編年では、西平式を3期、三万田式を4期に細分した。土器の変遷は明確に画期をなす場合は別として、実際の生活上は漸移的であり、前時代の産物が新時代の産物に重なり合いながら時に意識的あるいは無意識的に生活に密着しながら移行していくものであろう。ここではあえて3期・4期に区分し位置づけを行ったが、そういった観点からみれば細区分の境界について幾分かの変更は出てくる可能性は多分にあるものと考えている。注口土器等の位置づけについては今後検討しなければならない。

(岩永)

- 註 (1) 口縁部端部製作の技法上の傾向として西平式期には外面からの貼付け、三万田式期になると内面からの貼付けがみられるようである。
- (2) 熊本県西平貝塚にも出土例がある。大分県では高橋信武氏が夏足原遺跡、小牧遺跡からの出土例をあげ、「東九州の地域的小型式の可能性が強い」として「夏足原式」の提唱をしているが（「片船系土器の細分に向けて」1981）、果して東九州を主とする分布状況か検討の余地がある。
- (3) 「陣内式」といわれる土器である。鳥井原遺跡からの出土がある（富田紘一「鳥井原遺跡発掘調

査報告書」1979 熊本市教育委員会。

- (4) 富田絏一氏が「鳥井原式」と型式設定した土器群であるが、「鳥井原式」の中には前記 273の深鉢形土器も含まれている。
 - (5) 富田絏・「三万田式土器」『縄文文化の研究4・縄文土器Ⅱ』1983
 - (6) 注3文献と同じ
 - (7) 坂本嘉弘ほか「大野原の先史遺跡」1984大分県教育委員会
 - (8) 宮内克己「三万田式土器の研究」『古文化談叢第8集』1981
 - (9) 武下孝信「福岡県・黒山遺跡について—三万田式土器の再検討—」『古文化談叢第11集』1983
- ④ この中で問題となるのは、発掘の状況から型式学的方法のみによる編年を行ったので、果して時期的な変遷であるといい切れるのか、分類の段階に留まるものが含まれるのか決定的な証拠を欠いていることである。しかし、第5図に示したように土器を構成する各要素の変遷はスムーズであり、大概編年によって明らかにしていると考ええる。

2. 石器

出土した石器は、石鏃・石錐・打製石斧・打製石鎌のほか多数の剥片が出土している。ここに図示し得たものはごく一部であり、文中において器種の点数等については本来の数値を示した。

(1) 石材

陣内第2遺跡から出土した石材は、表面観察によって9種類に分類した。チャートは灰白色のもの(チャートA)、緑色のもの(チャートB)の2種に分けられる。粘板岩も黒色を呈するもの(粘板岩-A)、淡緑色を呈するもの(粘板岩-B)の2種が認められる。これらのほかに、シルト岩、砂岩、頁岩などは、高千穂周辺の川原で採取可能な石材である。⁽¹⁾また、黒曜石は姫島産と腰岳系産のものが認められ、他地域からの持ち込みと考えられる。

(2) 石 鎌 (第42図、第43図28~39)

56点出土し、このうち完形品は27点である。チャート製が37点と最も多く、逆に姫島産黒曜石製が3点と最も少ない。その他に、砂岩9点、緑泥片岩7点を数える。

形態は、無茎鎌凹基式(1~18)、平基式(19~23、26~30、32~34)、円基鎌(31、35~37)に分類される。欠損状況は、基部が欠損するもの11点(19.6%)、先端部が欠損するもの5点(8.9%)である。39は長さ、重量も他の鎌より突出し石筥として捉えた方がよいかもしれない。

(3) 石 錐 (第43図40、41、43~45)

11点出土し、すべてチャート製である。

40、41は尖頭状石器とも考えられるが、ここでは石錐に分類した。43~45は不定形の剥片の端部を錐状に加工している。

(4) 石斧

石斧は、調整、形態によって三つに大別できる。

I類 (第44図、第45図58、60)

いわゆる打製石斧で、18点出土し7点は欠損品である。石材は、主にシルト岩、砂岩が利用されている。石斧のほとんどに中央付近に大きな剝離痕がみられ、周辺部に2次的な側面加工が施されている。

形態は短冊形(52、57)、楡形(51、56)、それらの中間形態の三つに分類できる。短冊形は砂岩、シルト岩は楡形や中間形態に多く利用されている。

II類 (第45図59、61~63)

すべて粘板岩製で23点認められた。ほとんどが欠損品で、完形と思われるものは1点のみである。板状に節理するという石材の特徴を利用して作られ、従来「扁平打製石斧」と呼ばれていたものである。しかし、本遺跡出土のものは両面あるいは片面に磨痕が認められ、「打製」という言葉は不適当と考えられる。装着痕、使用痕については観察できなかった。

III類 (第45図64)

両側辺部に一部調整が施されるが、全体には磨耗している。磨製石斧はこれ1点しか出土していない。

(5) 打製石鎌 (第45図66~70)

すべて粘板岩製で8点出土し、うち5点は欠損品で基部のみ残存する。

66は右半分の両面に磨痕が観察できる。内湾する刃部には細かな2次調整が施されている。形態から打製石包丁様石器とも考えられる。68~70は、基部に袈りをもった打製石鎌である。何れも内湾刃で、刃部線と袈り込み線が鋭角をなす。69は袈り込み線上の中央に穿孔が施され、柄に固定するために紐あるいは留め具(例えば木の枝、骨角など)が使用されていたと考えられる。⁽²⁾

(6) 円盤状石器 (第45図65)

2点出土し、粘板岩製である。使用痕等については不明である。

(7) 2次加工のある剥片

シルト岩、砂岩が利用されている。

横長剥片を利用したものがほとんどを占める。先端の長辺を刃部として2次加工した横刃

形石器（第47図71～75）や、スクレイパー（77、78）が出土している。横刃形石器は19点、スクレイパー4点が認められるが、さらに増える可能性もある。石器には、自然面や背面に打痕が残されているものが多く、これらの石材が打製石斧の石材と一致することから、原石から素材産出のためにてた剥片を利用したものと考えられよう。この横刃形石器は、刈る（打製石鎌）、摘む（打製石包丁様石器）、削る（スクレイパー）、なめす（石七）など定型化した石器がもつ用途を有した不定形石器として捉えられよう。

(6) 剥片

石器に利用された石材をはじめ、結晶片岩、安山岩、頁岩など多くの剥片が認められる。特に、チャートは自然面を残した大きな剥片からチップまで多量に出土している。粘板岩、シルト岩にも同様な状況が認められる。これは、周辺から採取してきた原石を遺跡内に持ち込み、石器生産が行われていたためと考えられる。逆に、搬入された黒曜石の石器や剥片は非常に少なく、当時貴重品であったことが窺える。

3. 玉類（第43図47、48、49）

丸玉2点、異形勾玉1点（半欠）が出土している。何れも翡翠製である。

小 結

大分県や熊本県に広がる磨研系土器分布圏の一部にはいる当遺跡からも、打製石斧、いわゆる扁平打製石斧、打製石鎌などが出土し、同時期の遺跡にみられるような石器組成を示している。これらのよく話題になる石器の分析はもちろんのこと、定形石器を産出するなかで生じてくる剥片も、簡単な二次加工によって不定形の石器として存在しうることを忘れてはならない。これらの不定形石器は、多目的な用途に利用されていると考えられ今後、使用痕の研究は不可欠であろう。

本遺跡を遺物の廃棄場と考える上で、出土数が非常に少ない（石棒、土偶、玉類などを除いて）あるいは、ほとんど認められないものがある。それは、磨製石斧であり、植物加工品である石皿、磨石、敲石などである。これは、1960年に調査された陣内遺跡⁽³⁾でも同様な傾向が窺える。付近のセベット遺跡⁽⁴⁾、梅ノ木原遺跡⁽⁵⁾ではそれらの石器が出土していることから、廃棄場に廃棄しなかったのか、あるいは何らかの理由で廃棄してはならなかったのではなかろうか。前者の場合、加工品としての石器の耐久年数とのかかわりが考えられる。後者の場合、原石から作り出した石鎌や石斧は、縄文人には神聖なものとして捉えられてきたのかも

しれない。

今後の発掘調査の増加によって、遺物の分析は進み、遺跡の特殊性や普遍性が導かれてくるものと考えられる。

(谷口)

- 註 (1) 「セベット遺跡」『高千穂町文化財調査報告書第3集』高千穂町教育委員会 1984
(2) 高木正文「九州縄文時代の収穫用石器」『古文化論叢』1980
(3) 鈴木重治・賀川光夫「陣内遺跡」『日向遺跡総合調査報告第2集』
宮崎県教育委員会 1962
(4) (1)に同じ
(5) 「梅ノ木原遺跡」『高千穂町文化財調査報告書第4集』高千穂町教育委員会 1985

Ⅳ 結 語

陣内第2遺跡の出土遺物は縄文後期後半を主とするものであった。

陣内遺跡において出土した土偶・石棒はみられなかったものの、内容的にはほぼ同様のものと考えられる。遺跡の立地も車迫台地の一角を占める周辺傾斜地に分布し、熊本・大分などの他地域でも明らかのように後期後半以降の遺跡が台地上に大規模に営まれる傾向から、陣内・陣内第2遺跡を含めて「陣内遺跡」に包括されるとみななければならぬ。今回の調査では発掘面積の狭小から住居跡などの遺構の検出はみえていないが、車迫台地の中央平坦地^註を居住域として陣内・陣内第2の両遺跡を生活廃棄物の廃棄場として営まれたと推定できる。

出土した縄文土器群は、熊本・大分県出土の土器と類似した内容をもっている。このことは、高千穂地方の縄文後期人が黒色磨研土器文化を確かな構成員として荷っていたことを物語っているが、土器を見る限り、この文化は宮崎県の中央部以南の南九州に展開する貝殻文系土器文化とは著しく様相を異にする文化である。本県南部への黒色磨研土器文化の希薄な浸透は西部を縦断する九州山地と北部を横断する山岳地帯がこの文化の南下を阻む大きな要因の一つであったことをも意味するものであろう。

高千穂地方は平坦地が少なく、五ヶ瀬川に開析された小台地群から成る生活環境にある。セベット遺跡・梅ノ木原遺跡などのように決して有利とはいえない地形にもかかわらず、後

期から晩期にかけて営まれた遺跡が点在する中で「陣内遺跡」はこの地における最も優位な拠点集落を形成していたものと考えられる。 (岩永)

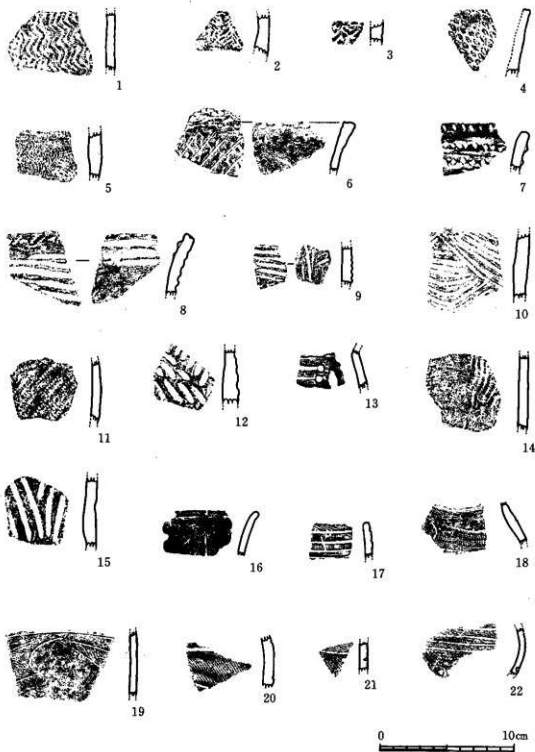
注 単なる不要物の「廃棄」の意味あいだけでなく、陣内遺跡に土偶・石碑の出土がみられたように、祝衛的儀式により万物の再生を願う縄文人の信仰を窺い得る場であり、貝塚をはじめ、中部地方中期を中心に行われた埋葬にも通じるものがある。

おわりに

陣内第2遺跡を整理する過程で下記の方々に御指導御協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。(敬称略)

日高正晴・栗原文蔵・田尻隆介・西健一郎・富田紘一・東光彦・島津義昭・松本健郎・高木正文・江本 直・村井真輝・木崎康弘・清田純一・豊崎晃一・熊本県教育庁文化課・熊本市立熊本博物館・城南町歴史民俗資料館

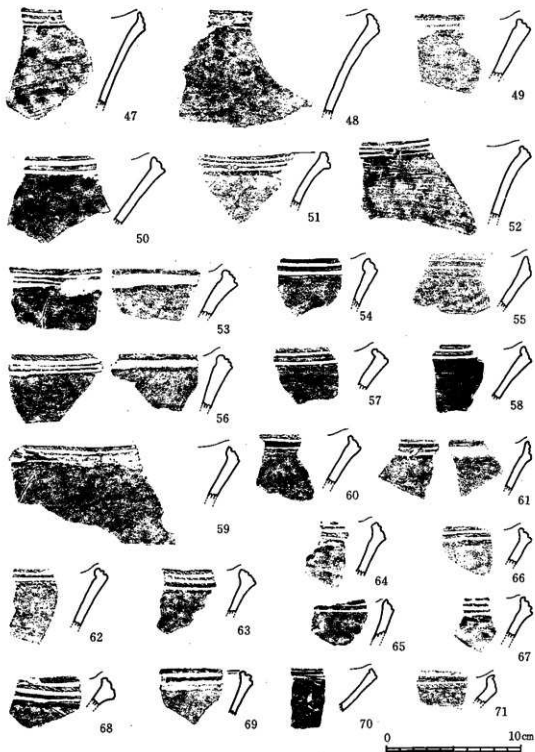
特に、栗原文蔵氏には調査に関し、幾度となく御教示いただいた。



第6图 土器实测图(1)



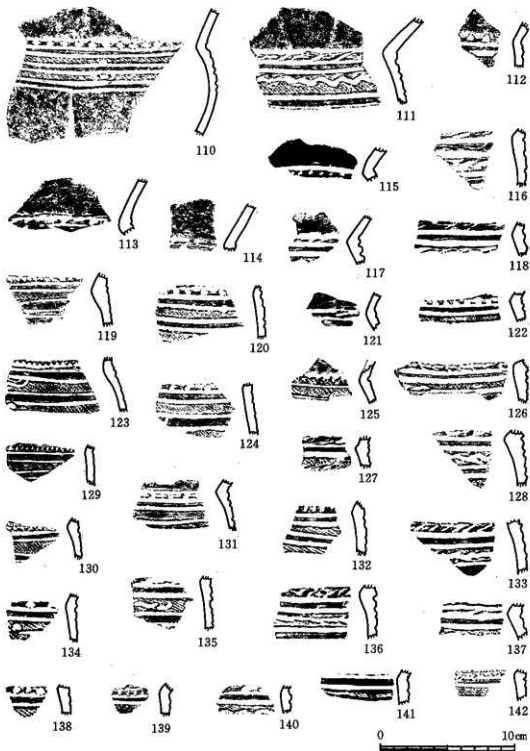
第7图 土器实测图(2)



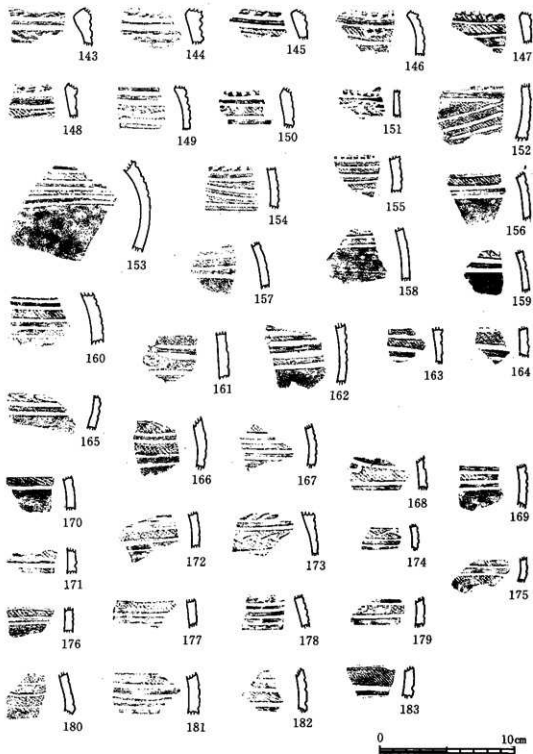
第8图 土器实测图(3)



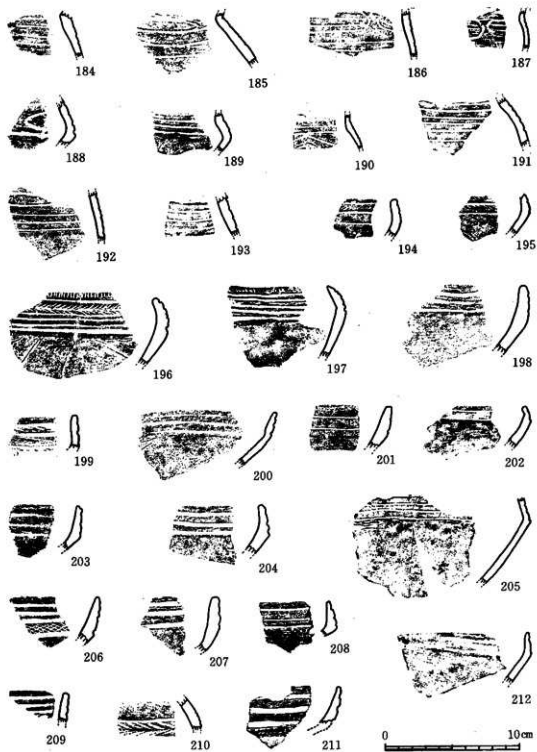
第9图 土器实测图(4)



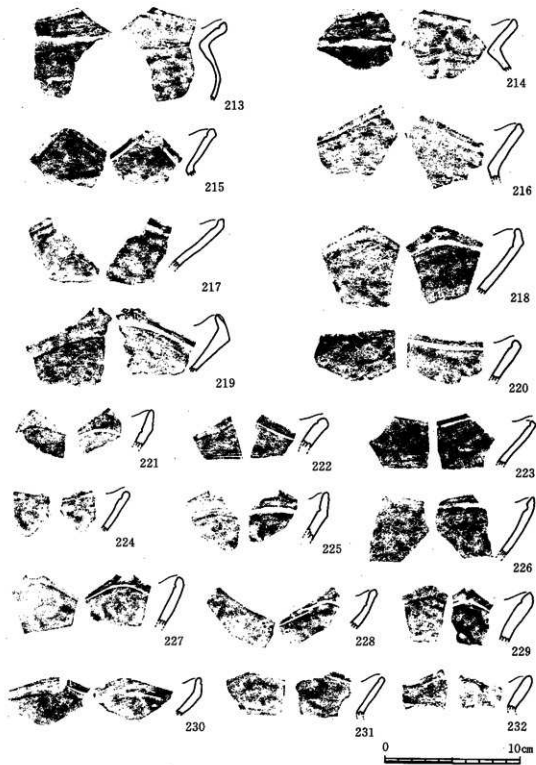
第10图 土器夹测图(5)



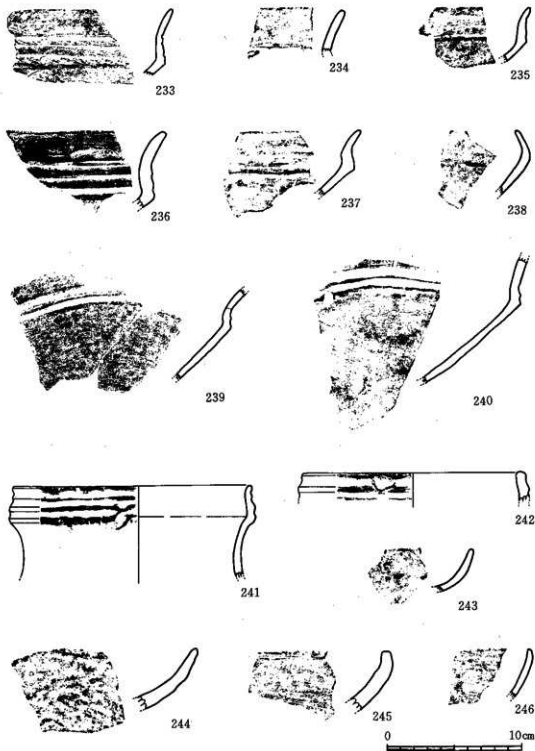
第11图 土器实测图(6)



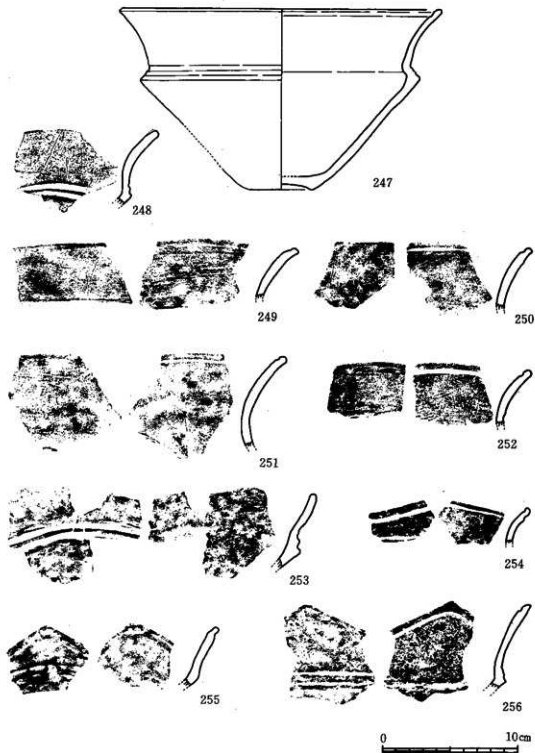
第12图 土器实测图(7)



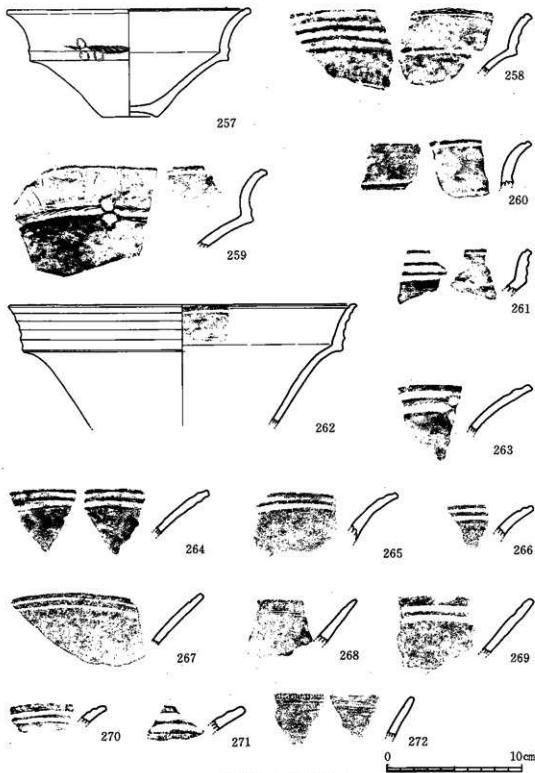
第13图 土器实测图(8)



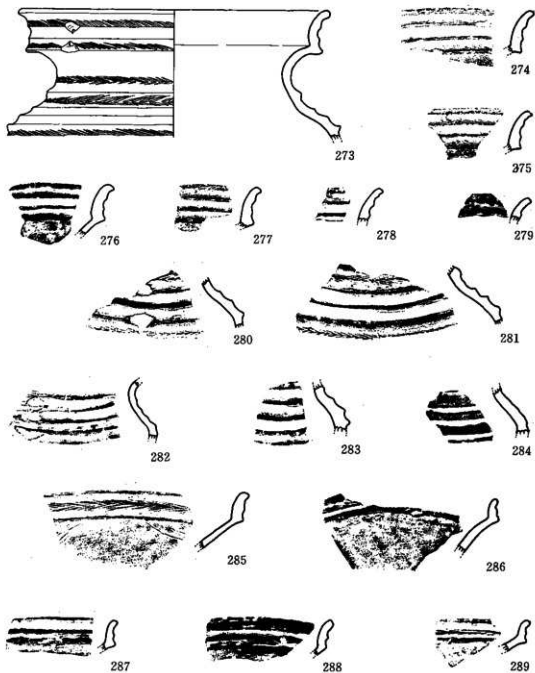
第14图 土器实测图(9)



第15图 土器実測図(10)

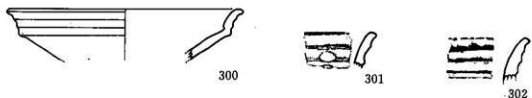
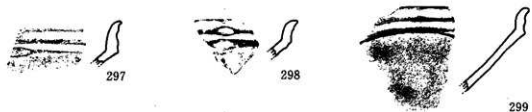
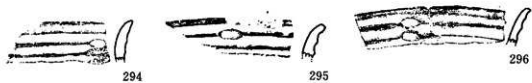
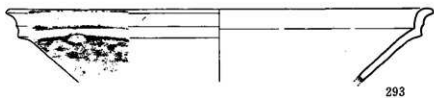
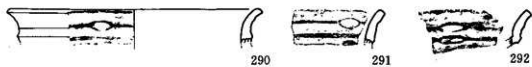


第16图 土器実測図(11)

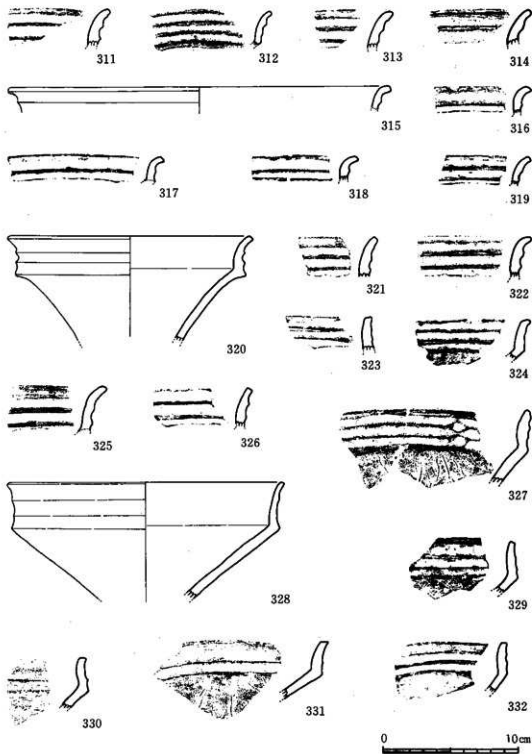


0 10cm

第17图 土器实测图(12)



第18图 土器实测图(13)



第19图 土器实测图(4)



333



334



335



336



337



338



339



340



341



342



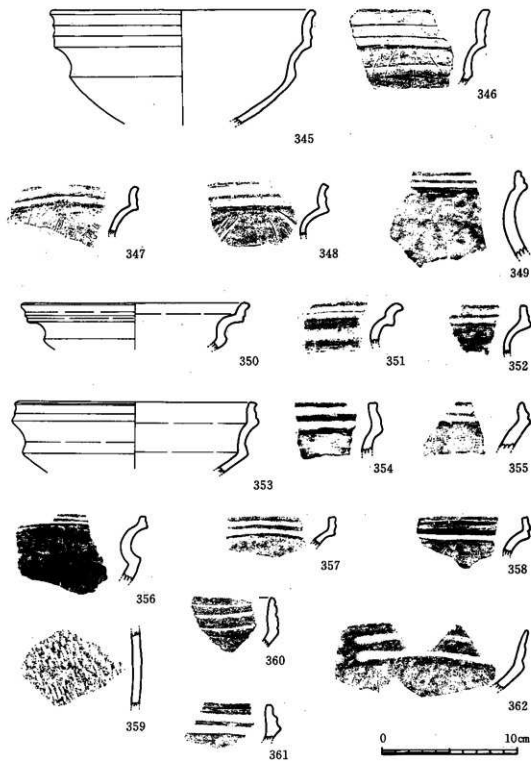
343



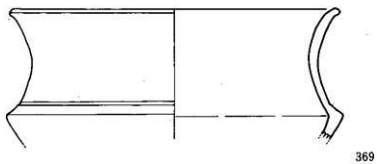
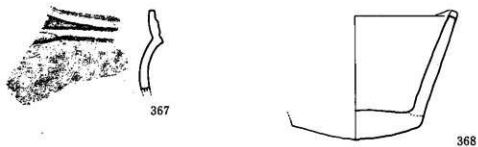
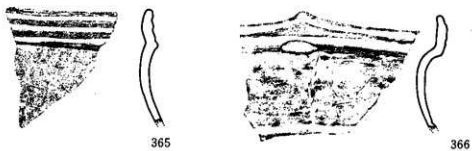
344



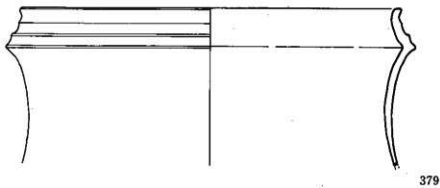
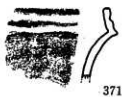
第20图 土器实测图(15)



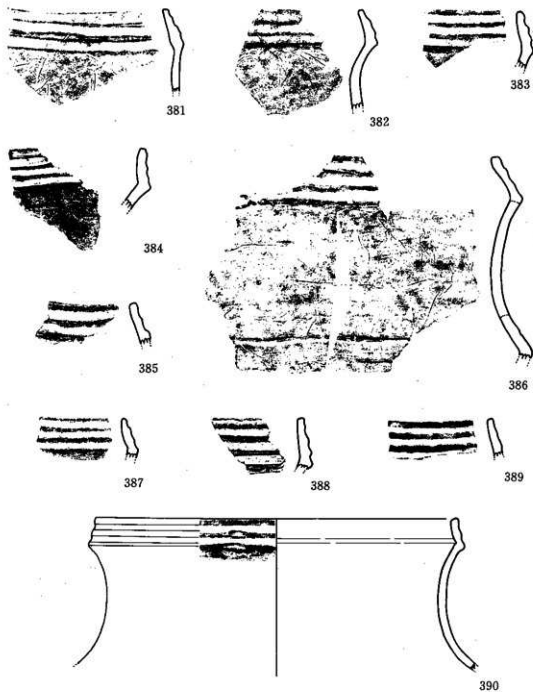
第21图 土器实测图(6)



第22图 土器实测图(17)

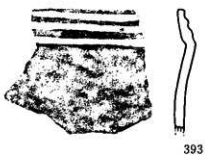
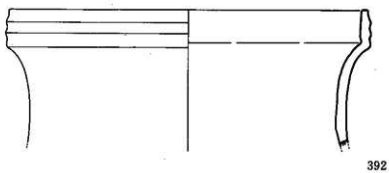
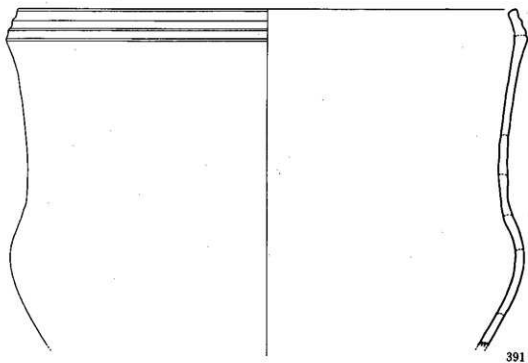


第23图 土器实测图(16)

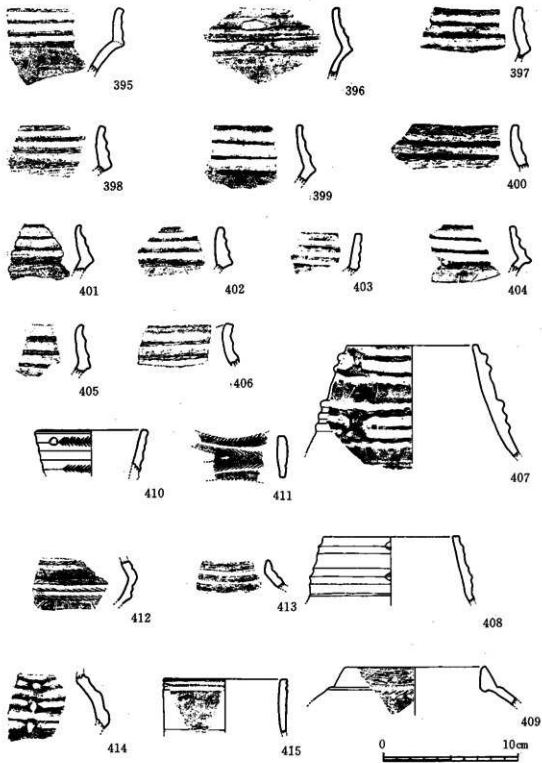


0 10cm

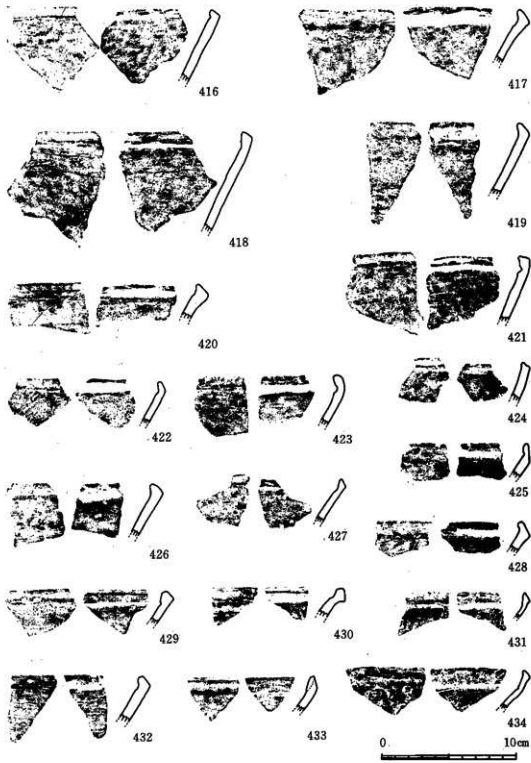
第24图 土器实测图(19)



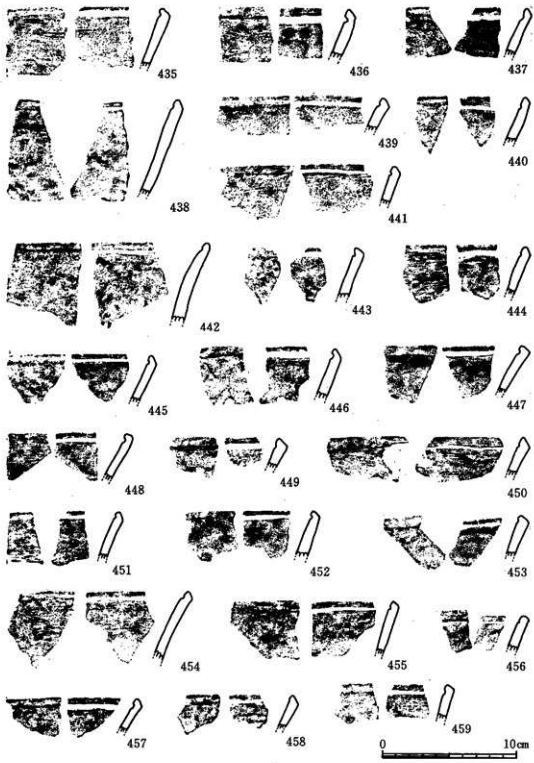
第25图 土器实测图(2)



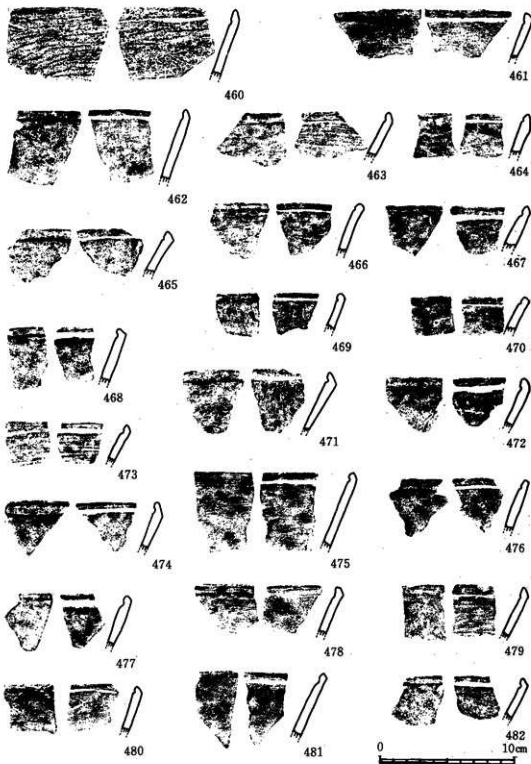
第26图 土器実測图(2)



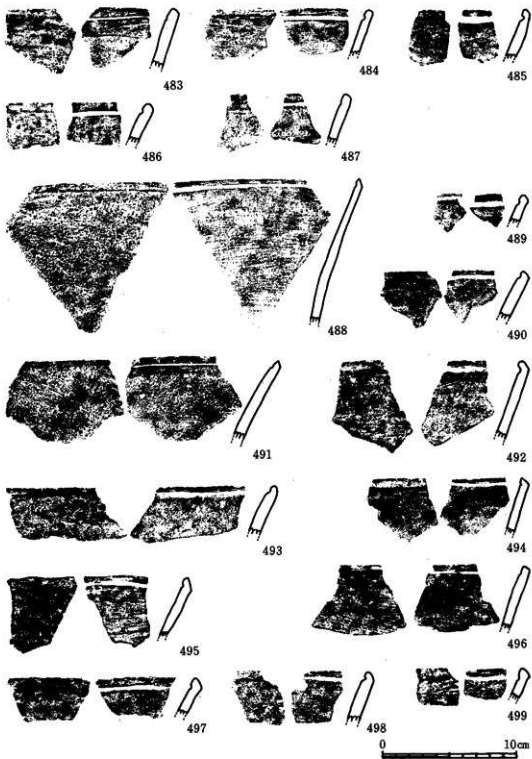
第27图 土器実測図(2)



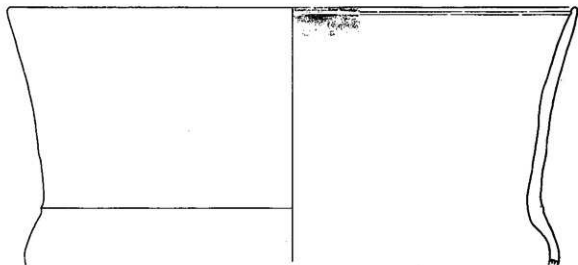
第28图 土器実測图(23)



第29图 土器実測图(24)



第30图 土器实测图(25)



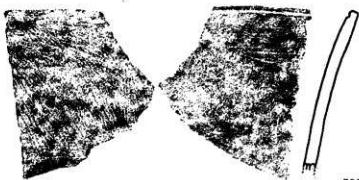
500



501



502



503



504



505



506



507



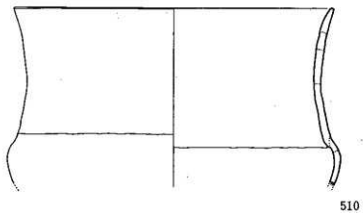
508



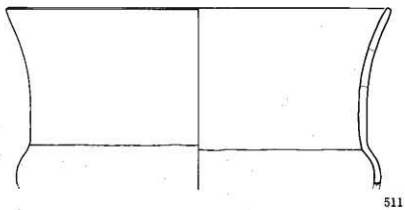
509



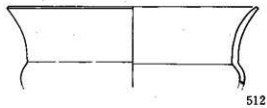
第31图 土器实测图(26)



510



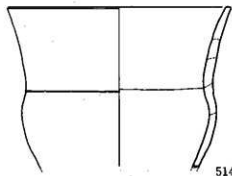
511



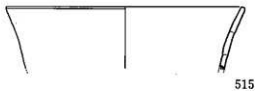
512



513



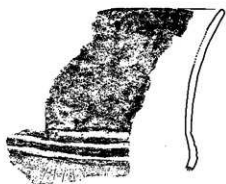
514



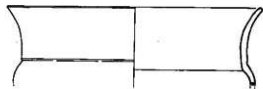
515

0 10cm

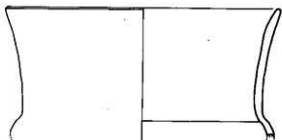
第32图 土器实测图(27)



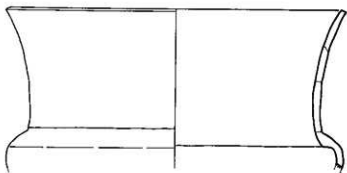
516



517



518



519



520



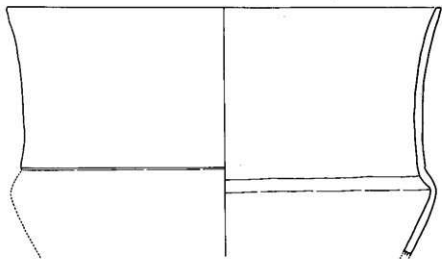
521



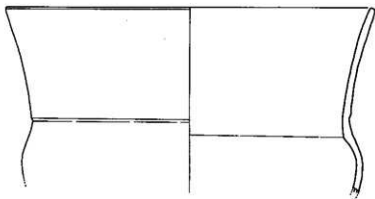
522

0 10cm

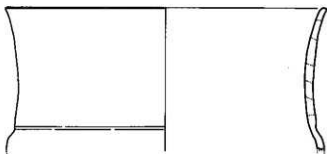
第33图 土器実測图(28)



523



524



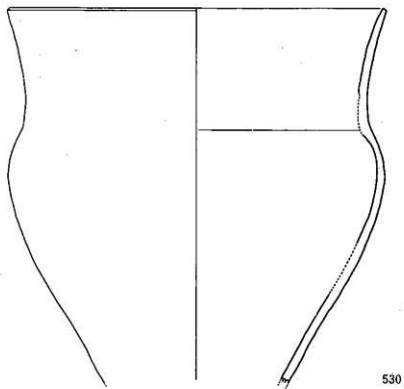
525

0 10cm

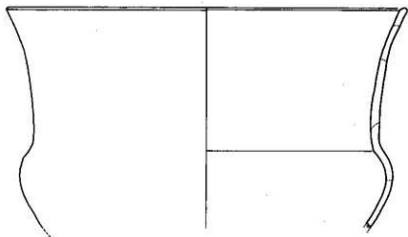
第34图 土器実測区(29)



第35图 土器实测图(3)



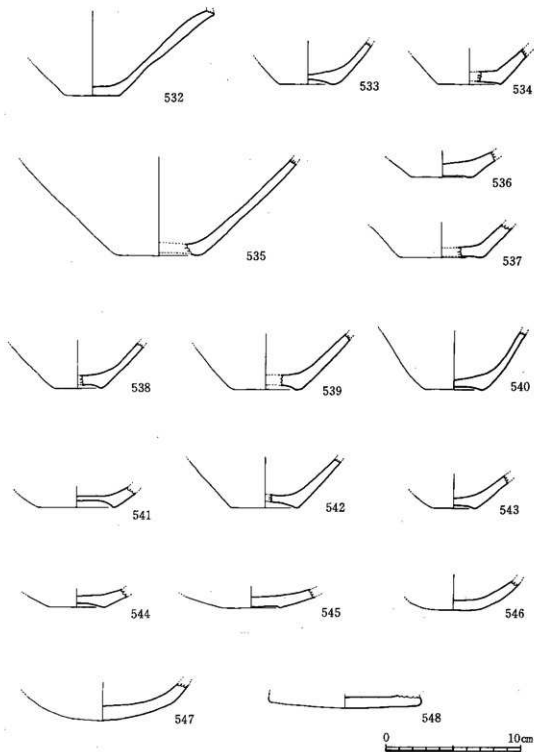
530



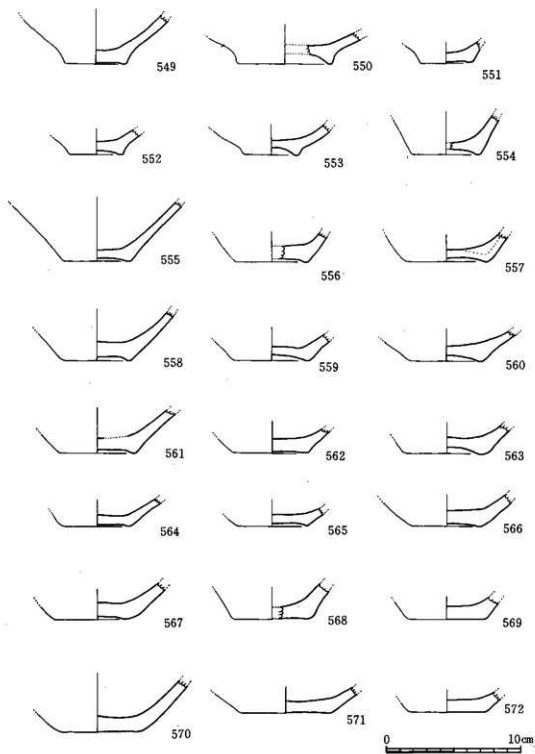
531



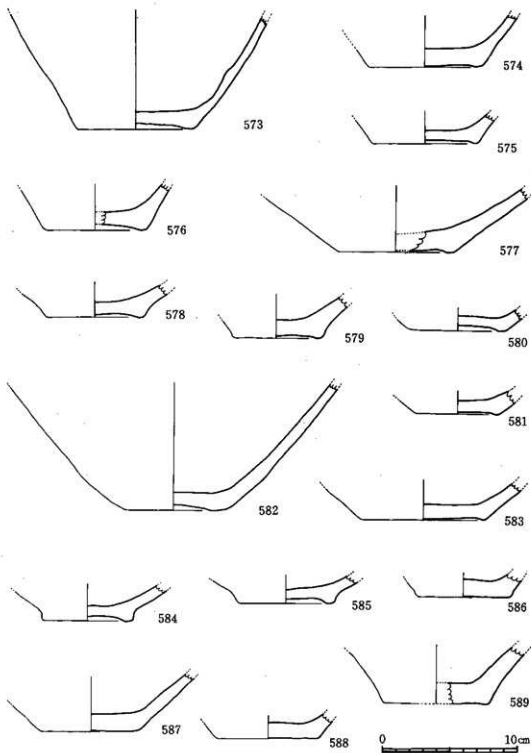
第36图 土器実測図(3)



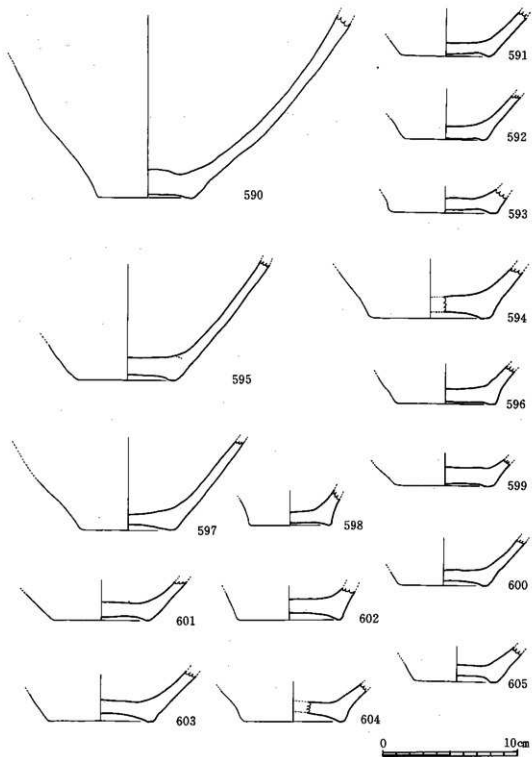
第37图 土器实测图(32)



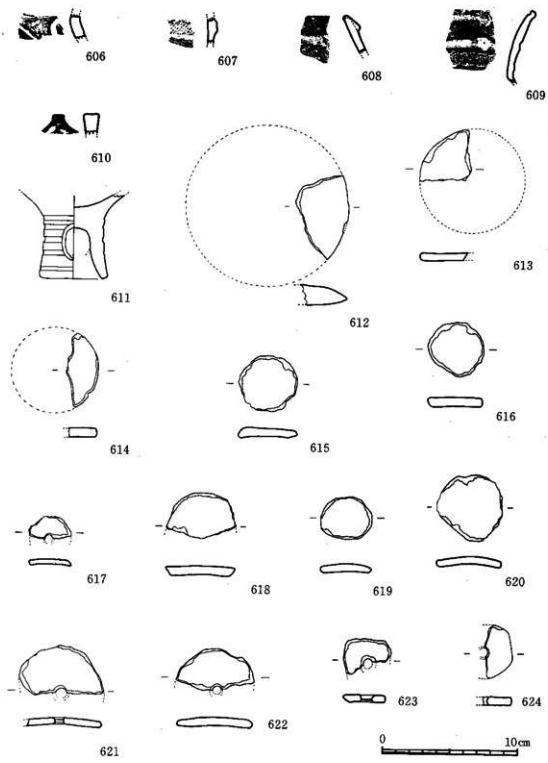
第38图 土器实测图(3)



第39图 土器実測图(34)



第40图 土器实测图(35)



第41図 土器の片および円板状・有孔円板状土製品実測図

第1表 土器観察表

番号	登録番号	時期	部位 (設元口径cm)	調整		文様		胎土 金堂母 片碇石	色		焼成	備考	
				外面	内面	外面	内面		外面	内面			
1	257	早期	胴部			山形押型文			○	黒 (7.5YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/2)	良好	土器実測図① 手向山式?
2	581	早期	胴部			山形押型文			○	にぶい褐 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	
3	1183	早期	胴部			山形押型文				明赤褐 (5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	良好	
4	1037	早期	口縁部			口唇部 横内押型文				灰褐 (7.5YR5/2)	洗炭様 (10YR6/3)	良好	
5	745	早期	胴部			山形押型文?			○	にぶい黄褐 (10YR7/4)	褐灰 (10YR4/1)	良好	
6	225	早期	口縁部			山形押型文 施文斜条痕	口唇部 刺突文ほか			黒褐 (2.5YR3/2)	にぶい黄褐 (10YR6/3)	良好	手向山式
7	1140	早期	口縁部			貼付尖帯斜 突文	口唇部 斜刺目文		○	にぶい赤褐 (5YR5/3)	黒褐 (7.5YR3/2)	良好	
8	725	早期	口縁部			沈線文	貼付尖帯文 口唇刺目文		○	褐 (7.5YR4/3)	黒 (7.5YR6/6)	良好	
9	226	早期	胴部			条痕文	条痕文		△	にぶい褐 (7.5YR6/3)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
10	587	早期	胴部			条痕文			△	黒褐 (7.5YR3/2)	暗褐 (7.5YR3/4)	良好	
11	229	早期	胴部		ナデ	全縄文			○	黒 (7.5YR6/6)	黄褐 (10YR6/3)	良好	
12	785	前期	胴部		ナデ	短凹線文			○	暗褐 (7.5YR3/2)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好	
13	1006	後期	胴部	ナデ	ナデ	沈線文 刺突文			○	にぶい赤褐 (5YR4/3)	赤褐 (5YR4/6)	良好	
14	280	早期	胴部		ナデ	貝殻線 刺突文			○	黄灰 (2.5Y5/1)	にぶい黄褐 (7.5YR6/3)	良好	
15	1033	前期	胴部	ナデ	ナデ	短凹線文			○	にぶい褐 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR7/4)	良好	釜山式
16	1343	後期	口縁部	ケンマ	ていねいな ケンマ	縄文			○	暗褐 (7.5YR3/4)	暗褐 (7.5YR3/4)	良好	漆輪K1式?
17	1261	後期	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	貝殻線文 沈線文			○	にぶい褐 (7.5YR7/2)	にぶい褐 (7.5YR6/4)	良好	
18	1012	後期	胴部	ケンマ	ケンマ	貝殻線文 沈線文		△		灰褐 (7.5YR5/2)	黒 (7.5YR2/1)	良好	
19	742	後期	胴部	ていねいな ケンマ	ケンマ	貝殻線文 沈線文				黒 (10YR2/1)	(10YR2/1)	良好	
20	254	後期	胴部			縄文 沈線文			○	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	
21	229	後期	胴部		ナデ	貝殻線文 沈線文刺突文				灰黄褐 (10YR5/2)	洗炭 (2.5YR7/3)	良好	
22	1036	後期	胴部	ケンマ	ケンマ	貝殻線文 沈線文刺突文			○	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR2/2)	良好	
23	512	西平I	口縁部		あらい ケンマ	縄文 沈線文			○	灰褐 (7.5YR6/2)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	土器実測図②
24	492	西平II	口縁部	ナデ	ナデ	磨削縄文			○	にぶい褐 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR7/4)	良好	
25	545	西平II	口縁部		ケンマ	磨削縄文		△	△	にぶい褐 (7.5YR3/2)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	

番号	登録 番号	時期	部 位 (壁元口部等)	装 置		文 様		絵 土	色 調		施工	備 考		
				外 面	内 面	外 面	内 面		全数毎 丸尺6	外 面			内 面	
26	896	三万田 I	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			〇	にぶい壁 (7.5Y R7/3)	刷灰 (7.5Y R4/1)	良好		
27	195	西平 II	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			〇	にぶい縄 (7.5Y R3/4)	にぶい縄 (7.5Y R5/4)	良好		
28	192	西平 III	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	磨消縄文			〇	暗縄 (7.5Y R3/3)	黒 (7.5Y R2/1)	良好		
29	474	西平 II	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	磨消縄文			〇	黒縄 (10Y R2/2)	灰黄縄 (10Y R5/2)	良好		
30	1347	西平 II	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文		△	△	灰縄 (7.5Y R4/2)	黒縄 (7.5Y R3/1)	良好		
31	1091	三万田 I	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	磨消縄文			〇	にぶい縄 (7.5Y R6/3)	にぶい縄 (7.5Y R8/3)	良好		
32	1120	西平 II	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			〇	暗赤縄 (5 Y R3/3)	赤縄 (5 Y R4/6)	良好		
33	184	西平 III	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文		△	〇	にぶい縄 (7.5Y R8/3)	にぶい縄 (7.5Y R6/2)	良好		
34	484	西平 III	口縁部	ナ デ	ケンマ	磨消縄文	沈線		△	〇	にぶい縄 (7.5Y R6/2)	にぶい縄 (7.5Y R5/2)	良好	
35	708	西平 II	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			〇	黒縄 (5 Y R3/1)	黒縄 (5 Y R3/1)	良好		
36	496	西平 II	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			〇	暗赤縄 (7.5Y R3/3)	暗赤縄 (5 Y R3/3)	良好		
37	114	西平 II	口縁部	ケンマ	ていねいな ケンマ	磨消縄文			△	にぶい縄 (7.5Y R3/3)	暗縄 (7.5Y R3/2)	良好		
38	1080	西平 III	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			〇	にぶい縄 (7.5Y R5/3)	灰縄 (7.5Y R4/2)	良好		
39	180	三万田 I	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	沈線		〇	灰縄 (7.5Y R4/2)	にぶい縄 (7.5Y R5/2)	良好		
40	1475	西平 II	口縁部	ケンマ スス	ていねいな ケンマ	磨消縄文	深凹線		〇	暗縄 (7.5Y R3/3)	暗赤縄 (5 Y R5/6)	良好		
41	883	西平 II	口縁部	ケンマ	ていねいな ケンマ	磨消縄文	深凹線		〇	にぶい黄縄 (10Y R5/3)	灰縄 (7.5Y R4/2)	良好		
42	1345	西平 II	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			△	〇	灰縄 (5 Y R4/2)	にぶい赤縄 (5 Y R4/3)	良好	
43	130	西平 III	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	沈線		〇	にぶい縄 (7.5Y R5/3)	にぶい縄 (7.5Y R3/2)	良好		
44	199	西平 II	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			◎	暗縄 (7.5Y R3/3)	暗縄 (7.5Y R3/4)	良好		
45	1014	三万田 I	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	沈線		〇	△	にぶい黄縄 (10Y R8/3)	灰黄縄 (10Y R5/2)	良好	
46	1252	西平 III	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			〇	灰縄 (7.5Y R5/2)	灰白 (7.5Y R8/2)	良好		
47	484	西平 II	口縁部	ケンマ スス	ケンマ	磨消縄文	凹線		〇	刷灰 (7.5Y R4/1)	灰白 (7.5Y R4/2)	良好	土質実測済	
48	687	西平 II	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	浅凹線		〇	灰縄 (7.5Y R4/2)	刷灰 (7.5Y R4/1)	良好		
49	971	西平 III	口縁部		ケンマ	磨消縄文	深凹線		〇	刷灰 (7.5Y R4/1)	灰黄縄 (10Y R8/2)	良好		
50	1088	西平 III	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	浅凹線		〇	にぶい赤縄 (5 Y R4/3)	にぶい赤縄 (5 Y R4/3)	良好		

番号	登録 番号	時期	部 位 (現元口径mm)	調 整		文 種		耐 土		色 調		焼成	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面	金量等	内径石	外 面	内 面		
51	25	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	灰黄褐色 (10Y R6/2)	灰黄褐色 (10Y R6/2)	良好	
52	66	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	浅凹線			明赤褐色 (5 Y R5/6)	にじみ褐色 (7.5Y R6/4)	良好	
53	1470	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	浅凹線		○	灰褐色 (7.5Y R4/2)	にじみ褐色 (7.5Y R5/3)	良好	
54	1375	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	黒 (7.5Y R2/1)	灰褐色 (7.5Y R4/2)	良好	
55	686	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			△	灰黄褐色 (10Y R4/2)	灰黄褐色 (10Y R6/2)	良好	
56	174	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	凹線		○	にじみ黄褐色 (10Y R7/3)	にじみ黄褐色 (10Y R7/3)	良好	
57	1088	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	灰褐色 (7.5Y R4/2)	灰褐色 (7.5Y R5/2)	良好	
58	1069	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	沈線		○	褐灰 (7.5Y R4/1)	灰褐色 (7.5Y R5/2)	良好	
59	223	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	浅凹線	△	△	黒 (7.5Y R2/1)	にじみ褐色 (7.5Y R5/2)	良好	
60	200	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	浅凹線		△	灰褐色 (5 Y R4/2)	灰黄褐色 (10Y R5/2)	良好	
61	1461	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	浅凹線	△		灰褐色 (7.5Y R4/2)	にじみ褐色 (7.5Y R5/3)	良好	
62	662	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	沈線		○	灰白 (10Y R6/2)	褐灰 (7.5Y R4/1)	良好	
63	989	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	凹線		○	灰褐色 (5 Y R5/2)	にじみ褐色 (5 Y R6/4)	良好	
64	521	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ ス ス	ケンマ	磨消縄文	凹線		○	灰褐色 (5 Y R4/2)	にじみ赤褐色 (5 Y R5/3)	良好	
65	593	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ ていむい女 ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	黒褐色 (5 Y R3/1)	黒褐色 (5 Y R2/1)	良好	
66	698	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	浅凹線		○	にじみ褐色 (7.5Y R6/3)	褐色 (7.5Y R6/3)	良好	
67	318	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	明赤褐色 (5 Y R5/6)	明赤褐色 (5 Y R5/6)	良好	
68	183	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	暗褐色 (7.5Y R3/4)	にじみ褐色 (7.5Y R6/4)	良好	
69	52	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	暗赤褐色 (5 Y R3/4)	暗赤褐色 (5 Y R3/4)	良好	
70	1065	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ ス ス	ケンマ	磨消縄文	沈線		○	灰褐色 (5 Y R4/2)	にじみ赤褐色 (5 Y R4/3)	良好	
71	705	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	黒褐色 (5 Y R3/1)	灰褐色 (5 Y R4/2)	良好	
72	911	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文		△	△	にじみ褐色 (5 Y R6/3)	にじみ褐色 (7.5Y R7/3)	良好	土器実物図0
73	1250	西平Ⅱ	口縁部			磨消縄文	凹線		△	褐色 (5 Y R6/6)	褐色 (5 Y R7/6)	良好	
74	1117	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			△	にじみ褐色 (7.5Y R6/3)	にじみ褐色 (7.5Y R6/3)	良好	
75	304	三万田Ⅰ	口縁部		ケンマ	磨消縄文			○	黒褐色 (5 Y R3/1)	黒褐色 (5 Y R2/1)	良好	

番号	登録番号	時期	部位 (取元口径mm)	調 整		文 様		給 土 全量時 角尺	色 調		焼成	備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面		外 面	内 面			
76	32	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	黒梅 (5YR3/1)	黒梅 (5YR3/1)	良好	
77	960	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	流紋		△	におい梅 (5YR6/0)	におい梅 (7.5YR7/0)	良好	
78	184	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ ス ス	ケンマ	磨消縄文			△	灰梅 (5YR4/2)	灰梅 (5YR4/2)	良好	
79	500	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ ス ス	ケンマ	磨消縄文	流紋		○	におい赤梅 (5YR5/0)	黒梅 (5YR3/1)	良好	
80	507	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	暗赤梅 (5YR3/2)	暗赤梅 (5YR3/2)	良好	
81	151	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ		磨消縄文			△	におい梅 (7.5YR6/2)	におい梅 (7.5YR6/2)	良好	
82	990	西平Ⅱ	口縁部	ナ デ	ケンマ	磨消縄文			○	赤梅 (5YR4/0)	赤梅 (5YR4/0)	良好	
83	517	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	黒灰 (5YR4/1)	におい梅 (7.5YR7/0)	良好	
84	1285	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	流紋		△	黒梅 (7.5YR3/1)	黒 (7.5YR2/1)	良好	
85	535	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	黒梅 (5YR2/2)	暗赤梅 (5YR3/2)	良好	
86	523	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	黒梅 (7.5YR3/1)	灰梅 (7.5YR5/2)	良好	
87	999	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ナ デ	磨消縄文 剥欠文	流紋		○	梅 (5YR6/0)	梅 (5YR6/0)	良好	
88	213	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	流紋		○	暗赤梅 (5YR3/0)	暗赤梅 (5YR3/0)	良好	
89	718	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			△	梅 (7.5YR7/5)	梅 (7.5YR7/5)	良好	
90	1006	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文	流紋			梅 (5YR6/0)	梅 (5YR6/0)	良好	
91	1131	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ		磨消縄文	流紋		○	灰梅 (5YR4/2)	におい赤梅 (5YR5/0)	良好	
92	1504	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ		磨消縄文			○	におい黄梅 (10YR7/3)	におい黄梅 (10YR7/3)	良好	
93	1090	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	におい赤梅 (5YR4/2)	におい梅 (7.5YR7/3)	良好	
94	227	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文				におい黄梅 (10YR7/3)	灰黄梅 (10YR5/2)	良好	
95	878	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	黒梅 (10YR3/1)	灰黄梅 (10YR6/2)	良好	
96	1274	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文				におい赤梅 (2.5YR4/0)	灰梅 (5YR4/2)	良好	
97	1177	西平Ⅱ	口縁部			磨消縄文			○	赤梅 (2.5YR4/0)	赤梅 (2.5YR4/0)	良好	
98	1175	西平Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	におい梅 (7.5YR6/2)	におい梅 (7.5YR7/3)	良好	
99	37	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	流紋文			○	黒梅 (7.5YR3/1)	におい梅 (7.5YR5/3)	良好	
100	550	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			△	黒 (7.5YR2/1)	黒 (7.5YR2/1)	良好	焼結

番号	登録 番号	時期	部 位 (取元口種別)	図 案		文 様		装 土		色 調		装成	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面	全周	内周	外 面	内 面		
101	1182	西平直	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			△	黒赤褐色 (5YR2/3)	暗赤褐色 (5YR3/2)	良好	
102	501	西平直	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線文 斜刺文	沈線		△	灰褐色 (5YR4/2)	にがい骨 (5YR5/4)	良好	
103	1447	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	にがい骨 (7.5YR5/4)	灰褐色 (7.5YR4/2)	良好	
104	547	西平直	口縁部	ケンマ		沈線文	沈線		△	にがい赤褐色 (5YR5/4)	にがい赤褐色 (5YR5/4)	良好	
105	548	西平直	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	にがい骨 (7.5YR6/3)	にがい骨 (7.5YR6/3)	良好	洗体
106	487	西平直	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	磨消縄文			△	灰褐色 (5YR5/2)	明細灰 (7.5YR4/1)	良好	
107	322	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線文 斜刺文			○	にがい骨 (5YR6/3)	明細灰 (7.5YR1/2)	良好	
108	1120	西平Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	にがい骨 (5YR6/4)	にがい骨 (5YR6/4)	良好	
109	1141	西平Ⅰ	口縁部	ス ス	ケンマ	磨消縄文			○	黒褐色 (5YR2/1)	黒褐色 (5YR2/1)	良好	
110	741	西平直	頸 部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文 斜刺文			○	暗褐色 (7.5YR3/3)	にがい赤褐色 (5YR5/4)	良好	土器実数(25) No. 153に接合
111	243	西平直	頸 部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文 波状文			○	にがい骨 (5YR4/2)	にがい骨 (7.5YR3/3)	良好	
112	244	西平直～直	頸 部	ケンマ	ナ デ	磨消縄文 斜刺文				灰褐色 (5YR4/2)	にがい骨 (7.5YR5/3)	良好	
113	1404	西平直～直	頸 部	ケズリ	ケンマ	沈線文 斜刺文			△	にがい骨 (7.5YR5/4)	にがい赤褐色 (7YR5/4)	良好	
114	1007	西平直	頸 部	ケンマ	ケンマ	斜刺目文			○	暗褐色 (7.5YR4/1)	灰褐色 (7.5YR5/2)	良好	
115	1403	西平直～直	頸 部	ケンマ	ケンマ	沈線文 斜刺文			○	にがい赤褐色 (5YR4/4)	にがい赤褐色 (5YR4/4)	良好	
116	743	西平直	頸 部		ケンマ	磨消縄文 波状文			○	にがい骨 (7.5YR5/3)	灰褐色 (7.5YR4/2)	良好	
117	555	西平直	頸 部	ケンマ	ナ デ	沈線文 斜刺目文			○	灰褐色 (7.5YR5/2)	灰白 (10YR6/2)	良好	
118	1147	西平直	頸 部		ナ デ	沈線文 斜刺目文			○	灰白 (5YR8/1)	灰白 (5YR8/2)	良好	
119	1005	三万田Ⅰ	頸 部		ケンマ	磨消縄文 斜刺文			○	にがい骨 (7.5YR6/3)	にがい骨 (7.5YR6/3)	良好	
120	558	西平直	頸 部		ナ デ	磨消縄文 斜刺文			○	にがい骨 (10YR6/3)	暗灰褐色 (2.5Y5/2)	良好	
121	765	西平直	頸 部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	沈線文 斜刺目文			△	暗褐色 (7.5YR4/1)	にがい赤褐色 (5YR5/4)	良好	
122	1148	西平直	頸 部		ケンマ	磨消縄文 斜刺文			△	にがい赤褐色 (2.5YR4/4)	にがい骨 (7.5YR6/3)	良好	
123	250	西平直	頸 部		ケンマ ナ デ	磨消縄文 斜刺文			△	黒 (7.5YR2/1)	にがい骨 (7.5YR6/3)	良好	
124	1008	西平直	頸 部		ケンマ	磨消縄文 斜刺文			○	にがい赤褐色 (5YR5/3)	にがい骨 (7.5YR6/4)	良好	
125	1388	西平直	頸 部		ケンマ	磨消縄文 斜刺文			○	にがい赤褐色 (5YR5/3)	黒褐色 (7.5YR3/2)	良好	No. 147と接合

番号	登録 番号	時期	部位 (現元口徑cm)	製 量		文 様		胎土	色 調		状況	備 考	
				外面	内面	外面	内面		金銀等内面	外面			内面
126	245	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				△	灰褐 (5YR4/2)	灰青褐 (10YR5/2)	良好	
127	246	西平Ⅱ	頸部		ナデ				○	黒 (7.5YR2/1)	灰青褐 (10YR5/2)	良好	
128	747	西平Ⅱ	頸部		ナデ				○	にじみ赤褐 (5YR5/2)	にじみ褐 (7.5YR5/3)	良好	
129	248	三万田Ⅰ	頸部		ナデ				○	灰褐 (5YR4/2)	にじみ褐 (7.5YR5/3)	良好	
130	242	三万田Ⅰ	頸部		ナデ				○	にじみ黄褐 (10YR6/3)	にじみ黄褐 (10YR6/3)	良好	
131	745	西平Ⅱ～Ⅲ	頸部		ケンマ				○	灰褐 (5YR4/2)	明赤褐 (5YR5/5)	良好	
132	1298	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				△	褐灰 (7.5YR4/1)	にじみ褐 (5YR6/3)	良好	
133	1424	西平Ⅱ	頸部	ナデ	ナデ				○	にじみ褐 (5YR6/3)	にじみ褐 (5YR6/4)	良好	
134	354	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				○	灰褐 (7.5YR5/2)	明褐灰 (7.5YR7/2)	良好	
135	282	西平Ⅱ	頸部		ナデ				○	にじみ褐 (7.5YR5/3)	にじみ褐 (7.5YR7/4)	良好	No. 140と接合
136	1145	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				○	黒 (7.5YR2/1)	灰青褐 (7.5YR6/3)	良好	
137	1295	西平Ⅱ	頸部		ナデ				○	にじみ褐 (5YR6/3)	にじみ褐 (5YR6/3)	良好	
138	1150	西平Ⅱ～Ⅲ	頸部		ナデ				○	暗赤褐 (5YR3/6)	赤褐 (5YR4/6)	良好	
139	255	西平Ⅱ～Ⅲ	頸部		ナデ				△	灰褐 (5YR4/2)	灰褐 (5YR4/2)	良好	
140	234	西平Ⅱ	頸部		ナデ				○	にじみ褐 (7.5YR6/3)	にじみ褐 (7.5YR6/3)	良好	No. 136と接合
141	557	西平Ⅱ～Ⅲ	頸部		ナデ				△	黒 (10YR2/1)	にじみ黄褐 (10YR6/3)	良好	
142	772	三万田Ⅰ	頸部		ナデ				○	暗褐 (7.5YR3/3)	にじみ赤褐 (5YR5/4)	良好	
143	241	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				○	暗赤灰 (2.5YR3/1)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	土器実装(10)
144	761	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				○	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (7.5YR8/2)	良好	
145	358	西平Ⅱ～Ⅲ	頸部		ナデ				○	灰褐 (7.5YR4/2)	にじみ赤褐 (5YR4/3)	良好	
146	758	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				○	黒褐 (2.5Y3/1)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	
147	563	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				○	にじみ赤褐 (5YR4/3)	黒褐 (7.5YR3/2)	良好	No. 125と接合
148	771	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				△	黒褐 (7.5YR3/2)	灰褐 (7.5YR5/2)	良好	
149	750	西平Ⅱ～Ⅲ	頸部		ケンマ				○	灰青褐 (10YR5/2)	にじみ黄褐 (10YR7/3)	良好	
150	1599	西平Ⅱ	頸部		ケンマ				○	にじみ赤褐 (5YR5/3)	暗赤褐 (5YR3/2)	良好	

番号	登録番号	時期	部 位 (元元口係等)	題 意		文 種		動 土		色 調		検 成	備 考		
				外 面	内 面	外 面	内 面	全扉	内附石	外 面	内 面				
151	559	西平Ⅱ	題 部		ケンマ	唐語雑文 制状文				○	黒編 (5YR3/1)	灰編 (5YR4/2)	良好		
152	234	西平Ⅰ	題 部			ナ デ 唐語雑文 制状文				△	黒編 (5YR3/1)	増赤編 (5YR3/6)	良好		
153	1287	西平Ⅱ	制 部	ケンマ	ケンマ	唐語雑文 円形押点文				○	増赤編 (5YR3/2)	にぶい赤編 (5YR4/4)	良好	No.110に接合	
154	737	西平Ⅱ	題 部		ケンマ	唐語雑文 制状文				○	灰黄編 (10YR4/2)	灰黄編 (10YR6/2)	良好		
155	774	西平Ⅱ	題 部		ケンマ	唐語雑文 制状文				△	増赤編 (5YR3/2)	灰編 (5YR4/2)	良好		
156	1365	西平Ⅱ	題 部	ケンマ		ナ デ 唐語雑文				○	黒編 (7.5YR3/1)	にぶい編 (7.5YR5/4)	良好		
157	566	西平Ⅱ	題 部	ケンマ	ケンマ	唐語雑文				○	黒編 (5YR3/1)	にぶい赤編 (5YR4/3)	良好		
158	1435	西平Ⅱ	題 部	ケンマ		ナ デ 唐語雑文 波状文				○	黒編 (7.5YR2/2)	にぶい編 (7.5YR3/3)	良好		
159	1491	西平Ⅱ	題 部	ケンマ		ナ デ 唐語雑文 波状文				○	黒編 (5YR2/2)	にぶい編 (7.5YR1/3)	良好		
160	1013	西平Ⅱ	制 部			ナ デ 唐語雑文			△	○	増赤 (3.5YR3/1)	にぶい編 (7.5YR7/3)	良好		
161	756	西平Ⅱ～Ⅲ	題 部		ケンマ	唐語雑文 制状文				○	黒編 (2.5Y3/1)	増赤 (7.5YR4/1)	良好		
162	236	西平Ⅱ	題 部	ケンマ		ナ デ 唐語雑文				○	編 (7.5YR4/4)	明赤編 (5YR5/6)	良好		
163	1194	西平Ⅱ	題 部			ナ デ 唐語雑文				○	にぶい編 (7.5YR6/3)	にぶい編 (7.5YR7/3)	良好		
164	706	西平Ⅱ～Ⅲ	題 部			ナ デ 唐語雑文			△	△	にぶい編 (7.5YR5/3)	にぶい編 (7.5YR5/3)	良好		
165	230	西平Ⅱ	題 部	ケンマ	ケンマ	唐語雑文 波状文				○	黒編 (7.5YR3/1)	灰黄編 (10YR5/2)	良好		
166	238	西平Ⅱ	制 部		ケンマ	唐語雑文			△	△	灰黄編 (10YR5/2)	灰黄編 (10YR5/2)	良好		
167	1157	西平Ⅱ	題 部		ケンマ	唐語雑文				○	黒編 (7.5YR3/2)	黒編 (7.5YR5/1)	良好		
168	1292	西平Ⅱ	題 部		ケンマ	唐語雑文 押点文				○	△	黒編 (5YR3/1)	黒編 (5YR3/1)	良好	
169	575	西平Ⅱ	題 部	ケンマ	ケンマ	唐語雑文					にぶい赤編 (5YR5/4)	増赤 (7.5YR3/1)	良好		
170	1402	西平Ⅱ	題 部	ケンマ		ナ デ 唐語雑文					黒編 (7.5YR2/2)	編 (7.5YR4/3)	良好		
171	253	西平Ⅱ	題 部			ナ デ 唐語雑文 波状文				○	増赤 (7.5YR3/3)	にぶい編 (7.5YR6/4)	良好		
172	551	西平Ⅱ	題 部		ケンマ	唐語雑文				△	灰編 (5YR4/2)	明赤編 (5YR1/5)	良好		
173	746	西平Ⅱ	題 部		ケズリ	唐語雑文 波状文				○	黒編 (7.5YR3/1)	灰編 (7.5YR4/2)	良好		
174	570	西平Ⅱ	題 部			ナ デ 唐語雑文 波状文					にぶい赤編 (5YR5/4)	にぶい編 (7.5YR3/3)	良好		
175	1156	三田田Ⅰ	題 部	ケンマ	ケンマ	唐語雑文				○	灰編 (5YR4/2)	黒編 (5YR2/1)	良好		

番号	登録番号	時期	部位 (現元口径cm)	装 量		文 種		胎 上		色 別		状況	備 考
				外面	内面	外面	内面	全量	内胎	外面	内面		
176	252	西平Ⅲ	胴部		ケンマ	磨消縄文			○	にぶい縹 (7.5YR8/4)	にぶい縹 (7.5YR8/4)	良好	
177	1153	西平Ⅲ	胴部		ナデ	磨消縄文			○	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい縹 (5YR6/4)	良好	
178	1381	三万田Ⅰ	胴部		ケンマ	沈澱文 斜削縄文		△	△	灰褐 (7.5YR6/2)	縹灰 (7.5YR8/1)	良好	
179	536	西平Ⅲ	胴部		ケンマ	磨消縄文 剥奪文			○	にぶい縹 (7.5YR5/4)	にぶい縹 (7.5YR5/3)	良好	
180	379	三万田Ⅰ	胴部		ケンマ	磨消縄文 斜削縄文			○	縹赤褐 (5YR3/3)	赤褐 (5YR4/3)	良好	
181	1390	西平Ⅲ	胴部		ケンマ	磨消縄文				灰褐 (5YR4/2)	にぶい縹 (7.5YR5/3)	良好	
182	1151	西平Ⅲ～Ⅳ	胴部		ナデ	磨消縄文			△	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい縹 (7.5YR6/4)	良好	
183	260	西平Ⅲ～Ⅳ	胴部		ケンマ	磨消縄文			○	縹褐 (5YR3/1)	にぶい縹 (10YR6/3)	良好	
184	287	三万田Ⅰ	胴部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	沈澱文			○	黒 (7.5YR2/1)	黒褐 (5YR2/1)	良好	土器夾層内
185	574	三万田Ⅰ	胴部	ていねいな ケンマ	あらい ケンマ	沈澱文			○	黒 (7.5YR2/1)	黒 (7.5YR2/1)	良好	
186	1155	三万田Ⅰ	胴部	ていねいな ケンマ	ナデ	沈澱文 X字文			○	縹褐 (10YR3/1)	灰黄褐 (10YR5/2)	良好	
187	582	三万田Ⅰ	胴部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	沈澱文 X字文			○	灰褐 (7.5YR5/2)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
188	762	三万田Ⅰ	胴部	ていねいな ケンマ	ナデ	沈澱文 曲線文			○	縹灰 (10YR4/1)	にぶい縹 (10YR7/3)	良好	
189	107	三万田Ⅱ	胴部	ケンマ	ケンマ	沈澱文			○	にぶい縹 (10YR7/3)	黒 (7.5YR2/1)	良好	
190	777	三万田Ⅰ	胴部	ナデ	ナデ	沈澱文			○	にぶい縹 (7.5YR8/3)	にぶい縹 (7.5YR6/3)	良好	
191	1897	三万田Ⅰ	胴部	ていねいな ケンマ	ナデ	沈澱文			○	にぶい縹 (7.5YR6/3)	にぶい縹 (10YR7/2)	良好	
192	749	三万田Ⅰ	胴部	ていねいな ケンマ	ナデ	沈澱文			○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰白 (7.5YR8/2)	良好	
193	1302	三万田Ⅰ	胴部	ケンマ	ケンマ	沈澱文			○	黒褐 (5YR3/1)	にぶい赤褐 (5YR1/3)	良好	
194	1008	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	細線文 沈澱文			○	縹 (7.5YR6/3)	縹 (7.5YR6/3)	良好	
195	231	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	細線文 沈澱文			○	にぶい縹 (7.5YR6/3)	にぶい縹 (7.5YR6/3)	良好	
196	226	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	細線文(沈文) 沈澱文			○	にぶい縹 (7.5YR6/3)	にぶい縹 (7.5YR6/2)	良好	
197	1368	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	沈澱文			○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	
198	478	三万田Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	磨消縄文			○	縹赤褐 (5YR3/3)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	
199	373	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	細線文 細線文			○	黒 (10YR2/1)	縹灰 (10YR4/1)	良好	
200	752	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈澱 貼付文		◎	○	にぶい縹 (10YR7/3)	にぶい縹 (10YR7/3)	良好	

番号	登録 番号	時期	部 位 (原元口種名)	調 整		文 様		絵 土	色 調		焼成	備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面		金草母	内底色			外 面
201	202	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線文			○	襷 (7.5Y R4/6)	襷 (7.5Y R6/6)	良好	
202	648	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	沈線文			○	にがい黄襷 (10Y R7/3)	にがい黄襷 (10Y R7/3)	良好	
203	200	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線文			△	襷 (7.5Y R4/3)	襷 (7.5Y R4/3)	良好	
204	905	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線文			○	にがい襷 (7.5Y R5/3)	にがい襷 (7.5Y R5/3)	良好	
205	589	一万田Ⅱ	箱 部	ケンマ	ケンマ	沈線文			△	にがい襷 (7.5Y R6/4)	にがい襷 (7.5Y R5/3)	良好	
206	1009	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	細線文 格子文			○	暗赤襷 (5 Y R3/6)	暗赤襷 (5 Y R3/3)	良好	
207	84	三万田Ⅱ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	細線文			△	灰襷 (5 Y R4/3)	にがい襷 (7.5Y R5/3)	良好	
208	35	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線文 沈線文			○	灰襷 (5 Y R4/2)	暗襷 (7.5Y R3/3)	良好	
209	294	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線文 細線文			○	襷 (7.5Y R3/1)	黒襷 (7.5Y R3/1)	良好	
210	302	三万田Ⅱ	胴 部	ケンマ	ケンマ	細線状伏文			○	襷 (7.5Y R4/4)	襷 (7.5Y R4/4)	良好	
211	50	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	細線文			○	赤襷 (5 Y R4/6)	赤襷 (5 Y R4/6)	良好	
212	476	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	細線文			○	にがい赤襷 (5 Y R4/4)	にがい赤襷 (5 Y R5/4)	良好	
213	1297	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ナ デ		沈線		○	黒襷 (10Y R3/2)	にがい黄襷 (10Y R6/3)	良好	土質調査済
214	1306	二万田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	ケンマ		浅沈線		○	襷 (7.5Y R4/3)	にがい襷 (7.5Y R5/4)	良好	
215	879	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	にがい黄襷 (10Y R6/3)	灰黄襷 (10Y R6/2)	良好	
216	180	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	あらい ケンマ		浅沈線		○	灰襷 (7.5Y R4/2)	灰襷 (7.5Y R4/2)	良好	
217	35	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ		浅沈線		○	明襷灰 (7.5Y R7/2)	にがい襷 (7.5Y R7/4)	良好	
218	495	三万田Ⅰ	口縁部	ナ デ	ナ デ		沈線		○	にがい襷 (7.5Y R7/4)	灰襷 (7.5Y R4/2)	良好	
219	1400	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	波源形列糸	沈線		△	にがい襷 (7.5Y R5/3)	にがい襷 (7.5Y R5/3)	良好	
220	919	三万田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	ナ デ		沈線		○	灰襷 (5 Y R4/2)	にがい襷 (5 Y R6/4)	良好	
221	173	三万田Ⅰ	口縁部	ナ デ	あらい ケンマ		沈線		△	灰襷 (7.5Y R5/2)	にがい襷 (7.5Y R5/3)	良好	
222	422	三万田Ⅰ	口縁部	ナ デ	ナ デ		沈線		○	襷 (7.5Y R6/6)	襷 (7.5Y R6/6)	良好	
223	433	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	黒襷 (10Y R3/1)	にがい黄襷 (10Y R6/3)	良好	
224	898	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	にがい襷 (7.5Y R3/3)	灰襷 (7.5Y R5/2)	良好	
225	700	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	押正文 沈線文	沈線		○	暗襷 (7.5Y R3/4)	暗襷 (7.5Y R3/4)	良好	

番号	登録番号	時期	部位 (原元山採石)	調整		文様		給土	色調		焼成	備考	
				外面	内面	外面	内面		全量	内径			外面
225	378	三万田Ⅰ	口縁部	あらいケンマ	ナ デ		沈線		△	黒地 (7.5Y R3/2)	にぶい (7.5Y R5/3)	良好	
227	1496	二万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	にぶい (7.5Y R7/3)	黒灰 (7.5Y R8/1)	良好	
228	1460	二万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		△	にぶい赤 (5 Y R5/4)	黒 (5 Y R3/1)	良好	
229	961	二万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	明赤 (5 Y R5/6)	明赤 (5 Y R5/6)	良好	
230	664	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	波線彫刻 沈線文			○	黒 (10Y R3/1)	黒 (10Y R3/1)	良好	
231	1522	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ			沈線		○	にぶい赤 (5 Y R3/4)	にぶい赤 (5 Y R3/4)	良好	
232	927	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ				○	黒 (7.5Y R3/2)	黒 (7.5Y R3/1)	良好	
233	30	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	彫線文 斜交文	沈線		△	黒 (7.5Y R3/1)	灰 (7.5Y R5/2)	良好	七郎高瀬(3)
234	1497	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文			○	黒 (5 Y R6/6)	灰 (7.5Y R5/2)	良好	
236	488	三万田Ⅲ	口縁部	(黒化)			沈線文		○	にぶい (7.5Y R5/3)	にぶい (7.5Y R6/4)	やや 不良	
236	1369	三万田Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	彫線文			○	暗 (7.5Y R3/3)	暗 (7.5Y R3/3)	良好	
237	415	二万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ				○	黒 (5 Y R2/1)	暗赤 (5 Y R3/3)	良好	
238	166	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ				○	黒 (10Y R5/1)	黒 (10Y R5/1)	良好	
239	664	三万田Ⅲ	胴へ体部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文			○	にぶい赤 (10Y R6/2)	灰 (10Y R5/2)	良好	
240	304	三万田Ⅲ	胴へ体部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広い彫線文			△	暗赤 (5 Y R3/3)	赤 (5 Y R4/2)	良好	
241	1041	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文 押点文			○	にぶい赤 (5 Y R3/1)	黒 (5 Y R3/1)	良好	
242	647	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文 扇状文			○	にぶい (10Y R6/2)	にぶい (10Y R6/3)	良好	
243	197	二万田	口縁部	ケンマ	ケンマ				△	黒 (7.5Y R3/1)	黒 (7.5Y R2/2)	良好	
244	961	三万田	口縁部	あらい ケンマ	ケンマ				○	灰 (7.5Y R4/2)	黒 (7.5Y R2/2)	良好	
245	1004	三万田	口縁部	ケズリ	あらい ケンマ				○	黒 (5 Y R3/1)	明赤 (5 Y R5/6)	良好	
246	1377	三万田	口縁部	ナ デ	ケンマ				○	黒 (10Y R3/1)	黒 (10Y R3/1)	良好	
247	319	三万田Ⅱ	完形 (23.6)	ケンマ	ケンマ				◎	にぶい赤 (5 Y R4/3)	灰 (5 Y R4/2)	良好	十郎高瀬(3)
248	1427	三万田Ⅱ	胴部	ていねいな ケンマ	ケンマ	彫線文			○	黒 (7.5Y R2/1)	にぶい赤 (5 Y R4/3)	良好	
249	328	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ				○	暗赤 (5 Y R3/2)	にぶい赤 (5 Y R3/4)	良好	
250	211	三万田Ⅱ	口縁部		ケンマ		沈線		○	黒 (7.5Y R7/6)	にぶい (7.5Y R7/4)	良好	

番号	記録番号	時期	部位 (使用口径cm)	調整		文種		胎土		色調		焼成	備考
				外面	内面	外面	内面	金灰時	内灰時	外面	内面		
251	212	三万田Ⅱ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		沈線		○	灰 (7.5YR7/6)	にがい (7.5YR7/4)	良好	
252	1107	三万田Ⅱ	口縁部	ナデ			沈線		○	にがい赤褐 (5YR5/4)	にがい (5YR6/3)	良好	
253	397	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	刷線文			○	黒 (5YR6/5)	黒 (7.5YR7/5)	良好	
254	893	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	刷線文	沈線		○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	
255	1258	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	洗刷線文			○	にがい赤褐 (2.5YR4/4)	赤褐 (5YR4/6)	良好	
256	77	三万田Ⅱ	口縁部	(割)		沈線文	沈線			にがい赤褐 (5YR4/4)	灰褐 (5YR4/2)	良好	
257	2	三万田Ⅱ	底元完形 (18.7)	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線羽状文 押点文	沈線		○	黒 (10YR2/1)	黒 (10YR2/1)	良好	土器実例図3
258	479	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線文 刷線線文	沈線		○	黒 (10YR2/1)	黒 (10YR2/1)	良好	
259	962	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線羽状文 押点文	沈線		○	黒 (10YR2/1)	黒褐 (10YR3/1)	良好	
260	305	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線羽状文	沈線		○	暗赤褐 (5YR3/2)	黒褐 (10YR3/2)	良好	
261	1100	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	刷線線文	沈線		○	にがい黄緑 (10YR7/2)	黒褐 (10YR6/2)	良好	
262	1538	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線の線文	沈線		△	にがい黄緑 (10YR5/3)	黒褐 (10YR3/2)	良好	
263	1534	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線の線文 刷線の線文			△	黒褐 (10YR3/1)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	
264	1078	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線文	刷線文		○	にがい赤褐 (5YR4/3)	にがい赤褐 (5YR4/4)	良好	
265	82	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ		刷線文		○	黒褐 (7.5YR2/2)	黒 (7.5YR2/1)	良好	接合
266	130	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ		刷線文		○	暗赤褐 (7.5YR2/3)	黒 (7.5YR2/1)	良好	
267	45	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ		洗沈線文		△	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
268	85	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ		刷沈線文		△	黒 (7.5YR2/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
269	84	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ		刷線文			褐 (7.5YR4/3)	褐 (7.5YR4/3)	良好	
270	519	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ		刷線文		○	暗赤褐 (5YR3/2)	暗赤褐 (5YR3/3)	良好	
271	541	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ		刷線文		○	暗赤褐 (5YR3/2)	にがい赤褐 (5YR4/4)	良好	
272	734	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ		口唇部刷線文 刷沈線文		○	黒 (5YR7/5)	灰 (7.5YR7/5)	良好	
273	1220	三万田Ⅱ	口縁部 (22.8)	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線羽状文 刷線文			○	灰褐 (7.5YR4/2)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	土器実例図3
274	728	三万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線文 刷線の線文			○	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
275	271	二万田Ⅱ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	刷線文 刷線の線文			△	黒褐 (5YR2/1)	黒褐 (5YR2/1)	良好	

番号	登録番号	時期	部位 (張元口徑cm)	調整		文様		胎土	色		焼成	備考
				外面	内面	外面	内面		金襴	丸窓		
276	644	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線文 細線文		○	黒梅 (10YR4/1)	相沢 (7.5YR4/1)	良好	
277	1489	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線文 幅広細線文		○	黒梅 (5YR4/1)	黒梅 (5YR3/1)	良好	
278	1090	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線文 幅広細線文		○	にじみ梅 (5YR7/4)	梅 (5YR4/6)	良好	
279	1201	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線文 幅広細線文		○	にじみ梅 (7.5YR5/3)	黒梅 (7.5YR3/1)	良好	
280	1453	三万田Ⅲ	肩部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線羽状文 扇状文		○	灰梅 (7.5YR5/2)	灰梅 (7.5YR5/2)	良好	
281	1452	三万田Ⅲ	肩部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線羽状文 幅広細線文		○	梅灰 (10YR5/1)	梅灰 (7.5YR4/1)	良好	
282	1092	三万田Ⅲ	肩部	ていねいな ケンマ	ケンマ	扇状肩文 幅広細線文		○	黒梅 (5YR2/1)	黒梅 (5YR3/1)	良好	
283	1291	三万田Ⅲ	肩部	ケンマ	ナデ	幅広細線文		○	黒梅 (7.5YR3/1)	黒梅 (7.5YR3/1)	良好	
284	1303	三万田Ⅲ	肩部	ていねいな ケンマ	ケンマ	細線文		○	にじみ赤梅 (5YR4/2)	灰梅 (5YR4/2)	良好	
285	644	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線羽状文		○	黒梅 (7.5YR3/1)	にじみ黄梅 (1JYR7/3)	良好	
286	976	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線羽状文 印線文		○	にじみ黄梅 (10YR7/2)	灰黄梅 (10YR5/2)	良好	No. 289に接合
287	1280	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線羽状文 幅広細線文		◎	黒梅 (7.5YR3/1)	相沢 (7.5YR4/1)	良好	
288	963	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線羽状文 押点文		○	黒梅 (7.5YR3/1)	灰梅 (7.5YR4/2)	良好	
289	1103	三万田Ⅲ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線羽状文 印線文		○	灰黄梅 (10YR6/2)	にじみ黄梅 (7.5YR6/3)	良好	No. 289に接合
290	1036	三万田Ⅳ (18.6)	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		○	黒 (7.5YR2/1)	黒 (7.5YR2/1)	良好	土質実測図D3
291	57	三万田Ⅳ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		○	にじみ梅 (7.5YR5/4)	黒 (7.5YR2/1)	良好	
292	1123	三万田Ⅳ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		○	にじみ赤梅 (5YR5/3)	灰梅 (7.5YR5/2)	良好	
293	970	三万田Ⅳ (31.7)	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		△	灰梅 (7.5YR4/2)	にじみ梅 (7.5YR7/4)	良好	
294	27	三万田Ⅳ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		○	暗梅 (7.5YR3/3)	梅 (7.5YR4/3)	良好	
295	1283	三万田Ⅳ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		△	にじみ梅 (7.5YR6/3)	灰梅 (7.5YR5/2)	良好	
296	49	三万田Ⅳ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		○	黒梅 (7.5YR2/2)	にじみ梅 (7.5YR5/3)	良好	
297	709	三万田Ⅳ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		○	灰梅 (7.5YR4/2)	灰梅 (7.5YR4/2)	良好	
298	515	三万田Ⅳ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		○	黒梅 (7.5YR3/1)	灰梅 (7.5YR5/2)	良好	
299	1436	三万田Ⅳ	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広細線文		△	にじみ梅 (7.5YR4/2)	黒梅 (7.5YR2/2)	良好	
300	1345	三万田Ⅳ (17.8)	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広細線文		○	暗赤梅 (5YR3/6)	暗赤梅 (5YR3/6)	良好	

番号	登録 番号	時期	部位 (元口係等)	調査		文様		胎土	色		焼成	備考
				外面	内面	外面	内面		全周	内角		
301	38	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広の線文		○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (5YR4/2)	良好	
302	496	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		△	暗赤褐 (5YR3/3)	暗赤褐 (5YR3/4)	良好	
303	674	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広の線文		○	黒褐 (7.5YR3/1)	黒 (7.5YR4/4)	良好	
304	711	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	におい黄褐 (10YR7/4)	におい黄褐 (10YR7/4)	良好	
305	685	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	黒褐 (10YR3/1)	黒褐 (10YR3/1)	良好	
306	713	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	凹線文		○	黒褐 (7.5YR3/2)	黒 (7.5YR1.7/1)	良好	
307	877	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	良好	
308	1374	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	褐灰 (7.5YR4/1)	黒 (7.5YR1.7/1)	良好	
309	721	三方田井	口縁部	ケンマ	ケンマ	幅広の線文		○	におい赤褐 (5YR5/4)	におい黄 (5YR6/3)	良好	
310	1084	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	暗赤褐 (5YR3/2)	黒褐 (7.5YR3/2)	良好	
311	215	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	土曜美術館蔵
312	701	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	凹線文		○	暗赤褐 (5YR3/4)	暗赤褐 (5YR3/4)	良好	
313	81	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		△	黒褐 (5YR3/1)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	
314	688	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	黒 (10YR2/1)	黒 (10YR2/1)	良好	
315	1083	三方田井 (28.3)	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	褐灰 (7.5YR4/1)	黒 (10YR2/1)	良好	
316	710	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	黒褐 (10YR3/1)	黒褐 (10YR3/1)	良好	
317	1050	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	におい褐 (7.5YR5/2)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
318	1049	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	褐 (7.5YR4/3)	褐 (7.5YR4/3)	良好	
319	504	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
320	475	三方田井 (17.8)	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	黒褐 (7.5YR3/2)	黒褐 (7.5YR3/2)	良好	
321	45	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		△	灰褐 (7.5YR4/2)	におい黄褐 (10YR6/3)	良好	
322	661	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		△	灰黄褐 (10YR4/2)	黒 (7.5YR1.7/1)	良好	
323	491	御模式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	凹線文		○ △	黒褐 (7.5YR3/1)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	
324	1285	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	におい赤褐 (5YR4/4)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	
325	1379	三方田井	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文		○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	

番号	農地 番号	時 期	部 位 (透光口径mm)	調 整		文 様		給 土	色 調		境 況	備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面		全葉時	内 時			外 面
308	1130	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 縞点凹線文			○	黒縞 (7.5YR3/2)	黒縞 (7.5YR3/2)	良好	
307	19	三万田III	口縁部	ケンマ	ケンマ	押点文 浅縞点凹線文			○	暗赤縞 (5YR3/4)	暗赤縞 (5YR3/4)	良好	
308	13	三万田IV	口縁部 (20.3)	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	縞点凹線文			△	にじみ縞 (7.5YR6/4)	灰縞 (7.5YR5/2)	良好	
309	1119	巻筒式	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	浅縞点凹線文				黒縞 (7.5YR3/2)	にじみ赤縞 (5YR4/0)	良好	
330	690	三万田IV	口縁部	ケンマ	ケンマ	縞点凹線文			○	明赤縞 (5YR5/6)	明赤縞 (5YR5/6)	良好	
331	670	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	縞点凹線文			○	にじみ黄縞 (10YR7/8)	灰黄縞 (10YR4/2)	良好	
332	1097	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	縞点凹線文			○	暗赤縞 (5YR3/3)	にじみ縞 (7.5YR6/4)	良好	
333	6	三万田II	口縁部 (33.5)	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	にじみ赤縞 (5YR4/0)	にじみ赤縞 (5YR4/0)	良好	土器実装部内
334	646	三万田II	口縁部 (38.0)	ケンマ	ケンマ	押点文 凹線文		△	○	にじみ黄縞 (10YR5/3)	縞灰 (10YR4/1)	良好	
335	15	三万田II	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	にじみ縞 (7.5YR6/4)	縞 (5YR6/6)	良好	
336	514	巻 筒	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	細凹線文			○	暗赤縞 (5YR3/2)	黒縞 (5YR3/1)	良好	
337	477	三万田II	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	凹線文			○	にじみ赤縞 (5YR4/3)	明赤縞 (5YR5/6)	良好	
338	10	巻筒式	口縁部	ケンマ	あらい ケンマ	凹線文			○	黒縞 (7.5YR2/2)	縞 (7.5YR4/3)	良好	
339	486	巻筒式	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	黒縞 (5YR3/1)	にじみ赤縞 (5YR4/5)	良好	
340	659	三万田II	口縁部	ケンマ	ケンマ				○	浅黄縞 (10YR8/3)	浅黄縞 (10YR8/2)	良好	
341	502	三万田IV	口縁部	ナ デ	ナ デ	縞点凹線文			○	暗赤縞 (5YR3/2)	にじみ赤縞 (5YR4/0)	良好	
342	1256	巻筒式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	凹線文			△	黒縞 (5YR3/1)	灰縞 (7.5YR5/2)	良好	
343	361	巻筒式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ				○	暗赤縞 (5YR3/3)	暗赤縞 (5YR3/2)	良好	
344	944	巻筒式	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ				○	にじみ縞 (7.5YR6/3)	明縞灰 (7.5YR7/2)	良好	
345	657	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	縞点凹線文			○	にじみ縞 (7.5YR5/3)	にじみ縞 (10YR5/2)	良好	土器実装部内
346	26	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	縞点凹線文			○	黒縞 (5YR3/1)	灰縞 (7.5YR4/2)	良好	
347	676	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	凹線文			○	灰黄縞 (10YR5/2)	灰黄縞 (10YR5/2)	良好	
348	675	三万田IV	口縁部	ケンマ	ケンマ	縞点凹線文			○	にじみ赤縞 (5YR4/4)	灰黄縞 (10YR4/2)	良好	
349	1243	巻 筒	口縁部	ケンマ	ケンマ	浅縞文			○	黒縞 (5YR2/1)	黒縞 (7.5YR3/1)	良好	
350	1531	巻筒式 (18.5)	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	縞灰 (7.5YR4/1)	黒縞 (7.5YR3/1)	良好	

番号	登録番号	時期	部位 (復元口徑mm)	彫 基		文 様		胎土	色 調		完成	備 考	
				外面	内面	外面	内面		金銀等	朱石			外面
351	669	三方田IV	口縁部	ていねいな ケンマ, 33	ていねいな ケンマ				○	黒 (7.5YR3/1)	黒 (7.5YR2/1)	良好	
352	1042	御瓶式	口縁部	ケンマ	ケンマ	漆繪式彫線文			○	黒褐 (5YR3/1)	黒褐 (5YR3/1)	良好	
353	1248	御瓶式	口縁～底部	ケンマ	ケンマ	彫線文			△	黒褐 (10YR3/2)	黒褐 (10YR3/2)	良好	
354	508	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文		○	○	灰褐 (7.5YR4/2)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
355	1278	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	彫線文			○	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
356	1041	晩 期	口縁部	ケンマ	ケンマ	浅彫線文			○	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
357	680	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文			○	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
358	1383	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文			○	暗褐 (7.5YR3/3)	にがい雫 (7.5YR5/3)	良好	
359	509	晩 期	胴 部		ナ ズ	組織編(かご目)			○	黒 (10YR2/1)	にがい黄緑 (10YR7/3)	良好	
360	54	晩 期	口縁部	ていねいな ケンマ, 33	ていねいな ケンマ	沈線文			○	黒 (7.5YR2/1)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	
361	996	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文			○	黒 (10YR2/1)	黒 (10YR2/1)	良好	
362	1487	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文			○	黒 (7.5YR1.7)	黒 (7.5YR1.7)	良好	
363	11	三方田II (23.5)	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	沈線文			○	灰褐 (5YR4/2)	褐 (7.5YR4/3)	良好	土器実態図33
364	1128	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文			○	黒 (7.5YR2/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
365	28	三方田II	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	沈線文			○	にがい赤褐 (5YR4/4)	にがい赤褐 (5YR4/4)	良好	
366	1544	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押圧文 彫線文			○	にがい雫 (5YR6/4)	にがい雫 (5YR6/4)	良好	
367	671	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押圧文 内面文			○	灰褐 (7.5YR4/2)	にがい雫 (7.5YR5/3)	良好	
368	942	三方田	口縁～底部	あらい ケンマ	あらい ケンマ				○	にがい赤褐 (5YR5/4)	にがい雫 (7.5YR5/3)	良好	
369	130	御瓶式 (24.1)	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ				○	黒 (7.5YR2/1)	黒褐 (10YR3/1)	良好	
370	975	御瓶式	口縁部	ケンマ	ケンマ	彫線文			○	にがい雫 (7.5YR6/4)	にがい雫 (7.5YR6/4)	良好	土器実態図34
371	1397	御瓶式	口縁部	ケンマ	ケンマ	彫線文			◎	灰灰 (10YR4/1)	灰灰 (10YR3/5)	やや 不良	
372	1367	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	彫線文			○	灰褐 (5YR4/2)	灰褐 (5YR4/2)	良好	
373	696	御瓶式 (27.0)	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押圧文 幅広彫線文			○	灰褐 (7.5YR3/2)	にがい黄緑 (10YR6/3)	良好	
374	1087	三方田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	押圧文 幅広彫線文			○	灰褐 (10YR4/1)	灰灰 (10YR4/2)	良好	
375	1459	三方田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広彫線文			○	にがい雫 (7.5YR7/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	

番号	登録番号	時期	部位 (復元口径mm)	鑿		文		土		色		状況	備考	
				外面	内面	外面	内面	全長	内径	外面	内面			
376	714	新橋式	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	凹線文			○	灰褐 (7.5YR4/2)	黒 (7.5YR2/1)	良好		
377	536	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ケンマ	押点文 幅広凹線文			○	にぶい褐 (7.5YR6/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好		
378	14	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広凹線文			○	黒褐 (5YR3/1)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好		
379	652	三万田IV	口縁部 (28.3)	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広凹線文		○	○	黒 (10YR2/1)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好		
380	860	三万田IV	口縁部 (30.0)	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	押点文 幅広凹線文			○	にぶい褐 (7.5YR5/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好		
381	692	新橋式	口縁部	ケンマ	ナ デ	凹線文			△	暗赤褐 (5YR3/4)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	良好	土器実測図28	
382	872	新橋式	口縁部	ていねいな ケンマ	ナ デ	凹線文			○	黒 (7.5YR4/3)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好		
383	1354	新橋式	口縁部		ケンマ	凹線文			○	暗赤褐 (5YR3/3)	赤褐 (5YR4/6)	良好		
384	1079	新橋式	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	黒 (7.5YR4/3)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好		
385	1485	新橋式	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			△	暗褐 (7.5YR3/3)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好		
386	699	新橋式	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	灰褐 (5YR4/2)	灰褐 (5YR5/2)	良好		
387	980	新橋式	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	黒 (7.5YR4/3)	褐 (7.5YR4/3)	良好		
388	208	新橋式	口縁部	ケンマ	ナ デ	凹線文			△	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	良好		
389	1449	新橋式	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好		
390	886	新橋式	口縁部 (26.8)	ケンマ	ケンマ	押点文 凹線文		○	△	黒 (7.5YR7/3)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	不良		
391	650	新橋式	口縁部 ～胴部 (37.0)	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	にぶい黄褐 (10YR6/3, 7/3)	にぶい黄褐 (10YR6/3, 7/3)	良好	土器実測図29	
392	1533	新橋式	口縁部 (26.5)	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	にぶい褐 (7.5YR5/3)	黒褐 (10YR2/2)	良好		
393	435	新橋式	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	暗赤褐 (5YR3/3)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	良好		
394	481	新橋式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広凹線文			○	暗赤褐 (5YR3/3)	暗赤褐 (5YR3/2)	良好		
395	29	新橋式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広凹線文			○	にぶい褐 (7.5YR5/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	土器実測図 (21)	
396	584	三万田IV	口縁部	ケンマ	ケンマ	押点文 幅広凹線文			○	赤褐 (5YR4/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好		
397	507	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広凹線文			○	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄褐 (10YR7/2)	良好		
398	965	新橋式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	凹線文			○	にぶい褐 (7.5YR6/3)	褐 (5YR4/1)	良好		
399	209	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広凹線文			○	黒 (7.5YR4/3)	黒 (7.5YR4/3)	良好		
400	1388	新橋式	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	△	暗褐 (7.5YR4/2)	暗褐 (7.5YR3/4)	良好	

番号	発跡番号	時期	部位 (復元口部等)	調査		文様		胎土	色調		形状	備考	
				外面	内面	外面	内面		全質	内質			外面
401	90	三万田IV	口縁部	ケンマ	ケンマ	幅広の線文			○	黒褐 (7.5YR3/2)	黒褐 (7.5YR3/2)	良好	
402	1488	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	四線文			○	黒褐 (5YR3/1)	黒褐 (5YR3/1)	良好	
403	536	香櫛式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	細線文		○	△	黒褐 (7.5YR3/1)	灰褐 (7.5YR5/2)	良好	
404	1137	三万田IV	口縁部	ケンマ	ケンマ	幅広の線文			△	黒褐 (7.5YR3/2)	黒褐 (7.5YR3/2)	良好	
405	987	三万田IV	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文			○	にぶい褐 (7.5YR6/2)	灰褐 (5YR5/2)	良好	
406	56	御瓶式	口縁部	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	幅広の線文			△	にぶい赤褐 (5YR4/4)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	良好	
407	907	三万田III	口縁部	ケンマ	ケンマ	貼付夾帯文 具正文			○	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	良好	注口土器
408	480	三万田 II~I	口縁部	ケンマ	ケンマ	貼付夾帯文 扇状文			◎	灰褐 (7.5YR5/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	注口土器
409	730	三万田II	口縁部	ケンマ	ケンマ	細線文 刺突文			○	にぶい黄緑 (10YR7.5/4)	にぶい黄緑 (10YR7.5/4)	良好	注口土器?
410	534	三万田II	口縁部	ケンマ	ケンマ	細線刺突文 押点文			○	暗赤褐 (5YR3/4)	黒褐 (5YR2/1)	良好	注口土器
411	1019	三万田II	肥手	ていねいな ケンマ	ケンマ	細線文 梳線文			○	にぶい褐 (7.5YR5/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	器形不明
412	230	三万田II	胴部	ていねいな ケンマ	ケンマ	細線文 梳線文				黒褐 (2.5Y3/1)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	注口土器
413	1506	三万田II	口縁部	ケンマ	ケンマ	梳線文			○	灰褐 (7.5YR5/2)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	注口土器?
414	349	三万田III	胴部	ケンマ	ケンマ	凹線文			○	黒褐 (5YR2/1)	褐 (7.5YR4/4)	良好	注口土器
415	1541	三万田II	口縁部	ケンマ	ケンマ	梳線文		△	○	灰黄褐 (10YR4/2)	褐灰 (10YR4/1)	良好	注口土器
416	1109	三万田I	口縁部	ケンマ	ケンマ				○	赤褐 (5YR4/6)	赤褐 (5YR4/6)	良好	土器実測図 (22)
417	859	西平II	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	浅凹線			○	灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR6/4)	良好	
418	906	西平II	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	浅凹線			○	灰褐 (5YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	
419	921	西平II	口縁部	ナデ	ナデ	浅凹線			○	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR6/4)	良好	
420	1457	西平II	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	浅凹線			○	にぶい褐 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR7/4)	良好	
421	861	三万田I	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	梳線			◎	灰褐 (7.5YR4/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	良好	
422	1500	三万田I	口縁部	ナデ	ナデ	梳線			○	裸	緑 (5YR8/6)	不良	
423	752	三万田I	口縁部	あらい ケンマ	ナデ	浅凹線			○	灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR6/4)	良好	
424	733	三万田I	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ				○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	
425	1292	三万田I	口縁部	ケンマ	ケンマ				○	灰白 (10YR8/2)	灰白 (7.5YR8/2)	良好	

番号	登録番号	時期	部位 (原元口径mm)	原 形		文 様		胎 土	色 調		焼成	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		全容色	内 容色		
426	1094	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	浅沈線		○	にぶい赤褐 (5YR4/4)	にぶい橙 (7.5YR8/4)	良好	
427	406	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ			○	にぶい褐 (7.5YR8/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	
428	1249	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ			○	黒褐 (10YR3/1)	灰黄褐 (10YR6/2)	良好	
429	908	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	あらい ケンマ	浅沈線		○	灰褐 (5YR5/2)	にぶい橙 (5YR8/4)	良好	
430	131	西平Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線		○	暗赤褐 (7.5YR2/3)	暗赤褐 (5YR3/8)	良好	
431	469	西平Ⅲ	口縁部	あらい ケンマ	ナ デ			○	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	良好	
432	1082	西平Ⅲ	口縁部	ケンマ	ケンマ	浅沈線		○	にぶい黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	良好	
433	1056	西平Ⅲ	口縁部	あらい ケンマ	ナ デ	深沈線	△	○	暗褐 (10YR3/4)	黒褐 (10YR3/1)	良好	
434	503	三方田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	ナ デ	沈線		○	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	良好	
435	1244	三方田Ⅰ	口縁部	ナ デ	ナ デ	沈線		○	黒褐 (5YR3/1)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	良好	土器実測図 (28)
436	443	三方田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	ナ デ	深沈線		○	黒褐 (5YR2/1)	赤褐 (5YR4/8)	良好	
437	1104	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹沈線		○	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	良好	
438	111	三方田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	ケンマ	沈線		○	黒褐 (10YR2/2)	黒褐 (10YR2/2)	良好	
439	859	三方田Ⅰ	口縁部	ナ デ	ナ デ	沈線		△	灰褐 (7.5YR5/2)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	
440	953	三方田Ⅰ	口縁部	ナ デ	ナ デ	沈線		○	暗赤褐 (5YR3/2)	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	良好	
441	856	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		△	灰褐 (5YR5/2)	灰白 (7.5YR8/1)	良好	
442	1264	三方田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	黒褐 (7.5YR3/1)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	
443	1173	三方田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	沈線		△	黒褐 (5YR3/1)	黒褐 (5YR2/1)	良好	
444	17	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	灰褐 (5YR4/2)	灰褐 (5YR4/2)	良好	
445	405	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		△	灰褐 (5YR5/2)	褐灰 (5YR4/1)	良好	
446	210	三方田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	深沈線		△	褐 (7.5YR4/4)	褐灰 (10YR4/1)	良好	
447	333	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	にぶい橙 (5YR8/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	
448	421	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	にぶい赤褐 (5YR5/3)	にぶい赤褐 (5YR5/2)	良好	
449	147	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ナ デ	沈線		○	明赤褐 (5YR5/8)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	
450	977	三方田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○ △	褐灰 (7.6YR4/1)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好	

番号	登録 番号	時期	部 位 (取元口径cm)	質 整		文 様		胎 上		色 質		成 成	備 考
				外 型	内 面	外 面	内 面	金部寸	内径	外 面	内 面		
451	468	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線		△	△	灰福 (5YR4/2)	黒福 (5YR2/1)	良好	
452	916	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	黒福 (5YR2/1)	にがい赤福 (5YR4/3)	良好	
453	444	三万田 I	口輪部			沈線			△	灰白 (7.5YR6/2)	灰白 (7.5YR6/2)	やや 不良	
454	875	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	黒福 (5YR2/1)	黒福 (5YR3/1)	良好	
455	351	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	灰福 (7.5YR5/2)	灰黄福 (10YR6/2)	良好	
456	1170	三万田 II	口輪部	あらい ケンマ	ナ デ	細沈線			○	灰福 (7.5YR4/2)	にがい福 (7.5YR5/3)	良好	
457	1113	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	にがい福 (7.5YR5/3)	にがい黄福 (10YR6/3)	良好	
458	956	三万田 I	口輪部	あらい ケンマ	ケンマ	細沈線			○	にがい福 (7.5YR5/3)	にがい福 (7.5YR5/3)	良好	
459	113	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	黒福 (10YR2/3)	福 (7.5YR4/3)	良好	
460	355	三万田 I	口輪部	ケズリ	ナ デ	洗沈線			○	灰福 (7.5YR6/2)	灰福 (5YR4/2)	良好	土器実態図 (20)
461	1231	三万田 I	口輪部	あらい ケンマ	ナ デ	沈線			○	黒福 (5YR3/1)	黒福 (5YR3/1)	良好	
462	1406	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	洗沈線			○	灰福 (7.5YR4/2)	にがい赤福 (5YR5/3)	良好	
463	378	三万田 I	口輪部	ナ デ	あらい ケンマ	洗沈線		△	○	灰福 (7.5YR4/2)	福灰 (5YR4/1)	良好	
464	411	三万田 I	口輪部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	沈線			△	灰福 (7.5YR5/2)	灰福 (7.5YR6/2)	良好	
465	1472	三万田 I	口輪部	あらい ケンマ	ケンマ	沈線		△	△	にがい黄福 (10YR6/4)	にがい福 (7.5YR5/3)	良好	
466	879	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	灰福 (5YR5/2)	にがい福 (7.5YR7/3)	良好	
467	901	三万田 I	口輪部	ケンマ	あらい ケンマ	沈線			○	にがい赤福 (5YR5/3)	明福灰 (7.5YR7/2)	良好	
468	913	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	暗赤福 (5YR3/2)	暗赤福 (5YR3/4)	良好	
469	917	三万田 II	口輪部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	沈線			○	にがい黄 (7.5YR6/4)	にがい黄 (7.5YR7/4)	良好	
470	154	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	にがい福 (7.5YR5/3)	にがい赤福 (5YR5/4)	良好	
471	140	三万田 I	口輪部	あらい ケンマ	ナ デ	沈線		○	△	灰黄福 (10YR6/2)	灰黄福 (10YR6/2)	良好	
472	158	三万田 I	口輪部	ナ デ	ナ デ	洗沈線			○	暗福 (7.5YR5/3)	福 (7.5YR4/3)	良好	
473	436	三万田 II	口輪部	ナ デ	ナ デ	洗沈線			○	赤福 (5YR4/6)	黒福 (7.5YR3/1)	良好	
474	400	三万田 I	口輪部	ケンマ	あらい ケンマ	沈線			○	暗福 (7.5YR3/3)	灰黄福 (10YR6/2)	良好	
475	337	三万田 I	口輪部	ケンマ	ケンマ	沈線			○	にがい赤福 (5YR4/3)	にがい黄福 (5YR5/4)	良好	

番号	群番 番号	時期	部 位 (單元口徑ca)	調 整		文 様		胎 土		色 質		焼成	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面	全量等	内胎石	外 面	内 面		
476	900	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	黒陶 (5YR2/1)	灰褐 (5YR4/2)	良好	
477	734	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	褐灰 (7.5YR4/1)	にじみ黄褐 (10YR7/3)	良好	
478	1402	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	あらい ケンマ				○	灰黄褐 (10YR5/2)	にじみ褐 (7.5YR6/2)	良好	
479	1254	二万田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		浅沈線	△	△	橙 (5YR6/5)	にじみ橙 (7.5YR7/4)	良好	
480	108	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ナ デ		沈線		○	にじみ赤褐 (5YR5/4)	にじみ橙 (5YR6/3)	良好	
481	424	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	暗赤褐 (5YR3/2)	にじみ橙 (7.5YR7/4)	良好	
482	435	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ナ デ		浅沈線		○	灰褐 (7.5YR4/2)	にじみ褐 (7.5YR6/2)	良好	
483	1046	三万田Ⅱ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		細沈線		○	にじみ赤褐 (5YR4/4)	にじみ赤褐 (5YR4/4)	良好	土器実態図 (26)
484	877	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ナ デ		沈線		△	にじみ赤褐 (5YR4/4)	にじみ褐 (3YR5/2)	良好	
485	950	三万田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		細沈線		○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (5YR4/2)	良好	
486	387	三万田Ⅱ	口縁部	あらい ケンマ	ケンマ		沈線		◎	暗赤褐 (5YR3/4)	赤褐 (5YR4/2)	良好	
487	848	三万田Ⅱ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		沈線		○	黒陶 (5YR2/1)	暗赤褐 (5YR3/2)	良好	
488	329	三万田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		沈線		○	黒褐 (7.5YR3/2)	にじみ赤褐 (3YR5/4)	良好	
489	198	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線		○	にじみ赤褐 (5YR5/4)	暗褐 (7.5YR3/3)	良好	
490	135	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	あらい ケンマ		沈線		○	褐 (7.5YR4/4)	褐 (7.5YR4/4)	良好	
491	12	三万田Ⅱ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		細沈線		○	黒陶 (7.5YR3/2)	にじみ橙 (7.5YR6/4)	良好	
492	1906	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		沈線	△	△	橙 (7.5YR6/5)	にじみ赤褐 (5YR5/4)	良好	
493	1359	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		浅沈線		○	にじみ褐 (7.5YR3/5)	にじみ褐 (7.5YR3/5)	良好	
494	725	三万田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		沈線		○	黒陶 (10YR3/2)	褐 (7.5YR4/4)	良好	
495	887	三万田Ⅰ	口縁部	あらい ケンマ	あらい ケンマ		沈線		○	灰黄褐 (10YR5/2.5/2)	灰黄褐 (10YR6/2.5/2)	良好	
496	300	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	ケンマ		浅沈線		○	にじみ赤褐 (5YR4/3)	にじみ赤褐 (5YR5/2)	良好	
497	181	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	あらい ケンマ		沈線		○	黒 (7.5YR2/1)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	
498	145	三万田Ⅱ	口縁部	ナ デ	ナ デ		沈線		○	にじみ褐 (7.5YR3/3)	にじみ褐 (7.5YR5/2)	良好	
499	386	三万田Ⅰ	口縁部	ケンマ	あらい ケンマ		沈線		○	灰褐 (5YR4/2)	にじみ赤褐 (5YR5/4)	良好	
500	4	三万田Ⅱ	口縁部 (42.0)	あらい ケンマ	ナ デ		沈線		○	にじみ赤褐 (5YR4/4)	褐 (7.5YR4/2)	良好	土器実態図 (26)

番号	登録 番号	時期	階位 (収元口採)	断 面		文 様		土 質	色 相		構成	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		全 体	内 面		
301	1362	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	灰黄褐 (10YR3/1)	灰黄褐 (10YR5/2)	良好	
502	1463	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	浅沈線		○	黒褐 (5YR3/1)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	
503	24	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	黒褐色 (7.5YR2/2)	褐 (7.5YR4/4)	良好	
504	1471	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	深沈線		○	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい褐 (5YR5/3)	良好	
505	1125	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	暗褐 (7.5YR3/3)	暗褐 (7.5YR3/4)	良好	
506	376	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	暗赤褐 (5YR3/2)	赤褐 (5YR4/5)	良好	
507	406	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好	
508	75	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	沈線		○	暗赤褐 (5YR5/5)	灰褐 (5YR4/2)	良好	
509	377	三万田Ⅱ	口縁部	ナ デ	ナ デ	沈線		△	褐 (7.5YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	
510	661	三万田Ⅱ ～Ⅲ	口縁～胴部 (21.4)	あらい ケンマ	あらい ケンマ			○	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	土器実例図 (27)
511	322	三万田Ⅱ ～Ⅲ	"	あらい ケンマ	ナ デ			○	暗赤褐 (5YR3/2)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	
512	450	三万田Ⅱ ～Ⅲ	"	あらい ケンマ	ケンマ			○	暗赤褐 (5YR3/2)	暗赤褐 (5YR3/2)	良好	
513	643	三万田Ⅱ ～Ⅲ	口縁部 (21.8)	ケンマ	ケンマ			△	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR3/3)	良好	
514	1529	三万田Ⅱ ～Ⅲ	口縁～胴部 (21.7)	あらい ケンマ	あらい ケンマ			○	黒褐 (5YR2/2)	黒褐 (5YR2/2)	良好	
515	1425	三万田Ⅱ ～Ⅲ	口縁部 (23.9)	ナ デ	ナ デ			○	暗赤褐 (5YR3/2)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	良好	
516	16	御城式	胴 部	ケンマ	ナ デ			○	黒褐 (7.5YR2/2)	褐 (7.5YR4/5)	良好	土器実例図 (28)
517	1353	三万田Ⅱ ～Ⅲ	口縁部 (25.2)	ケンマ	ケンマ			○	褐 (7.5YR4/4)	褐 (7.5YR4/4)	良好	
518	1001	三万田Ⅱ ～Ⅲ	口縁～胴部 (27.0)	ケンマ	ナ デ			○	黒褐 (5YR2/1)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	
519	321	三万田Ⅱ ～Ⅲ	"	ケンマ	ナ デ			○	にぶい赤褐 (5YR4/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	
520	3	三万田Ⅱ ～Ⅲ	"	ケンマ	ケンマ			○	黒褐 (5YR2/1)	暗褐 (5YR2/1)	良好	
521	73	三万田Ⅱ ～Ⅲ	"	あらい ケンマ	あらい ケンマ			○	暗褐 (7.5YR3/3)	暗褐 (7.5YR3/3)	良好	
522	69 70	三万田Ⅱ ～Ⅲ	"	ケンマ	ケンマ			○	にぶい褐 (7.5YR5/3)	暗褐 (10YR2/3)	良好	
523	320	御城式	"	ケンマ	ナ デ			○	暗褐 (7.5YR3/3)	暗褐 (7.5YR3/3)	良好	土器実例図 (29)
524	1	三万田Ⅱ ～Ⅲ	"	ケンマ	ナ デ			○	にぶい赤褐 (5YR4/4)	赤褐 (5YR4/5)	良好	
525	643	三万田Ⅱ ～Ⅲ	口縁部 (31.5)	あらい ケンマ	あらい ケンマ			○	褐 (7.5YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	

番号	登録番号	時期	部位 (取付寸法mm)	調整			文種		胎土		色調		焼成	備考
				外面	裏面	内面	外面	内面	金網	角閃石	外面	内面		
508	606	製瓶式	口縁部 (34.4)	あらい ケンマ	ケンマ					○	黒釉 (10YR3/1, 2/2)	灰釉 (7.5YR5/2)	良好	土器実測図 (30)
507	62	製瓶式	"	あらい ケンマ	ナデ					○	黒 (7.5YR4/4)	黒 (7.5YR4/4)	良好	
508	959	三万田式 ～青	" (26.5)	ケンマ	ケンマ					○	黒 (5YR2/2)	暗赤釉 (5YR3/3)	良好	
509	683	三万田式 ～青	" (28.8)	ケンマ	ケンマ					△	にぶい黄緑 (10YR7/2, 7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/2, 7/3)	良好	
500	5	製瓶式	口縁～胴部 (37.2)	あらい ケンマ	あらい ケンマ					○	暗赤釉 (5YR3/3)	暗赤釉 (5YR3/3)	良好	土器実測図 (31)
531	851	三万田式 ～青	" (39.4)	ケンマ	ナデ					○	にぶい赤釉 (5YR4/0)	にぶい赤釉 (5YR5/4)	良好	
番号	登録番号	時期	部位 (底径: cm)	調整			胎土		色調		焼成	備考		
				外面	裏面	内面	金網	角閃石	外面	内面				
532	961	三万田式	底部 (4.0)	ケンマ	あらいケンマ	ケンマ				○	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	良好	土器実測図 (32)
533	1205	三万田式	" (4.0)	ていぬいな ケンマ	ケンマ	ていぬいな ケンマ (ス ス)				○	にぶい黒 (7.5YR6/0)	黒釉 (7.5YR3/1)	良好	
534	609	三万田式	" (4.6)	ケンマ	ケンマ	ケンマ				○	にぶい赤釉 (2.5YR4/4)	明赤釉 (5YR5/0)	良好	
535	820	三万田式	" (6.1)	ていぬいな ケンマ	ケンマ	ていぬいな ケンマ				△	にぶい黒 (7.5YR5/4)	黒釉 (7.5YR3/1)	良好	
536	1331	三万田式	" (4.5)	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ				○	にぶい黒 (7.5YR5/4)	灰黄釉 (10YR4/2)	良好	
537	1335	三万田式	" (6.1)	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ				○	灰釉 (5YR4/2)	灰釉 (5YR4/2)	良好	
538	1302	三万田式	" (3.4)	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ				○	黒釉 (7.5YR3/1)	黒釉 (7.5YR3/1)	良好	
539	797	三万田式	" (4.9)	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ				◎	黒釉 (10YR3/1)	黒釉 (10YR3/1)	良好	
540	785	三万田式	" (4.8)	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ				○	黒釉 (7.5YR3/2)	灰黄釉 (10YR4/2)	良好	
541	1313	三万田式	" (5.7)	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ				○	灰黄釉 (10YR5/2)	灰釉 (7.5YR4/2)	良好	
542	1431	三万田式	" (5.0)	ていぬいな ケンマ	ケンマ	ケンマ				○	暗赤釉 (5YR3/2)	黒釉 (10YR2/2)	良好	
543	1315	三万田式	" (3.2)	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ				○	黒 (7.5YR1.7/1)	にぶい黒 (7.5YR5/0)	良好	
544	1213	三万田式	" (4.0)	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ	ていぬいな ケンマ				○	灰釉 (7.5YR4/2)	黒釉 (7.5YR3/1)	良好	
545	287	三万田式	" (4.4)	ていぬいな ケンマ	ケンマ	ていぬいな ケンマ				○	暗赤釉 (7.5YR3/3)	暗赤釉 (5YR3/4)	良好	
546	281	三万田式	" 平丸底	あらいケンマ	ナデ	ナデ				○	暗赤釉 (5YR3/0)	暗赤釉 (5YR3/0)	良好	
547	1421		丸底	ケンマ	ケンマ	ケンマ				○	にぶい黒 (7.5YR5/4)	黒 (7.5YR2/1)	良好	
548	1204		円形浅付底部 (11.1)		ていぬいな ケンマ	ケンマ				○	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黒 (7.5YR5/3)	良好	

番号	登録 番号	時期	部 位 (底径: cm)	調 整			胎 土		色 調		焼成	備 考
				外 面	底 面	内 面	数量	形状	外 面	内 面		
549	1005		底面 (4.5)	ナ デ	ナ デ	ナ デ		△	にぶい赤褐 (5 Y R 5/4)	暗赤褐 (5 Y R 3/6)	良好	土器実測図 (33)
550	825	三万田式	" (8.9)	ケンマ	ケンマ	ナ デ ス ス		○	にぶい黄緑 (10 Y R 7/4)	黒褐 (10 Y R 3/2)	良好	
551	1418		" (3.9)	ケンマ	ナ デ	ケンマ ス ス		○	黒褐 (10 Y R 3/1)	黒 (10 Y R 2/1)	良好	
552	1451		" (3.8)	あらいケンマ	ナ デ	あらいケンマ ス ス		○	にぶい赤褐 (5 Y R 4/4)	にぶい褐 (7.5 Y R 5/4)	良好	
553	1415		" (4.0)	ケンマ	ケンマ	ケンマ		○	赤褐 (5 Y R 4/6)	黒褐 (5 Y R 3/1)	良好	
554	593		" (5.0)	ケンマ	ケンマ	ケンマ		○	灰褐 (7.5 Y R 4/2)	灰褐 (7.5 Y R 5/2)	良好	
555	1028		" (4.9)	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	ナ デ		○	にぶい黄 (7.5 Y R 7/4)	灰黄褐 (10 Y R 6/2)	良好	
556	1038		" (5.2)	ケンマ	ケンマ	ケンマ		○	にぶい赤褐 (5 Y R 5/4)	黒 (7.5 Y R 2/1)	良好	
557	1420		" (5.0)	ケンマ	ケンマ	ナ デ		○	にぶい赤褐 (5 Y R 5/4)	にぶい褐 (7.5 Y R 5/2)	良好	
558	798		" (4.8)	ケンマ	ナ デ	ナ デ		○	暗赤褐 (5 Y R 3/6)	にぶい褐 (7.5 Y R 5/4)	良好	
559	1022		" (5.5)	あらいケンマ	ナ デ	ナ デ ス ス		○	にぶい褐 (7.5 Y R 3/3)	黒 (7.5 Y R 2/1)	良好	
560	798	三万田式	" (5.2)	ケンマ	ナ デ	ケンマ		○	にぶい赤褐 (5 Y R 5/4)	明赤褐 (2.5 Y R 5/6)	良好	
561	1214		" (5.5)	あらいケンマ	ナ デ	ナ デ		○	にぶい赤褐 (5 Y R 4/4)	褐 (7.5 Y R 4/4)	良好	
562	1039		" (5.5)	あらいケンマ	ナ デ	ナ デ ス ス		△	にぶい黄 (5 Y R 6/3)	黒褐 (7.5 Y R 3/1)	良好	
563	275		" (5.7)	あらいケンマ	あらいケンマ	ナ デ ス ス		△	にぶい褐 (7.5 Y R 3/4)	にぶい黄緑 (10 Y R 6/3)	良好	
564	601		" (4.8)	ケンマ	ナ デ	ナ デ ス ス		○	にぶい赤褐 (5 Y R 4/4)	黒褐 (5 Y R 2/1)	良好	
565	277		" (5.2)	ケンマ	ケンマ	ケンマ		○	にぶい褐 (7.5 Y R 6/3)	にぶい褐 (7.5 Y R 6/3)	良好	
566	1126		" (5.0)	ナ デ	ナ デ	ナ デ		○	明赤褐 (2.5 Y R 5/6)	黒褐 (7.5 Y R 3/1)	良好	
567	594		" (5.1)	ケンマ	ケンマ	ナ デ		○	にぶい褐 (7.5 Y R 4/4)	灰褐 (7.5 Y R 5/2)	良好	
568	1214		" (5.5)	あらいケンマ	ナ デ	ナ デ ス ス		○	にぶい褐 (7.5 Y R 5/4)	黒褐 (7.5 Y R 3/1)	良好	
569	1311		" (5.7)	ナ デ	ナ デ	ナ デ ス ス		○	にぶい黄 (7.5 Y R 4/4)	黒褐 (7.5 Y R 3/1)	良好	
570	278		" (5.7)	ケンマ	あらいケンマ	ナ デ		○	赤褐 (5 Y R 3/4)	にぶい黄 (5 Y R 4/4)	良好	
571	1319		" (6.7)	ケンマ	ケンマ	ケンマ		○	にぶい褐 (7.5 Y R 5/4)	にぶい黄緑 (10 Y R 6/4)	良好	
572	1301		" (5.6)	ケンマ	ナ デ	ナ デ ス ス		○	にぶい褐 (7.5 Y R 5/4)	黒褐 (7.5 Y R 3/1)	良好	
573	8		" (5.5)	あらいケンマ	ナ デ	ナ デ		○	赤褐 (5 Y R 4/6)	黒褐 (7.5 Y R 3/2)	良好	土器実測図 (34)

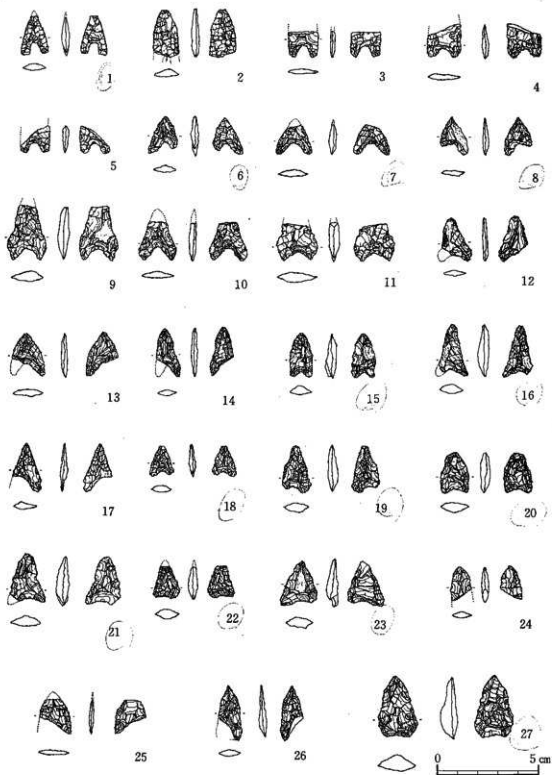
番号	発給 番号	時期	部 位 (直径:cm)	調 査 場 所			土 質		色 調		納成	備 考
				外 面	底 面	内 面	調査場	内底石	外 面	内 面		
574	592		(8.2)	あらいケンマ	ナデ	ナデ		◎	赤褐 (5 YR4/6)	にぶい赤褐 (5 YR4/4)	良好	
575	388		(7.6)	ケンマ	ケンマ	ナデ スス		○	明赤褐 (5 YR5/6)	にぶい褐 (7.5 YR5/4)	良好	
576	1411		(7.2)	あらいケンマ	あらいケンマ	ナデ スス		○	赤褐 (5 YR4/6)	黒褐 (5 YR2/2)	良好	
577	1406		(8.2)	ナデ	ナデ	ナデ		○	赤褐 (5 YR4/6)	灰褐 (5 YR4/2)	良好	
578	1408		(7.0)	ケンマ	ケンマ	ナデ		△	にぶい赤褐 (5 YR5/0)	黒褐 (5 YR2/1)	良好	
579	795		(8.4)	あらいケンマ	ナデ	ナデ		○	にぶい赤褐 (5 YR4/4)	褐 (7.5 YR4/3)	良好	
580	804		(7.0)	ケンマ	ケンマ	ナデ		○	にぶい赤褐 (5 YR4/4)	明赤褐 (5 YR5/6)	良好	
581	597		(8.0)	あらいケンマ	ナデ	ナデ スス		○	にぶい赤褐 (5 YR4/4)	褐 (7.5 YR4/3)	良好	
582	390		(7.2)	あらいケンマ	ナデ	ナデ 炭化物		○	黒 (7.5 YR8/6)	灰黄褐 (10 YR6/2)	良好	
583	1300		(8.1)	あらいケンマ	ナデ	ナデ		○	にぶい赤褐 (5 YR4/3)	にぶい褐 (7.5 YR5/0)	良好	
584	1310		(8.5)	あらいケンマ	ナデ	ナデ		○	明赤褐 (5 YR5/6)	にぶい黄褐 (10 YR6/3)	良好	
585	785		(7.0)	ていねいな ケンマ、スス	ていねいな ケンマ	ナデ		○	にぶい褐 (7.5 YR5/4)	黒褐 (7.5 YR3/1)	良好	
586	596		(6.8)	あらいケンマ	あらいケンマ	ナデ		○	にぶい赤褐 (5 YR4/4)	黒褐 (5 YR3/1)	良好	
587	1087		(7.0)	あらいケンマ	ナデ	ナデ スス		○	褐 (7.5 YR4/6)	黒褐 (10 YR2/2)	良好	
588	1425		(7.3)	ケンマ	ケンマ	あらいケンマ スス		△	にぶい褐 (7.5 YR5/0)	暗明 (7.5 YR3/4)	良好	
589	283		(7.6)	あらいケンマ	あらいケンマ	ナデ 炭化物		○	明赤褐 (5 YR5/6)	(炭化物)	良好	
590	1094		(6.9)	あらいケンマ	あらいケンマ	板ナデ 炭化物		○	にぶい赤褐 (5 YR4/4)	にぶい赤褐 (5 YR4/3)	良好	土蔵裏面 (35)
591	274		(6.9)	あらいケンマ	あらいケンマ	あらいケンマ スス		○	暗赤褐 (5 YR3/0)	暗赤褐 (5 YR3/2)	良好	
592	1031		(6.9)	あらいケンマ	ナデ	ナデ 炭化物		○	にぶい赤褐 (5 YR4/4)	黒 (7.5 YR2/1)	良好	
593	598		(7.5)	あらいケンマ	あらいケンマ	ナデ		○	にぶい赤褐 (5 YR4/3)	暗赤褐 (5 YR3/2)	良好	
594	282		(8.5)	ケンマ	ナデ	ナデ		○	明赤褐 (5 YR5/6)	明赤褐 (5 YR5/6)	良好	
595	9		(7.0)	あらいケンマ	ナデ	ナデ スス		○	赤褐 (5 YR4/6)	暗赤褐 (5 YR3/4)	良好	
596	790		(7.1)	あらいケンマ	ナデ	ナデ スス		○	明赤褐 (5 YR5/6)	にぶい赤褐 (5 YR4/4)	良好	
597	593		(6.7)	ケンマ	ケンマ	ナデ スス		○	にぶい黄褐 (10 YR8/4)	黒褐 (10 YR2/2)	良好	
598	1414		(8.8)	あらいケンマ	ナデ	ナデ		○	赤褐 (5 YR4/6)	黒 (5 YR1.7/1)	良好	

番号	登録番号	時期	部 位 (壁径:cm)	調 整			胎 土		色 調		焼成	備 考	
				外 面	装 飾	内 面	全量	内穴	外 面	内 面			
500	1190		底部 (7.0)	あらいケンマ	ナデ	ナデ スス		○	にぶい黄緑 (10YR6/3)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好		
400	279		"	あらいケンマ	ナデ	ナデ スス		○	にぶい黄 (7.5YR6/4)	にぶい黄 (7.5YR6/4)	良好		
401	1333 1330		"	ケンマ	ナデ	ナデ		○	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好		
402	794		"	あらいケンマ	ナデ	ナデ スス		○	にぶい褐 (7.5YR5/4)	黒褐 (7.5YR3/2)	良好		
403	1429		"	ナデ	ナデ	ナデ 炭化物		○	赤褐 (5YR4/6)	黒 (5YR1.7/1)	良好		
504	507		"	ケンマ	ケンマ	スス		○	にぶい褐 (7.5YR5/4)	褐 (7.5YR4/3)	良好		
505	590		"	あらいケンマ	ナデ	ナデ スス		○	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	良好		
番号	登録番号	時期	部 位 (壁口径:cm)	調 整		文 様		胎 土		色 調		焼成	備 考
外 面	内 面	外 面	内 面	全量	内穴	外 面	内 面						
500	583		頸 部	あらい ケンマ	あらい ケンマ	刺突文 沈線文		△	○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	土器実測図 (8B)
507	572			ケンマ	ケンマ	貼付突帯 格子文			○	にぶい褐 (7.5YR5/4)	明赤褐 (5YR5/2)	良好	
506	218		口縁部	ケンマ	ケンマ	貼付突帯			○	にぶい黄 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	良好	
506	1445	三万田Ⅱ	口縁部	ケンマ	ケンマ	凹線文	沈線	△	○	灰褐 (7.5YR4/2)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好	注口土器
510	1192	三万田	口縁部	ケンマ	ケンマ	縦凹線			○	灰黄褐 (5YR2/1)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	良好	
511	270	三万田Ⅱ	高杯脚部 (4.7)	ケンマ	ナデ	横凹線			○	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	

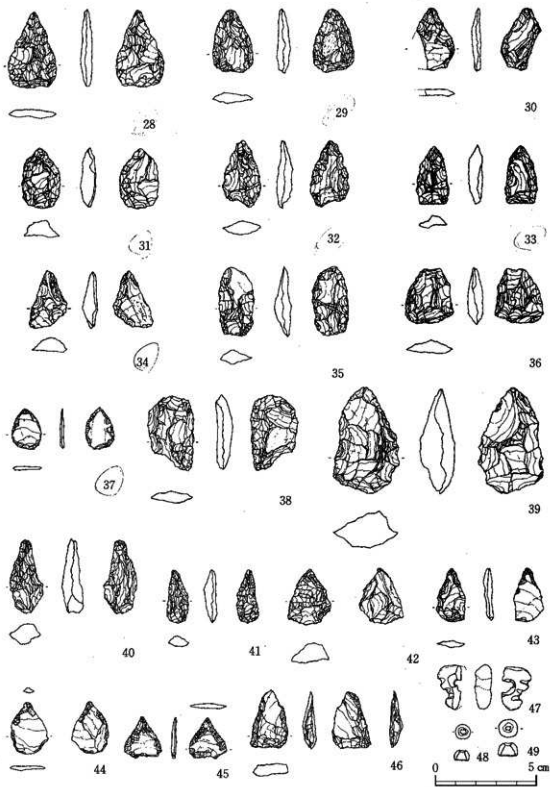
第2表 円板状・有孔円板状土製品観察表

番号	登録番号	種 別	径 (cm)	調 整		加 工 状 態	胎 土		色 調		焼成	備 考
				外 面	内 面		全量	内穴	外 面	内 面		
512	1428	円板状土製品	12.1	ナデ	ナデ			○	黒褐 (5YR2/1)	暗赤褐 (5YR3/6)	良好	
513	585	円板状土製品	7.5	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	土器片利用		○	にぶい褐 (7.5YR5/4)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	
514	1430	円板状土製品	6.5	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	土器片利用		○	灰褐 (7.5YR4/2)	褐 (7.5YR4/2)	良好	
515	1507	円板状土製品	4.2	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	土器片利用		○	黒 (7.5YR2/1)	黒褐 (5YR3/1)	良好	
516	587	円板状土製品	4.0	ケンマ	ナデ スス	土器片利用		○	にぶい赤褐 (5YR5/4)	黒褐 (5YR3/1)	良好	
517	754	有孔円板状土製品	3.9	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	土器片利用 中央に穿孔(径0.6cm)		○	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	良好	
518	1304	円板状土製品	5.0	ケンマ	ナデ	土器片利用		○	暗赤褐 (5YR3/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	

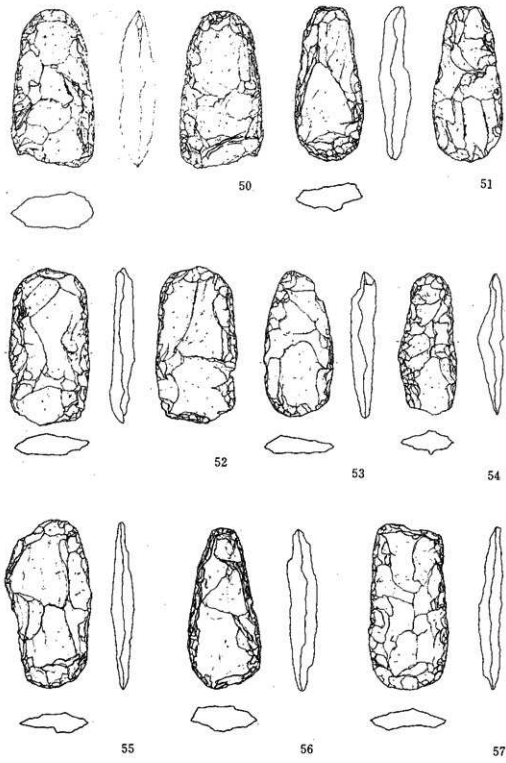
番号	登録番号	種別	径 (cm)	調整		加工状態	胎土		色調		焼成	備考
				外面	内面		全量号	角閃石	外面	内面		
019	586	円板状土製品	3.8	ていねいな ケンマ	ナデ	土器片利用		○	緑 (5Y R6/6)	にぶい (7.5Y R8/4)	良好	
020	1025	円板状土製品	5.0	ケンマ	ケンマ	土器片利用		○	にぶい黄緑 (10Y R6/4)	灰褐 (10Y R3/2)	良好	
021	568	穿孔円板状土製品	6.3	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	土器片利用 中央に穿孔 (径 0.6cm)		○	黒褐 (10Y R2/2)	黒褐 (10Y R3/2)	良好	
022	750	穿孔円板状土製品	5.8	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	土器片利用 中央に穿孔 (径 0.7cm)		○	灰黄褐 (10Y R4/2)	灰黄褐 (10Y R5/2)	良好	
023	580	穿孔円板状土製品	3.5	ケンマ	ナデ	土器片利用 中央に穿孔 (径 0.6cm)		○	にぶい (7.5Y R5/4)	にぶい黄緑 (10Y R7/3)	良好	
024	1076	穿孔円板状土製品	4.0	ていねいな ケンマ	ていねいな ケンマ	土器片利用 中央に穿孔 (径 0.7cm)		○	にぶい (7.5Y R6/4)	灰褐 (7.5Y R4/2)	良好	



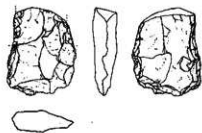
第42图 石器夹测图(石鏃)



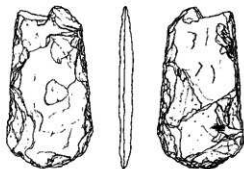
第43図 石器実測図(石鏃・石錐・スクレイパー・玉類)



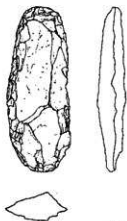
第44图 石器实测图(石斧) (1/3)



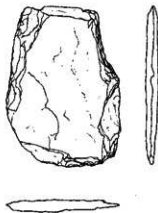
58



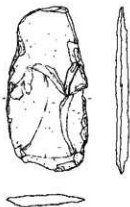
59



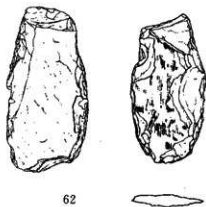
60



61

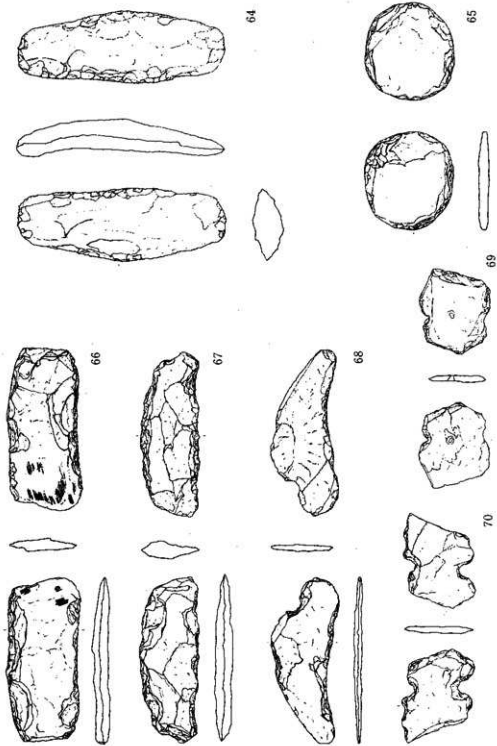


62

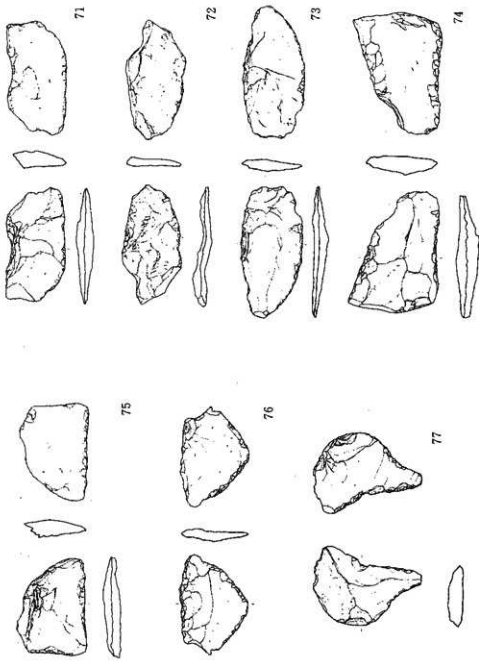


63

第45图 石器实测图(石斧) (1/3)



第46圖 石器夾灣區(磨製石斧·平板狀石器·打製石鏃) (1/3)



第47図 石器実測図(2次加工のある断片) (1/3)

第3表 陣内Ⅱ 石器計測表-1 (石鏡1~39)

番号	登録 番号	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	抜 り		先端角度 (度)	重さ (g)	石 材	欠損部	備 考
					幅 (cm)	深さ (cm)					
1	851624	(2.0)	1.35	0.4	0.6	0.55	欠 損	0.82	チャートA	先端部	
2	851631	(2.4)	1.25	0.4	欠	欠	欠 損	1.07	チャートB	先端部 左右両側部	
3	851630	(1.3)	1.5	0.25	0.8	0.8	欠 損	0.55	緑泥片岩	上半部	
4	851648	(1.6)	1.7	0.35	0.85	0.4	欠 損	0.86	チャートB	上半部	
5	851636	(1.95)	1.45	0.3	0.8	0.5	欠 損	0.36	緑泥片岩	先端部から 上部約2/3	
6	851644	1.9	1.5	0.45	1.2	0.5	75	0.66	チャートB	——	完形
7	851649	(1.5)	1.8	0.4	1.4	0.55	欠 損	0.85	石灰岩	先端部	
8	851647	1.9	1.4	0.3	不明	不明	85	0.46	砂岩	——	完形
9	851641	(2.7)	1.9	0.8	1.2	0.5	欠 損	2.36	砂岩	先端部	
10	851626	(1.9)	1.9	0.38	1.9	0.7	欠 損	0.96	チャートA	先端~上部1/3	
11	851632	(1.85)	2.05	0.5	1.3	0.4	欠 損	1.83	チャートA	上半部	
12	851625	2.2 (1.45)	0.25	不明	0.3	不明	不明	0.68	チャートA	左側部	
13	851653	2.15 (1.6)	0.3	不明	0.6	75	0.9	0.9	チャートA	左側部	
14	851629	2.4 (1.2)	0.35	不明	0.5	85	0.83	0.83	チャートA	左側部	
15	851630	2.2	1.2	0.5	0.6	0.26	75	1.19	チャートA	——	完形
16	851628	2.6 (1.45)	0.35	不明	0.3	68	1.32	1.32	チャートB	左側部	
17	851645	2.45 (1.4)	0.35	不明	不明	59	0.86	0.86	黒曜石-A	基部左側部	
18	851646	(1.55)	1.2	0.35	0.9	0.2	欠 損	0.43	チャートB	先端部	
19	851640	2.4 (1.45)	0.5	不明	0.25	不明	不明	1.18	チャートB	左側部	
20	851635	2.0	1.45	0.5	1.1	0.2	80	1.25	チャートB	——	完形
21	851643	2.4 (1.6)	0.65	不明	0.15	90	1.825	1.825	砂岩	左側部	
22	851634	(1.6)	1.3	0.5	0.7	0.1	欠 損	0.875	チャートA	先端部	
23	851633	2.3	1.8	0.6	1.4	0.25	85	1.82	チャートA	——	完形
24	851637	(1.85)	(1.1)	0.35	欠	欠	80	0.54	チャートA	基部	
25	851651	(1.75)	(1.6)	0.25	欠	欠	欠 損	0.85	緑泥片岩	先端部基部	

番号	登録 番号	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	扶 り		光軸角度 (度)	重さ (g)	石 材	欠損部	備 考
					幅 (cm)	深さ (cm)					
26	851627	2.75	(1.2)	0.4	—	—	58	0.825	チャートB	基部	
27	851658	3.1	1.95	0.85	—	—	75	3.975	チャートA	—	完形
28	851697	3.8	2.4	0.55	—	—	60	4.54	チャートB	—	完形
29	851659	3.15	2.0	0.7	—	—	73	4.27	チャートA	—	完形
30	851674	3.05	(1.95)	0.45	—	—	73	2.13	チャートB	左側下半部	
31	851688	3.0	1.9	0.8	—	—	85	4.5	チャートA	—	完形
32	851642	3.35	1.95	0.8	1.0	0.2	不明	4.25	チャートA	—	完形
33	851673	2.9	1.85	0.7	—	—	85	2.74	チャートA	—	完形
34	851636	2.9	1.95	0.75	—	—	90	2.65	チャートB	—	完形
35	851662	3.5	1.75	0.85	—	—	113	4.04	凝灰岩	—	完形
36	851660	(2.7)	2.4	0.75	—	—	欠損	5.24	チャートB	先端部	
37	851632	2.1	1.45	0.2	—	—	85	0.73	緑泥片岩	—	完形
38	851661	(3.75)	2.3	0.8	—	—	欠損	6.4	チャートA	先端部左側部	
39	851665	5.35	3.3	1.75	—	—	90	22.60	チャートB	—	完形
40	851655	3.7	1.8	1.0	—	—	—	5.04	チャートA	—	石離
41	851654	2.8	1.0	0.5	—	—	—	1.75	チャートB	—	石離
42	851672	2.7	2.1	0.9	—	—	—	6.45	チャートA	—	スクレイパー
43	851644	2.6	1.4	0.3	—	—	—	1.18	チャートB	—	石離
44	851656	2.6	1.8	0.2	—	—	—	1.6	チャートA	—	石離
45	851623	2.1	1.8	0.2	—	—	—	1.17	チャートA	—	石離
46	851671	2.8	1.8	0.5	—	—	—	3.47	チャートA	—	スクレイパー



北西からの遠望



南から（中央の水田）

図版 2
出土土器
(1)



23



27



25



24



30



28



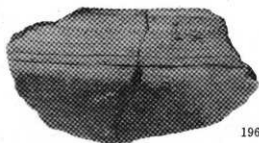
31



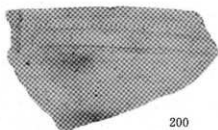
204



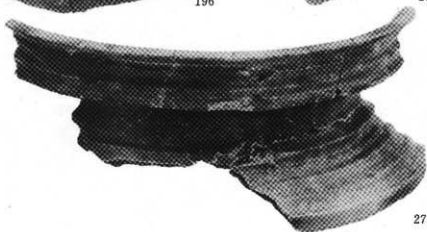
201



196



200



273

(番号は実測図番号に同じ)



197



2



247



294



296



322



317



398



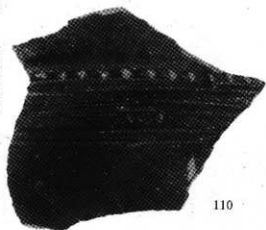
414



410

(番号は実測図番号に同じ)

図版 4
出土土器
(3)



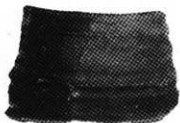
110



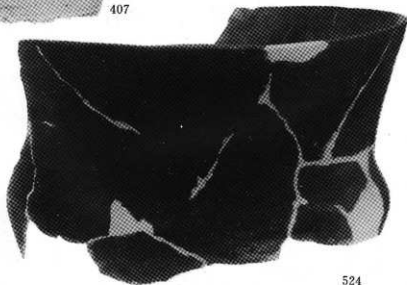
111



407

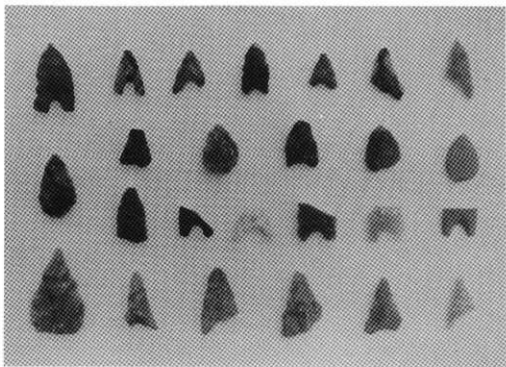


408

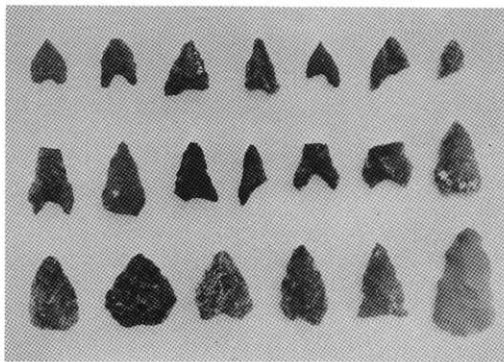


524

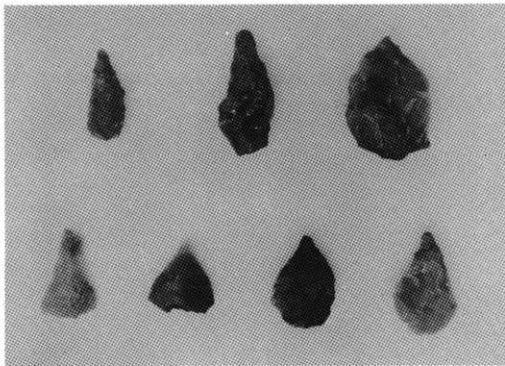
(番号は実測図番号に同じ)



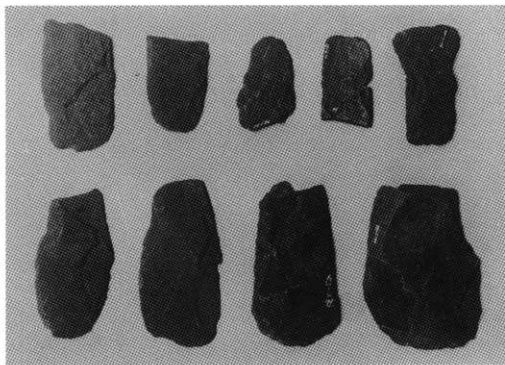
石鏃



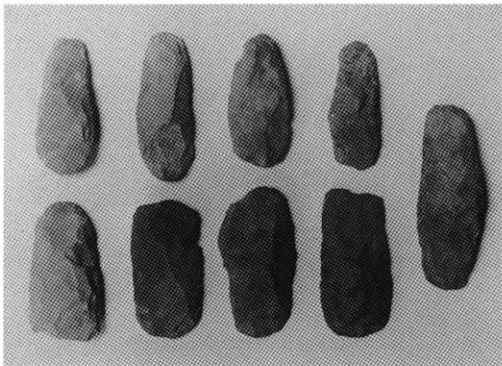
石鏃



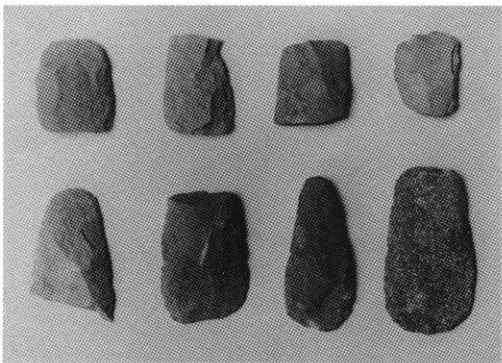
石鏃



扁平打製石斧

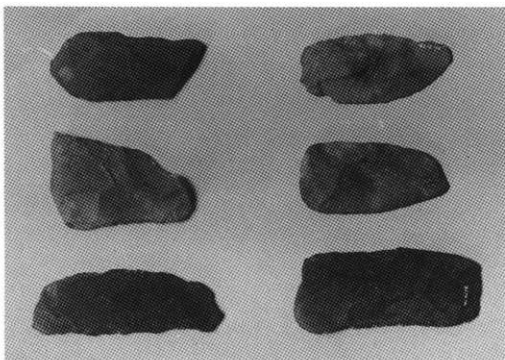
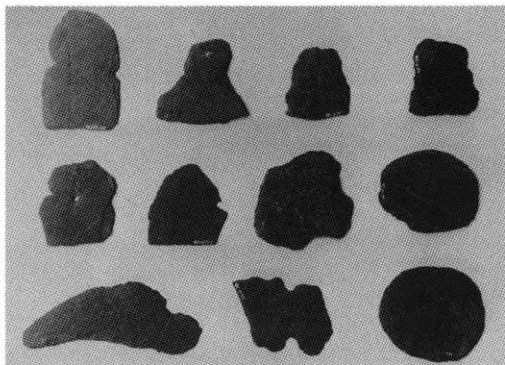


石斧



石斧

図版 8 出土石器(4)



蓮ヶ池横穴墓群

——遺物編——

例 言

1. 本報告は昭和46年3月に宮崎県教育委員会により発行された「蓮ヶ池横穴群調査報告書」（以下、本報告では46年報告書と略記する）の遺物編である。ここに図化した遺物は、当時諸般の事情により実測図を掲載できなかったものである。なお、発掘調査は昭和44年5月12日から6月1日にかけて実施された。
2. 本報告に係る遺物の整理は、昭和60～61年度に宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターが行った。
3. 掲載した図面の実測・トレースについては、土器は主として整理専門員津隈久美子が行い、鉄器その他の遺物は主事菅付和樹が行った。その際、須恵器の実測にあたり県文化課長津宗重氏には種々御教示いただいた。記して謝意を表する。
4. 図版の写真撮影には主任岩永哲夫の全面的協力を得た。
5. 本報告の執筆には菅付があたり、編集は岩永、菅付が行った。
6. 本報告は46年報告書の分冊といえるもので、その利用に際しては46年報告書を充分に参照されたい。
7. 出土遺物は台帳登録の上埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

I 本報告に至るまでの経緯	97
II 出土遺物について	98
1. はじめに	98
2. 1号横穴墓	99
3. 2号横穴墓	100
4. 3号横穴墓	100
5. 4号横穴墓	100
6. 6号横穴墓	100
7. 7号横穴墓	102
8. 8号横穴墓	102
9. 9号横穴墓	104
10. 10号横穴墓	104
11. 11号横穴墓	104
12. 12号横穴墓	106
13. 14号横穴墓	112
14. 15号横穴墓	112
15. 16号横穴墓	113
16. 17号横穴墓	114
17. 18号横穴墓	114
18. 19号横穴墓	115
19. 20号・21号横穴墓	116
20. 24号横穴墓	116
21. 25号横穴墓	118
22. 27号・29号・30号横穴墓	118
23. 31号横穴墓	119
24. 34号横穴墓	119
25. 35号横穴墓	121
26. 36号横穴墓	122

27.	37号横穴墓	122
28.	38号横穴墓	125
29.	39号横穴墓	125
30.	40号横穴墓	126
31.	41号・42号・43号横穴墓	128
32.	44号横穴墓	128
33.	45号横穴墓	131
34.	46号横穴墓	131
35.	50号横穴墓	137
36.	51号横穴墓	144
37.	52号横穴墓	145
Ⅲ	おわりに	148

挿 圖 目 次

第1図	史跡 蓮ヶ池横穴墓群遺構分布対照図	95~96
第2図	1号横穴墓出土土器実測図	99
第3図	1号横穴墓出土鉄器実測図	99
第4図	3号横穴墓出土土器実測図・拓影	100
第5図	6号横穴墓出土土器実測図	100
第6図	6号横穴墓出土鉄器実測図	101
第7図	7号横穴墓出土土器実測図	102
第8図	8号横穴墓出土土器実測図	103
第9図	8号横穴墓出土鉄器・装身具実測図	103
第10図	9号横穴墓出土土器実測図	104
第11図	9号・10号横穴墓出土鉄製品実測図	104
第12図	11号横穴墓出土土器実測図・拓影	105
第13図	11号横穴墓出土鉄製品実測図	105
第14図	12号横穴墓出土土器実測図(1)	106
第15図	12号横穴墓出土土器実測図・拓影(2)	108
第16図	12号横穴墓出土土器実測図・拓影(3)	109
第17図	12号横穴墓出土土器実測図(4)	110
第18図	12号横穴墓出土鉄器実測図	112
第19図	14号横穴墓出土鉄器実測図	112
第20図	15号横穴墓出土土器実測図・拓影	113
第21図	15号横穴墓出土鉄器実測図	113
第22図	16号横穴墓出土土器実測図	114
第23図	18号横穴墓出土土器・土製品実測図	115
第24図	19号横穴墓出土鉄器実測図	116
第25図	24号横穴墓出土土器実測図・拓影	116
第26図	24号横穴墓出土鉄器・装身具実測図	117
第27図	25号横穴墓出土土器実測図	118
第28図	31号横穴墓出土土器実測図・拓影	119

第29図	34号横穴墓出土土器実測図・拓影	120
第30図	34号横穴墓出土鉄器実測図	121
第31図	35号横穴墓出土土器実測図・拓影	121
第32図	35号横穴墓出土鉄器実測図	121
第33図	36号横穴墓出土土器実測図	122
第34図	37号横穴墓出土土器実測図(1)	123
第35図	37号横穴墓出土土器実測図・拓影(2)	124
第36図	37号横穴墓出土土器実測図・拓影(3)	125
第37図	39号横穴墓出土土器実測図・拓影	125
第38図	40号横穴墓出土土器実測図	127
第39図	40号横穴墓出土鉄器実測図	128
第40図	44号横穴墓出土土器実測図・拓影	130
第41図	45号横穴墓出土土器実測図	131
第42図	46号横穴墓出土土器実測図(1)	132
第43図	46号横穴墓出土土器実測図(2)	133
第44図	46号横穴墓出土土器実測図(3)	134
第45図	46号横穴墓出土土器実測図(4)	135
第46図	46号横穴墓出土鉄器・装身具・その他実測図	137
第47図	46号横穴墓出土玉類実測図	137
第48図	50号横穴墓出土土器実測図(1)	138
第49図	50号横穴墓出土土器実測図(2)	139
第50図	50号横穴墓出土土器実測図(3)	140
第51図	50号横穴墓出土鉄器実測図(1)	141
第52図	50号横穴墓出土鉄器実測図(2)	143
第53図	50号横穴墓出土装身具実測図	144
第54図	51号横穴墓出土土器実測図・拓影	144
第55図	51号横穴墓出土鉄器実測図	144
第56図	52号横穴墓出土土器実測図・拓影	145
第57図	52号横穴墓出土鉄器実測図	147
第58図	52号横穴墓出土鏡・玉類実測図	148

图 版 目 次

图版 1	1号·7号~8号·11号~12号横穴墓出土土器	153
图版 2	12号·16号·18号·24号·34号·37号横穴墓出土土器	154
图版 3	40号·44号横穴墓出土土器	155
图版 4	46号·50号横穴墓出土土器	156
图版 5	50号~52号横穴墓出土土器	157
图版 6	1号·6号·8号~11号横穴墓出土铁器·装身具	158
图版 7	12号·14号~15号·19号·24号横穴墓出土铁器·装身具	159
图版 8	34号~35号·40号·46号·50号横穴墓出土铁器·装身具	160
图版 9	50号横穴墓出土铁器	161
图版 10	50号~52号横穴墓出土铁器·装身具	162



●横穴墓(アンダーライン…未調査)
○欠番
←遺構番号振替え

第1図 史跡 藤ヶ池横穴墓群遺構分布対照図

註：宮崎市教育委員会作成原図写より作図

I 本報告に至るまでの経緯

蓮ヶ池横穴墓群は宮崎市市街地の北方、標高40～60mの丘陵地帯の裾部に展開している。今回の報告に関連する発掘調査の経緯や内容等に関しては先の46年報告書に詳しいので、その後の経緯についてここで簡単に述べておきたい。

当横穴墓群（史跡指定範囲内をさすものとする）は昭和44年5月～6月にかけて当時確認された53基中41基が発掘調査された。その後、県と宮崎市は遺跡の重要性にかんがみ保存措置、環境整備等を検討、昭和46年7月には史跡 蓮ヶ池横穴群として国指定史跡に指定された。また、それに先だつ同年3月、当時の事情により遺構中心のものになってしまったが、昭和44年発掘の調査報告書が刊行された。それらを受けて昭和47年～昭和50年までに宮崎市による指定範囲の公有地化もすすめられてきた。

昭和59年4月、宮崎市は市制60周年記念事業のひとつとして史跡の保存整備事業をとりあげ、昭和60年度を第1次に墓道・前庭部の計測調査が開始された⁽¹⁾。それによると、当横穴墓群は昭和61年3月現在71基が確認されており、その際、昭和44年の確認地点に検出できなかった遺構番号の欠番になったものをあらたに検出した遺構にさしかえている（第1図）。

一方、当埋蔵文化財センターでは本館蔵未整理発掘資料の第2次整理事業として、昭和44年調査後整理されたものの実測図等の掲載ができなかった蓮ヶ池横穴墓群出土遺物を再整理し、ここに公表することになった次第である。

なお、本報告をまとめるにあたり、先の長津氏のほかに田中茂（五ヶ瀬可立坂小学校校長）、野間重孝、伊東但（宮崎市教育委員会）の各氏ほかの御協力を得た。記して謝意を表する。

註 (1) 伊東 但ほか『蓮ヶ池横穴群』保存整備事業概報Ⅰ（昭和60年度計測調査概報）

II 出土遺物について

1. はじめに

今回整理し図化した遺物は、先述したとおり昭和44年に発掘調査され46年報告書に実測図を掲載できなかった遺物である。ところが、博物館にはこのほかにも蓮ヶ池横穴墓群出土とされる遺物が取藏されており、整理は先ずこの選り分け作業から始めねばならなかった。46年報告書をもとに選別を行ったところ、注記に白色顔料を用いたものと黄色顔料を用いたものの二種類があり44年調査分は黄色顔料のものであることが判明した。しかし、散逸したのか見当たらない遺物や46年報告書に未記載の遺物も多くみられた。

現在知られている蓮ヶ池横穴墓群出土とされる遺物には、今回図化したもの以外に次のようなものがある。

1. 昭和41年、現在の史跡指定地区の南側が宅地化された際に宮崎考古学会が県の委嘱をうけて調査したもの。この時の出土遺物の所在はわからないが、あるいは館蔵資料の中の白色顔料で注記されているものがそうかもしれない。

1. 昭和61年、宮崎市による史跡保存整備事業に伴う計測調査の際に出土したもの。

1. 正式な発掘調査によらず出土遺物の不明確な個人採集のもの。この個人蔵のものについては殆ど内容がわからないが寄託資料の中に蓮ヶ池出土とされるものが存在する。

以上の遺物はいずれもまだ報告されていない。

さて、今回の報告に際しては次のように記述を行っている。

横穴墓の遺構番号は46年報告書のものに従う。また、その中に記載されている遺物に該当すると考えられる遺物についてはそのページ数及び行数を記す。

遺物の出土地点については46年報告書にも記載されているが遺構実測図が小さく、また、記述のないものもあるため、当時の遺構実測図原図をもとに再度記述する。この場合、「出土地点」というのは遺構実測図原図上に記録されている地点をさすことにする。

遺物の図化に関しては次のように図化・記述している。

土器の場合、別個体のものは余程の小片を除いて殆ど図化する。また、同一固体は部位の異なるものは図化し、同じ部位のものはその中で残存状態の最良のもののみ図化する。須恵器・土師器の記述の中で「ナデ」は原則として横ナデをさし、「ヘラミガキ」とはヘラ状工具による光沢のない丁寧なナデ状の調整をさせている。

鉄器の場合誘が著しかったため、明らかに最近のものと思われる針金や釘ならびに小鉄片

は除くが原則として可能な限り図化に努める。計測値は小数点以下第二位を四捨五入する。
 以上のような方針のもとに本報告は執筆する。

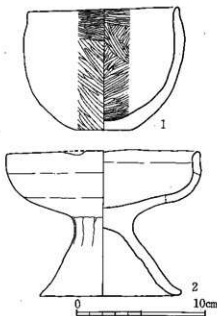
2. 1号横穴墓

(1) 土器 (第2図)

土師器

1は平底の壺で口縁部が短く直立し口唇部は丸味をもつ。内外面とも1~2mm幅のやや光沢のあるヘラミガキがなされる。口径11.5cm、底径4.5cm、器高9.4cmを測る。羨道部中央西壁際で出土。50ページ16行、61ページ8~9行に記載。

2は高坏である。口縁部は直立し端部は丸くおさまる。内面にはあまい稜がみられる。脚部内面未調整、脚部と坏部の接合部は幅広のへら状工具で縦ナデ、ほかは全てナデ調整と思われる。全体に風化著しい。口径14.8cm、脚部径10.9cm、器高11.4cm。玄室中央部やや東寄り出土。50ページ14~15行、60ページ11~14行に記載されている。



第2図 1号横穴墓出土土器実測図
 (1/3)

(2) 鉄器 (第3図)

鉄 鏃

1は方頭広根斧箭式である。身部と茎との境はなく、矢竹挿入部分には横巻きの繊維痕がみられる。全体に錆化著しい。茎端部を欠き現存長7.8cm、身部先端から口巻付近まで4.1cmを測る。玄室北西部奥壁際の排水溝の中から出土している。58ページ15行に記載。

2は身部と寛被ぎの一部及び茎端部を欠く。現存長7.3cm。寛被ぎと茎の境の形状は不明である。茎には横巻きの繊維痕がみられその上に矢竹の繊維が残る。出土地点不明。46年報告書には記載されていない。



第3図 1号横穴墓出土鉄器実測図 (1/2)

3. 2号横穴墓

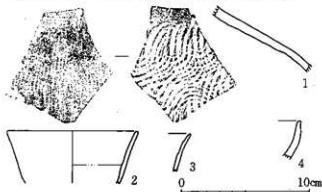
46年報告書に「若干の小鉄片があった」とされるが該当する遺物は現在所在不明である。

4. 3号横穴墓

(1) 土器 (第4図)

須恵器

1は壺の肩部片である。外面縦方向の平行線文タタキの上を横ナデ。全面に自然釉がかか
る。内面上部ナデ調整、下位は同心円文がみられる。



2は坏の口縁部片と思われる。
内外面ともナデ調整される。口
径10.1cm。

3は坏口縁部片である。口縁
部はやや外反気味に開く。焼成
不良。風化のため調整不明。

土師器

4は坏口縁部片と思われる。
端部は短く直立し丸味をおびる。

第4図 3号横穴墓出土土器実測図・拓影(1/3)

外面横方向のミガキ。内面は丁寧なナデ調整と思われる。

これら1~4については14ページ2行に記載されている。

5. 4号横穴墓

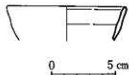
遺物は出土していない。

6. 6号横穴墓

(1) 土器 (第5図)

須恵器

坏口縁部片と思われる。内外面ともナデ調整される。推定口
径9.2cm。玄室内左袖角に出土している。46年報告書には記載
されていない。

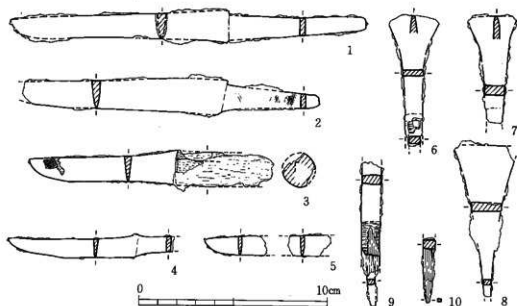


第5図 6号横穴墓出土
土器実測図(1/3)

(2) 鉄器 (第6図)

刀子

1は平造り、角背、両開。全長18.9cm、茎長約7.3cm、背幅約0.5cmを測る。全体に錆化著
しく茎は横反りしている。2は平造り、角背で刃部は錆が著しいがゆるやかにすき取ら



第6図 6号横穴墓出土鉄器実測図(1/2)

れ両関と思われる。現存長15.7cm、茎長約5.0cm、背幅0.5cmを測る。茎には斜方向の繊維痕がみられ、把木挿入時のすべり止めの痕跡とも考えられる。3は平造り、角背で比較的錆が少ない。茎は鹿角製装具に挿入され茎端部及び関部は不明。わずかに露出している部分から考えると両関かと思われる。現存長12.9cm、身長約7.8cm、背幅0.4cm。切先付近には木質の繊維痕とその上に布の痕跡がみられる。4は平造り、角背。関部は浅くすき取られる。全体に錆化著しい。背側にわずかに反りがみられる。現存長8.8cm、身長約6.9cm、背幅0.3cm。茎裏面には木質繊維痕がみられる。5は平造り、角背、同一個体の身部片である。切先側現存長3.3cm、背幅0.2cm、関側の現存長2.3cm、背幅0.3cmを測る。

鉄 鏃

6は全体に錆化著しく身部先端の原形は不明。円頭または方頭の広根斧箭式と思われる。篋被ぎと茎の境の形状は不明であるが茎幅から考えると有段あるいはすき取られる形態のものであろう。口巻には樹皮を巻く。現存長6.8cm。7～8は方頭広根斧箭式と思われる。7の篋被ぎと茎の境は6と同形態であろう。現存長5.7cm、先端から口巻の痕跡まで4.9cm。8は篋被ぎと茎の境のない形態のものと思われる。錆化著しい。現存長8.0cm。9は6～7と同形態の鏃の篋被ぎ～茎片であろう。矢竹及び樹皮が残っている。現存長7.6cm、茎長約4.5cm。10は茎端部片である。全体に竹の繊維痕がみられる。現存長3.3cm。

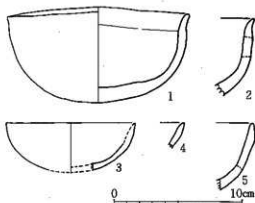
これら鉄器は6号横穴墓出土とされるがいずれも出土地点は不明である。46年報告書には記載されない。

7. 7号横穴墓

(1) 土器 (第7図)

土師器

1は丸底の埴である。口縁部は直立気味に外反し端部は丸い。口縁部外面には強い横ナデによる凹面が巡る。外面ナデ、内面ヘラミガキ調整される。口径14.1cm、器高7.4cm。支門



に近い狭道左壁際出土。46年報告書には記載されていない。2も埴の口縁部～体部片である。口縁端部がやや外反し外面横ナデが巡る。ほかは全てヘラミガキと思われる。

3～5は坏である。3～4はともに口縁端部が尖り気味、5は直立し、いずれも外面横ナデ。ほかは内外面とも丁寧なナデ調整される。5は口縁部外面に稜がみられる。3は口径10.0cm、推定器高約3.9cm、丸底

第7図 7号横穴墓出土土器実測図(1/3) になると思われる。

2～5は出土地点が不明で46年報告書にも記載されていない。

8. 8号横穴墓

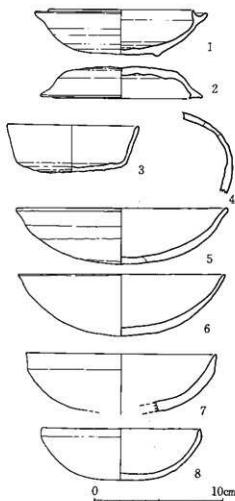
(1) 土器 (第8図)

須恵器

1は外面全体に自然釉がかかるが一応坏として扱い、2は坏蓋としておく。1の底部は部分的にヘラ削りがみられ、ほかはナデ。2は天井部中央ヘラ切り、周囲をヘラ削り。自然釉がかかる。1は口径11.2cm、受部径13.5cm、たちあがり高0.2cm、器高3.5cm。支室入口中央出土。2は推定口径10.6cm、推定受部径12.6cm、かえり高0.1cm、器高2.4cm。羨門閉塞石付近で出土したものとおもわれる。65ページ19～20行に記載。

3は坏と思われる。底部中央ヘラ切り、そのまわりはヘラ削りされ、ほかは内外面ともナデ調整される。器高3.6cm、口縁部はやや楕円形気味で長径10.2cm、短径9.8cmを測る。支室入口左側の溝溝上で出土。64ページ23行～65ページ1行に記載。

4は壺の肩部片と思われる。外面下部に自然釉がみられる。ほかは風化のため不明。内面



第8図 8号横穴墓出土土器実測図

(1/3)

(2) 鉄器・装身具 (第9図)

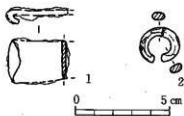
1は端部が折れ曲がり刃部は先細りになると思われるためここでは鎌としておく。しかし、鋤(鍬)先の磨滅したものである可能性もある。最大幅2.3cm、厚さ0.2cm。出土地点不明。記載されていない。

2は銅地に金色の箔が覆われ金環と思われるが金そのものではなく金銅の類であろう。緑青著しい。外径で長径2.1cm、短径1.8cm、断面径は長

ナデ。内面にも釉が点々と付着している。出土地点は不明。46年報告書にも記載はない。

土師器

5~8は坏である。5の口縁部外面はあまい稜をなし外反する。端部は丸味をおびる。全面ナデ調整されるが、口縁部外面は特に丁寧なナデである。口径16.3cm、器高4.4cmを測り丸底である。玄室入口右側周溝上で出土。61ページ19行に記載。6は全面ナデ調整で口唇部にわずかに面取りがみられる。口径16.0cm、器高4.9cm。底部丸底。玄室内出土とされるが出土地点は不明。46年報告書に該当する記載はみられない。7は口縁部外面は横ナデされ稜をなし、その稜から垂直気味に立ち上がった端部は尖る。全体に器壁が厚い。内外面ともナデ。推定口径14.8cm、推定器高約4.5cmを測る。玄室内出土とされるが出土地点は不明。該当する記載はない。8は口縁端部がやや内湾気味に直立し外面にあまい稜をもつ。外面は風化のため調整不明。内面は丁寧なナデ調整される。玄室内出土とされるが、出土地点等不明。61ページ19行の記述に該当するものと思われる。



第9図 8号横穴墓出土鉄器・装身具実測図 (1/2)

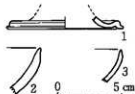
径0.7cm、短径0.5cmを測る。支室内出土だが出土地点は不明。56ページ8～10行に記載。

9. 9号横穴墓

(1) 土器 (第10図)

須恵器

1は高杯の脚部片と思われる。外面は丁寧なナデ。一部に煤が付着している。推定底径8.7cmを測る。羨道部出土とされるが出土地点は不明。46年報告書に記載はない。



第10図 9号横穴墓出土土器実測図(1/3)

土師器

2～3は坏口縁部片である。2は全面ナデ調整されるが口縁部外面のみ横ナデされ垂直に立ちあがる。3も全面ナデ調整され口縁部は内湾気味に立ちあがる。2～3ともに出土地点不明。46年報告書にも記載されていない。なお、2は8号横穴墓出土第8図7の坏片と同一個体と思われるが、その出土経過については不明である。

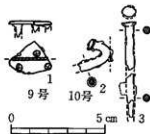
(2) 鉄製品 (第11図1)

錆による剥離や欠損が著しいが鉄製の三角形の板に鋏先のような突起が三ヶ所着くものである。板の平らな面は剥離のため鋏頭など認められない。辻金具か。厚さ0.2cm。支室内部出土とされるが出土地点は不明。46年報告書にも記載はない。

10. 10号横穴墓

(1) 鉄製品 (第11図2～3)

2～3は錆が著しく癒着していた。前庭部出土とされるもので丸釘の類と思われる。46年報告書には記載されていない。



第11図 9号・10号横穴墓出土鉄製品実測図(1/2)

11. 11号横穴墓

(1) 土器 (第12図)

須恵器

1は大甕の胴部片かと思われる。外面平行線文タタキの上をカキ目、内面は同心円文である。器厚約0.9cm。

2は壺の胴部片と思われる。外面は平行線文タタキの上をナデ。部分的にタタキが残る。内面は同心円文である。

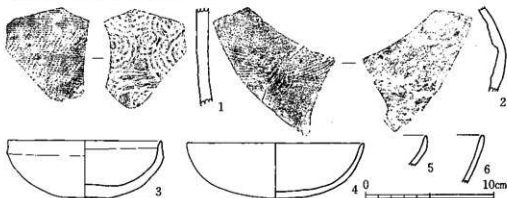
1は支室内出土とされ、2は支室内及び前庭部出土とされるがともに出土地点は不明。

土師器

3～4は坏である。3は平底をなし底部に「X」印のヘラ記号がみられる。口縁端部は直

立し外面丁寧な横ナデ。胴部外面は薄く剝離しているがヘラミガキがみられる。内面は剝離のため調整不明。口径11.8cm、底径3.8cm、器高4.5cmを測る。4は全面ナデ調整され口縁部は内湾しながら開く。丸底で口径13.6cm、器高4.3cmを測る。3～4ともに玄室内右側壁側中央付近の床面で出土。4は裏返しに置かれていたようであるが坏蓋ではなく3とセットにはならない。4は61ページ20行に記載される。

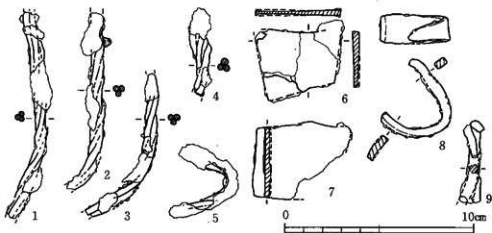
5～6は坏口縁部片である。5は口縁端部は直立し外面横ナデ、内面丁寧な横ナデである。6は全面ナデ調整され直口気味に開く。ともに玄室内出土とされるが出土地点は不明。46年報告書には記載されていない。



第12図 11号横穴墓出土土器実測図・拓影 (1/3)

(2) 鉄器 (第13図)

1～5は断面円形の棒状のものを3本まとめて燃ってあるもので断面は錆化のため中空



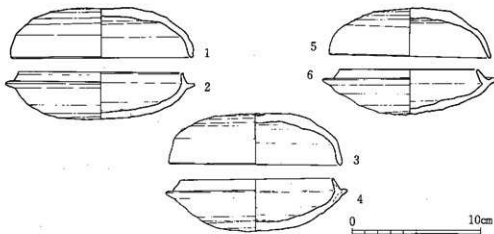
第13図 11号横穴墓出土鉄製品実測図 (1/2)

である。1本の径は3.5mm前後である。馬具の一部かとも考えたが湾曲の状態などどの部位にあたるのか不明である。あるいは後世の釘金の類かもしれない。錆化著しい。羨道部埋土出土とされる。出土地点は不明である。報告書に記載はない。

6～7は厚さ2～3mmの鉄板である。錆が著しいが長方形状になると思われる。6は前庭部出土とされるが7とともに出土地点は不明である。59ページ14行記載の馬具の一部か。

8は湾曲した板状の鉄製品で断面長方形、片方が尖っている。剝離がすすんでいる。羨道部埋土出土とされる。出土地点は不明。59ページ7行記載の鐻の計測値に近いが刃部はみられない。

9は丸釘と思われる。錆が著しい。玄室内出土とされる。報告書に記載はない。



第14図 12号横穴墓出土土器実測図(1) (1/3)

12. 12号横穴墓

(1) 土器

須恵器 (第14図～第16図)

第14図1～6はそれぞれセットをなすと思われる。

1は口径13.9cm、器高3.9cm。天井部中央へら切り、そのまわりはナデ、肩部をへら削りしそのほかは全てナデ調整される。へら削りの上にわずかに自然軸がみられる。2は口径が12.8cm、受部径14.7cm、たちあがり高0.8cm、器高3.7cm。底部中央へら切り、そのまわりはへら削り、ほかは全てナデである。受部は水平でたちあがり端部はわずかに直立し斜めに面取りされる。

3は口径13.3cm、器高4.0cm。天井部中央へら切り、周囲をへら削り、ほかは全てナデで

ある。天井部には短い1条のヘラ記号がみられる。23ページ19行、65ページ4～5行記載のものに該当すると考えられる。4は口径11.8cm、受部径14.2cm、たちあがり高0.9cm、器高4.1cmを測る。底部中央ヘラ切り、周囲をヘラ削りし、そのほかはナデ調整される。たちあがり端部は丸い。

5は口径12.4cm、器高3.7cm。天井部ヘラ削り、ほかは全てナデ調整される。23ページ17行、65ページ3行に記載。6は口径10.7cm、受部径13.5cm、たちあがり高0.7cm、器高3.5cm。底部はヘラ削りされ「ノ」印のヘラ記号がみられる。ほかは全てナデ調整。受部は沈線状にややくぼみ、たちあがり端部は丸味をおびる。23ページ10～11行、66ページ1行に記載。

1～6のヘラ削りは全て時計まわりのロクロ回転によってなされる。

第16図 1～2はセットをなすと思われる。

1は口径8.6cm、受部径10.6cm、かえり高0.2cm、器高2.8cm。天井部ヘラ切り、ほかは全面ナデ調整される。受端部は丸味をおび、かえり端部はわずかに面取りされる。23ページ9～10行、65ページ22行に記載。2は口径9.8cm、器高2.9cm。底部ヘラ切り、ほかは全てナデ調整。

3～7は坏蓋である。3と7は天井部中央ヘラ切り、そのまわりをヘラ削り、ほかは全面ナデ調整される。7には「V」印のヘラ記号がみられる。3は口径14.5cm、器高3.9cm。7は口径12.1cm、器高4.0cm。ともに口縁端部は尖り気味に成形される。4～6は天井部ヘラ削り、ほかは全面ナデである。4のヘラ削りは特に丁寧である。また、6の肩部と口縁部の境の稜は明瞭である。5には「×」印のヘラ記号がみられる。口縁端部はいずれも丸く仕上げられる。4は口径14.2cm、器高4.0cm、5は口径14.0cm、器高3.6cm、6は推定口径14.2cm、推定器高は約3.5cm前後であろう。5は23ページ18行、65ページ5行に記載されている。

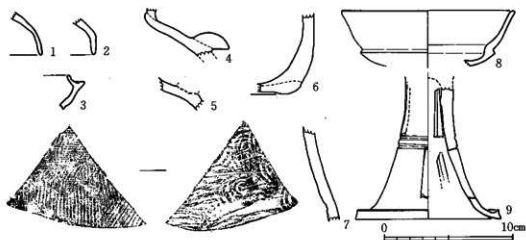
8～19は坏である。8～11は底部ヘラ削りでそのほかは全面ナデ調整される。10～11の底部内面には仕上げのナデ痕はみられない。また、10～11には受端部から体部にかけて自然袖の付着がみられる。8は口径13.1cm、受部径15.5cm、たちあがり高0.9cm、器高4.0cm。たちあがり端部はわずかに面取りされる。9は口径13.3cm、受部径15.8cm、たちあがり高0.9cm、器高4.2cm。たちあがり端部に明確な面取りがみられる。23ページ14行、66ページ5行に記載される。10は口径12.7cm、受部径15.1cm、たちあがり高0.9cm、器高4.1cm、23ページ13行、66ページ4行に記載。11は推定口径13.4cm、推定受部径15.3cm、たちあがり高0.8cm、推定器高約3.8cm。10～11のたちあがり端部はやや尖り気味に成形される。12は焼成があまく風化しているため調整不明。推定口径12.2cm、推定受部径14.9cm、たちあがり高0.9cm、推定

器高は4.2cm前後と思われる。たちあがり端部は尖り気味に成形される。13~15は底部ヘラ削り、ほかは全面ナデ調整される。16は底部を欠失しているが体部にわずかにヘラ削りが認められるほかは全てナデ調整される。また、16は受部上面から体部にかけて自然軸がみられ、底部には2条のヘラ記号がみられる。13は口径12.4cm、受部径14.8cm、たちあがり高0.8cm、器高4.1cm、14は口径約12.5cm、受部径14.7cm、たちあがり高0.8cm、推定器高は約3.4cm前後と思われる。13~14のたちあがり端部はわずかに面取りされる。15は推定口径11.6cm、推定受部径14.1cm、たちあがり高0.7cm、器高3.3cm、16は口径11.2cm、受部径14.1cm、たちあがり高0.7cm、推定器高は約3.5cm前後と思われる。たちあがり端部はともに丸く尖る。17は口縁部~受部片である。全てナデ調整される。受部上面には自然軸が付着。たちあがり端部は尖り気味である。推定口径11.6cm、推定受部径14.3cm、たちあがり高1.0cm、器高は不明。ほかの坏と同じぐらいになると思われる。18~19は底部中央ヘラ切り、その周囲はヘラ削り、ほかは全てナデ調整される。18は受部~底部までほぼ全面に自然軸がかかる。また、底部には「×」印のヘラ記号がみられる。18の口径11.1cm、受部径13.6cm、たちあがり高0.6cm、器高3.8cm。たちあがり端部は尖る。23ページ11行、66ページ2行に記載。19は推定口径9.2cm。器高は3.6cmと高く、あるいは短頸壺の蓋の可能性もある。

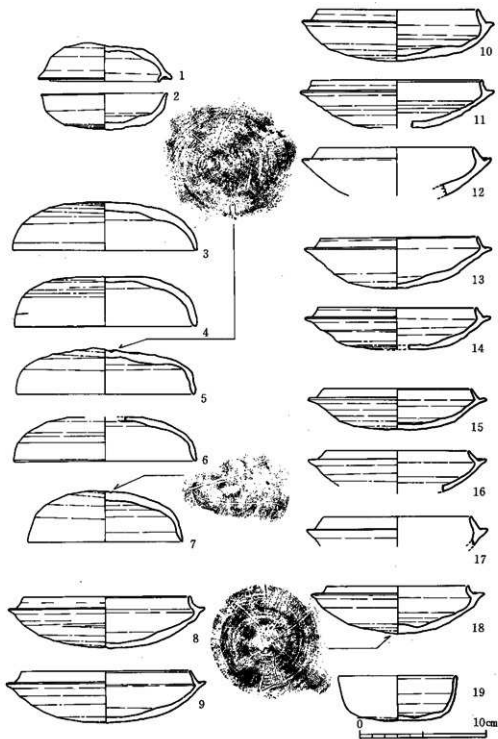
1~11・13~16・18~19のヘラ削りは時計まわりのロクロ回転によってなされている。

第15図1~3は坏蓋及び坏片である。1~2は坏蓋とともにナデ調整されている。3は坏で底部を欠くがわずかにヘラ削りがみられる。たちあがり高0.5cm、端部は丸くおさめる。

4は提瓶の頸部~体部片である。把手のある肩部までを図化している。内面及び頸部外面



第15図 12号横穴墓出土土器実測図・拓影(2) (1/3)



第16图 12号横穴墓出土土器実測図・拓影(3)(1/3)

ナデ、頸下部から把手上部までは厚く自然釉がかかり調整不明。把手径は約1.5cmである。偏平な体部側にはカキ目がみられる。23ページ21行に記載。5も耳付の壺形土器であり、提瓶の可能性があり、把手は刺彫。内面同心円文、外面平行線文タタキの後ナデ消している。

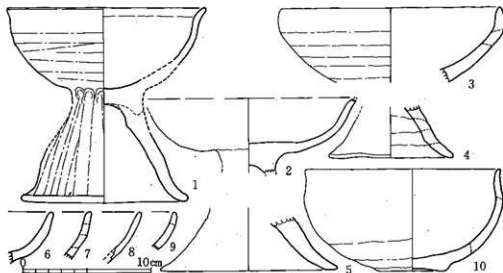
6は壺の底部と思われる。やや上げ底気味の平底で内外面とも厚く自然釉がかかる。底部ヘラ切りと思われる。

7は壺の体部片と思われる。内面同心円文の上をナデ、外面平行線文タタキの上を横方向に薄くカキ目がみられる。

8～9は同一個体の高坏である。坏部、脚部ともに全面ナデ調整される。風化著しい。8は胴下部に段を有し口縁端部は丸く尖る。推定口径13.3cm。9は中央の2条の沈線を境に上下に2箇所ずつ長方形透しが入る。右断面図側見透しの透しは上下にほぼならぶが左見透し図側の透しは上下で大きくずれる。推定底径11.3cm、8～9の推定器高15.7cm前後になると思われる。9は23ページ22行、64ページ14～15行に記載。

土師器 (第17図)

1～5は高坏である。1は坏部と脚部の接合資料である。坏部下半ヘラ削りの後ナデ、口縁部付近横ナデ。内面は丁寧なナデ調整。口縁部は外反して開き丸く仕上げられる。脚部との接合部は指押さえ、脚部外面縦方向のヘラ削りの上をナデ、脚端部から内面にかけてナデ調整されている。口径15.2cm、脚部径12.5cm、器高15.3cm。坏部は23ページ7行の増あるいは61ページ11～12行の壺に該当すると思われ、脚部は23ページ5行に記載されている。2は



第17図 12号横穴墓出土土器実測図(4) (1/3)

脚部を欠き口縁端部も欠損している。内面ナデ、外面は口縁部指ナデ、体部へら削りの後ナデ、脚部との接合部板状工具による縦ナデがみられる。口縁部は外反。推定口径16.8cm前後と思われる。3～4は同一個体と思われる。全面ナデである。3は外面に4は内面に粘土帯の接合痕が観察される。3は口径16.8cm、端部は直立する。4は脚部径9.6cm。3～4の推定器高はおおよそ11.5cm前後になろう。2～4は23ページ5～6行に記載される。5は高坏脚部と思われる。全面ナデ調整。脚部径13.8cm。6は口縁部付近及び内面はナデ、外面へら削りの後ナデ。調整の特徴から高坏坏部片と思われる。

7～8は坏あるいは高坏の坏部片と思われる。いずれもナデ調整されるが7の内面は特にナデが丁寧である。

10は坩である。口縁部はやや内傾気味に立ちあがり端部がわずかに外反する。胴部下半は指匠痕で凸凹があるが全面ナデ調整される。底部は若干上げ底になり、底面に2条の沈線がみられる。口径15.1cm、底径5.0cm、器高8.0cm。23ページ3～4行記載のものか。

上記の須恵器・土師器類は前室から出土しているが個々の出土地点については特定できない。ただ、中央の排水溝より右側で多く出土している。

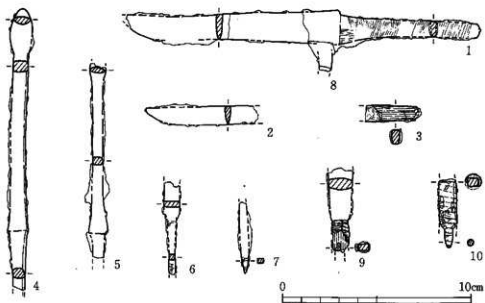
(2) 鉄器 (第18図)

刀子

1～2は平造り、角背で1は背開僅だけの片開と思われる。1は現存長18.8cm、茎長7.4cm、背幅0.3cm。茎には斜方向の繊維巻の痕跡が残り、開近くには木質繊維痕もみられる。2は現存長6.0cm、背幅0.3cm。ともに錆化著しい。58ページ7～8行の記述では1～2を接合資料として報告されているようであるが接合状態にやや無理があったためここでは分離し図化した。3は一部に樹皮状の繊維痕もみられるが木質の残存状態や断面の様子から刀子の茎端部として図化した。現存長2.9cm。

鉄鎌

4～5は錆のため全体が膨んでいるが両丸造篋被柳葉式に相当すると思われる。4は現存長14.9cm、先端から篋被ぎ端部まで11.8cm。篋被ぎは茎付近が幅広になり境はわずかに段を有すると思われる。5も同形式と思われる現存長10.3cmを測る。8はこの形式の鎌の篋被ぎ部分かと思われ1に錆着している。7は茎の先端部である。端部に繊維痕がみられる。現存長3.8cm。6・9～10は篋被ぎ～茎片である。6は現存長4.9cm。茎には横方向の繊維痕がみられる。9は段を有するもので、茎は繊維で巻かれ矢竹に挿入、上を樹皮巻きしている。現存長4.5cm。10も同様に茎を繊維で巻きそれを矢竹に挿入、上を樹皮巻きしている。篋被ぎ



第18図 12号横穴墓出土鉄器実測図(1/2)

と茎の境の形状は不明。現存長3.6cm、口巻きから茎端部まで3.5cmを測る。

これら鉄器類の個々の出土地点については特定できないが、4が前庭部、9が後室、3・6~7・10が前室の前面、1~2・5・8が前室内出土とされる。なお、58ページ23行記載の鉄器は該当するものが見当たらない。

13. 14号横穴墓

(1) 鉄器 (第19図)

全体に錆が著しいが倒卵形の鈎と考えられる。長径5.4cm、短径4.5cm、厚さ0.4cm。出土地点不明。25ページ終行に遺物は出土していないとあるが、これは14号横穴墓出土とされているものである。



第19図 14号横穴墓出土鉄器実測図(1/2)

14. 15号横穴墓

(1) 土器 (第20図)

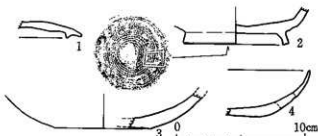
須恵器

1は坯蓋片、2は坯片である。1は全面ナデ調整。天井部付近につまみの剝離痕と思われる若干の盛りあがりが見られる。かえり高0.2cm。26ページ終行に記載。2は高台を有し底部及び高台に近い腰部にカキ目が巡る。ほかは全てナデ調整。底部には「卍」印のヘラ記

号がみられる。高台径7.7cm。

土師器

4は坏片である。風化しているがナデ調整と思われ口縁端部は内湾気味に立ちあがる。推定器高3.8cm前後と思われる。26ページ終行に記載。



第20図 15号横穴墓出土土器実測図・拓影(1/3)

その他

3は陶器片と思われる。底部は丁寧なヘラ切り、外面は丁寧なナデ、内面はナデの上に軸葉が施されているようである。後世持ち込まれたものであろう。

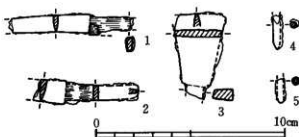
(2) 鉄器 (第21図)

刀子

1は平造り、角背。茎に木質繊維が残存しているため関の形状は不明。背開側は深くすき取られるようである。現存長6.6cm、背幅0.3cm。溝道閉塞石付近出土とされるが出土地点は不明。2は平造り、角背、両関と思われる。現存長5.6cm、背幅0.3cm、茎長3.9cm。茎には木質繊維痕がみられる。出土地点不明。1～2は記載されていない。

鉄 鏃

3は方頭広根斧箭式。鏃のため全体が膨らむ。現存長4.3cm。玄室内出土とされるが26ページ終行記載のものに該当するかどうかは不明。



第21図 15号横穴墓出土鉄器実測図(1/2)

その他

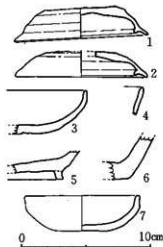
4～5は錆化著しく形状はわかりにくい丸釘の一部かと思われる。

15. 16号横穴墓

(1) 土器 (第22図)

須恵器

1～2は坏蓋である。1は天井部ヘラ切り、肩部との境ヘラ削り、ほかは全てナデ。2は天井部ヘラ削り、ほかは全てナデ。ともにかえりは低い。天井部整形は時計まわりのロクロ



第22図 16号横穴墓出土土器
実測図(1/3)

回転によってなされる。1は推定口径8.4cm、推定受部径10.4cm、器高2.4cm。2は推定口径8.3cm、推定受部径10.2cm、推定器高2.0cm前後と思われる。1～2ともに玄室内出土とされるが1は出土地点不明。2は玄室右側の落ち込みの中から出土したものに該当すると思われる。46年報告書に記載されていない。3～5は坏である。3は底部へら切り、ほかは全面ナデ調整される。内面に点々と自然釉らしいものがみられる。口縁端部は直立し丸味をもつ。器高はおおよそ3.5cm前後になるとと思われる。4は口縁部片である。ナデ調整される。5は高台付の底部片である。底部へら削りの後ナデ、高台を含むほか全面ナデ調整される。3～5は玄室内出土とされるが出土地点不明。記載はない。

6は壺の底部と思われるもので、底部へら切り、ほかはナデのようである。

土師器

7は坏である。口縁部は短く直立し端部が丸い。全面ナデ。底部はわずかに上げ底気味の平底である。推定口径8.6cm、底径3.2cm、器高2.8cm。玄室内出土とされるが出土地点は不明。46年報告書には記載されていない。

16. 17号横穴墓

遺物は出土していない。

17. 18号横穴墓

(1) 土器・土製品(第23図)

須恵器

1～3は坏蓋及び坏である。1～2はセットになるとと思われる。1は天井部中央へら切り、肩部にかけてへら削り、ほかはナデ調整。かえりは低い。ロクロ回転は時計まわりである。推定口径8.8cm、推定受部径10.4cm、推定器高2.4cm前後になるとと思われる。2は底部平底でそのまま外傾して開き口縁端部は尖り気味にやや内傾する。底部へら切り、体部との境へら削り、口縁部外面及び内器面ナデ調整。推定口径9.4cm、推定底径5.7cm、推定器高2.8cm。ともに玄室内出土とされるが1は出土地点不明。2は玄室入口右側床面出土のものに該当すると思われる。46年報告書には記載されていない。3は底部へら切り、ほかはナデ。

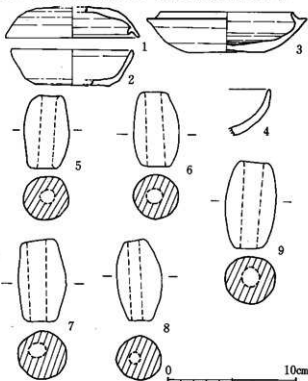
口径10.2cm、受部径12.4cm、たちあがり高0.5cm、器高3.1cm。羨道左側壁際で出土。66ページ9～10行に記載されている。

土師器

4は坏である。口縁部は直立し丸くおさまられる。内面丁寧なナデ。外面はナデと思われる。器高は約3.5cm前後になると思われる。玄室内右側壁近くの床面出土。記載はない。

瓦器

5～9は瓦器製と思われる非常に硬質な土鍾である。5は赤焼けだが6～9は黒褐色を呈する。それぞれのa-長さ、b-中央断面での径(長径、短径)、c-中央断面での孔径(長径、短径)は次のとおりである。5はa-5.7cm、b-(3.5cm、3.4cm)、c-1.1cm、6はa-5.8cm、b-3.5cm、c-(1.3cm、1.2cm)、7はa-6.5cm、b-3.8cm、c-(1.4cm、1.1cm)、8はa-6.3cm、b-(3.5cm、3.4cm)、c-0.9cm、9はa-6.8cm、b-(3.9cm、3.7cm)、c-(1.6cm、1.4cm)を測る。



第23図 18号横穴墓出土土器・土製品実測図(1/3)

これらは全て前庭部出土とされる。46年報告書には記載されていない。

18. 19号横穴墓

(1) 鉄器(第24図)

不明鉄器

1は現存長11.2cm。断面長方形で厚さは上部0.6～0.7cm、下部0.4～0.6cmを測る。直刀の基かとも思われるが46年報告書には58ページ4行に刀身の記述があるのみでこれは記載されていない。なお、この刀身は現在所在不明である。

2～3は錆化著しいが折損部断面の形状からみて2は刀子あるいは片刃箭式鐵かと思われ

る。3は丸釘状のものである。出土地点不明。
58ページ14行記載の鉄線破片に該当するものであろうか。

19. 20号・21号横穴墓

遺物は出土していない。

20. 24号横穴墓

(1) 土器 (第25図)

須恵器

1は坏蓋である。つまみに近く1条の沈線が通る。全面ナデ調整。口径14.7cm、器高2.7

cm、つまみ径2.8cm。色調は茶褐色を呈する。羨道部中央で出土。63ページ22行~64ページ1行に記載。

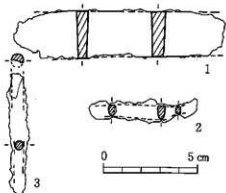
2は坏口縁部片である。ナデ調整され口縁部内面には自然釉が付着している。5も坏口縁部片と思われる。全面丁寧なナデ。ともに出土地点不明。記載もない。

4は短頸壺の口縁部片、3はその蓋と思われる。4は全面ナデ。口縁部は短く立ちあがる。外面下部には自然釉がみられる。3は天井部へら切り、肩部との境へら削り、ほかはナデ調整される。口縁端部は丸く尖る。形状がいびつであるため口径は長径10.5cm、短径約9.0cm前後で器高は4.0cmを測る。玄室入口左壁際出土のものに該当すると思われる。

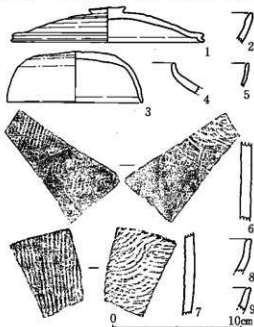
6~7は壺体部片である。6は外面格子目タタキとナデ、内面上部は同心円文、大部分は不定方向のナデである。厚さ0.8cm。7は外面縦方向の平行線文タタキ、内面同心円文。出土地点は不明。記載されていない。

土師器

8~9は坏口縁部片である。端部内面に



第24図 19号横穴墓出土鉄器実測図 (1/2)



第25図 24号横穴墓出土土器実測図
・拓影 (1/3)

は面取りがなされる。全面ナデ調整。出土地点不明。記載されていない。

(2) 鉄器・装身具 (第26図)

刀子

1は錆を除去する段階で折損したもので同一個体である。平造り、角背。背開は深くすぎ取られると思われるが刃開は不明。基部は錆のため大きく膨らむ。表面には木質繊維質が残る。切先側現存長4.1cm、背幅0.2cm。基部現存長5.4cm、背幅0.3cm。2は平造り、角背で現存長9.7cm、背幅0.3cm。錆化著しい。刀子については58ページ9行に記載があるが1～2はそれに該当せず、現在直接接合できないが4～5が接合資料だとするとむしろこちらの方が刀子の記述に近い。

不明鉄器

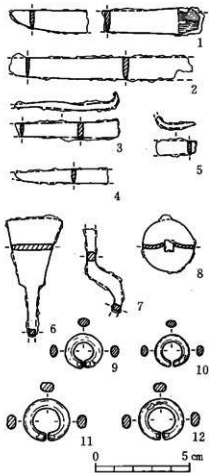
3～5は断面の形状が平造り、角背の刀子状であり先端も切先状になるとと思われる。基部側先端は湾曲しており開部も不明。刃部と思われる鋭利な部分があるので刀子同様の使用法が考えられよう。3は現存長5.5cm、断面での背幅は切先側0.2cm、基部側0.3cm。4は現存長4.9cm、背幅0.2cm、5は現存長2.1cm、厚さ0.2cm。1～5の出土地点は不明。遺構原因に支室内出土の鉄器片が記録されているのであるいはこれに該当するかもしれない。

鉄 鏃

6は先端が錆のため膨らんでいるが方頭広根斧箭式の鏃と思われる。茎に繊維痕等はみられない。錆の具合からみて基部は身部から0.5cm程の間隔をおいて矢竹に固定されていたものと考えられる。現存長6.3cm。玄室中央部で出土。58ページ17行記載。なお、18行記載の刀身形の鏃は該当するものが見当たらない。

馬 具

7は錆が著しいので形状もわかりにくい、こ



第26図 24号横穴墓出土鉄器
・装身具実測図 (1/2)

こでは鉸具の一部としておく。断面は円形に近い方形である。46年報告書には記載されていない。

その他

8は円形で中央に方形の穿孔があり、この部分がやや盛りあがっている。用途不明。このほかに図化しなかったが針金や丸釘と思われる鉄製品及び最近のものと思われる鎌等も出土している。

耳環

9～12は銅地に白っぽい金色の箔を張ってある金環である。全体を緑青でおおわれており金そのものではなく金銅張りかと思われる。内側面は割合残りが良い。断面形はいずれも内側面・外側面が平らな楕円形に近い形状であり、外形も楕円形気味である。9は長径2.0cm、短径1.8cm、断面の長径0.6cm、短径0.4cm。10は長径1.8cm、短径1.7cm、断面の長径0.6cm、短径0.4cm。11は長径2.4cm、短径2.2cm、断面の長径0.7cm、短径0.5cm。12は長径2.4cm、短径2.2cm、断面の長径0.7cm、短径0.5cm。出土地点の明確なのは33ページ3～7行にあるとおり2個のみであるが、それが9～12のどの遺物にあたるのかは特定できない。33ページ15～16行、56ページ11～20行に記載。

21. 25号横穴墓

(1) 土器 (第27図)

須恵器

1は坏口縁部片と思われる。内面及び口縁部外面はナデ調整。外面体部はヘラ削りの後ナデ調整。

2は廻の口縁部片と思われる。口縁下部に浅い沈線が

1条走り、口唇部外面にわずかな面取りがみられる。全面ナデ調整。推定口径9.6cm。出土地点不明。

1～2は25号横穴墓出土とされるが34ページ6行には遺物なしとなっている。このほかに土師器小片も出土している。

22. 27号・29号・30号横穴墓

遺物は出土していない。



第27図 25号横穴墓出土土器
実測図(1/3)

23. 31号横穴墓

(1) 土器 (第28図)

須恵器

1～3は坏蓋及び坏片である。1は天井部中央ナデ、肩部にかけてヘラ削り、口縁部から内面にかけてナデ調整される。かえりは小さく低い。つまみの有無は不明。推定口径10.2cm、推定受部径12.2cm。ヘラ削りのログロ回転は時計まわりである。2～3は高台付坏で2は疊付部が欠損し3は高台が剝離していると思われる。2は全面ナデ。器高は約4.1cm前後と思われる。3は底部ヘラ切り、腰部ヘラ削り、ほかは全面ナデ。推定口径12.2cmを測る。3は67ページ12～13行記載の台付皿に該当すると思われる。

4は甕の肩部片と思われる。内面下部に同心円文、上部ナデ。外面は上部からナデ。格子目タタキの上に一部カキ目、格子目タタキの順に調整されている。

1～4はいずれも出土地点不明。

24. 34号横穴墓

(1) 土器 (第29図)

須恵器

1は坏蓋、2は坏口縁部片である。1は天井部ヘラ切り、ほかは全てナデ。外面肩部と口縁部の境に浅い沈線が1条巡る。口縁端部は丸くおさめる。口径11.6cm、器高3.7cm。53ページ16行に記載。2は全面ナデ。たちあがり端部は丸い。たちあがり高0.5cm。記載はない。

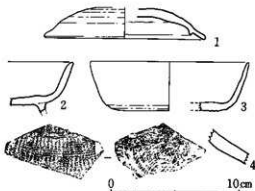
3～5は同一個体で提瓶の口縁部～頸部、肩部片と思われる。調整は内面ナデ、外面は3がナデ、4～5は偏平な胴部に中心を持つと考えられる同心円状のカキ目調整である。いずれも外面には厚く自然釉がかかる。口径7.8cm。53ページ17～18行に記載。

6は変形土器の口縁部片で甕の類と思われる。外面には浅い沈線が1条巡り全面ナデ調整される。推定口径は10.5cm前後と思われる。

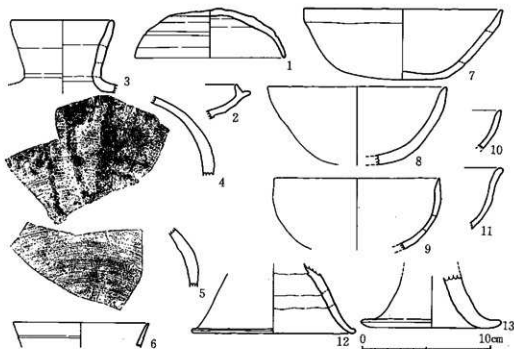
1～6の出土地点はいずれも不明。

土師器

7～8・10～11は坏である。7は口縁部外面が稜をなして直立し端部は丸く尖る。内面及



第28図 31号横穴墓出土土器実測図
・拓影(1/3)



第29図 34号横穴墓出土土器実測図・拓影(1/3)

び口縁部外面ナデ、体部は板状工具による削り、底部は板状工具によりナデ調整される。口径15.4cm、器高5.6cm。53ページ19～20行に記載。8は体部外面粗いナデ、ほかは全てナデ。口縁端部は内面側がやや外反気味に立ちあがり丸くおさめられる。口径13.9cm、推定器高6.1cm前後と思われる。10は全面ナデ。口縁端部は丸い。11は全面ナデ。口縁部は外反し端部が丸く玉縁状になる。

9は口縁部外面が内湾気味に直立し内面は稜をなして外傾、端部は丸く尖る。碗形土器かと思われる。全面ナデ調整される。推定口径12.8cm、推定器高は5.7cm前後であろう。

12～13は高坏脚部である。12は全面ナデ。内面には粘土帯の接合痕がみられる。13は内面未調整でほかは全てナデ。器壁が厚く脚部は大きく広がる。12の推定脚部径12.8cm、13の推定脚部径11.9cm。ともに46年報告書には記載されていない。

これら7～13の出土地点は不明。

(2) 鉄器 (第30図)

鉄 鏃

方頭広根斧箭式である。錆化著しく先端が欠損、茎も欠失している。現存長6.7cm。玄室

入口出土とされるが出土地点は不明。53ページ21～22行に記載。

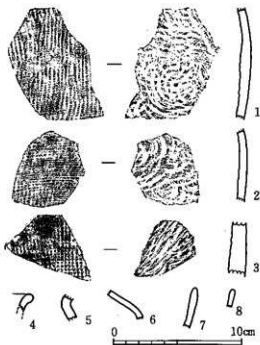
なお、53ページ23行記載の刀子及び59ページ10～11行記載の釘に該当する遺物は見当たらない。

25. 35号横穴墓

(1) 土器 (第31図)

須恵器

1・3は甕体部片と思われる。内面同心円文、外面格子目タタキがみられる。2は瓶類の体部片と思われる。内面同心円文の上をナデ、外面横方向のカキ目。

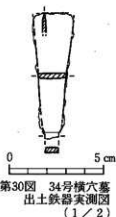


第31図 35号横穴墓出土土器実測図
・拓影 (1/3)

(2) 鉄器 (第32図)

1は方頭広根斧箭式の鉄鎌である。身先先端を中心に錆化著しい。鎌身基部から茎にかけて横方向の繊維痕が認められる。

2は頭部先端が折り曲げられた断面円形の釘状の鉄製品で



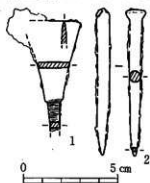
第30図 34号横穴墓
出土鉄器実測図
(1/2)

4～5は別個体と思われる壺の口縁部と頸部片である。4は口縁端部に自然釉が付着。全面ナデ。5は外面ナデ、内面は胴上部が同心円文、頸部ナデ調整。

6は短頸壺の肩部片と思われる。両面ナデ調整。胴部最大径付近に沈線が1条通る。
土師器

7～8は坏口縁部片でどちらもナデ調整される。8は口縁端部がわずかに面取りされる。

上記1～8は35号横穴墓出土とされるが、46年報告書では出土遺物はないとしてある。



第32図 35号横穴墓出土鉄器
実測図 (1/2)

ある。錆のため亀裂が著しい。

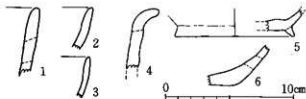
上記1～2も土器同様35号横穴墓出土とされるが46年報告書38ページ8行には遺物はないと記されている。

26. 36号横穴墓

(1) 土器 (第33図)

土師器

1～3は坏口縁部片と思われる。1は器高が割合高く坏(または鉢)形土器と思われる。口縁部は外反気味に直立する。ナ



第33図 36号横穴墓出土土器実測図(1/3)

デ調整。2～3はやや内湾気味に外傾する口縁をもつもので、いずれもナデ調整される。

4は妻口縁部片である。大きく外反する口縁端部は丸くおさまる。風化のため調整不明。

5～6は坏底部片である。5は高台付の坏片で全面ナデ調整。墨付は丸く仕上げられる。推定高台径9.1cm。6は平底の坏片である。内外面とも粗いナデで仕上げる。

これら1～6の出土地点は不明。46年報告書にも記載されていない。

27. 37号横穴墓

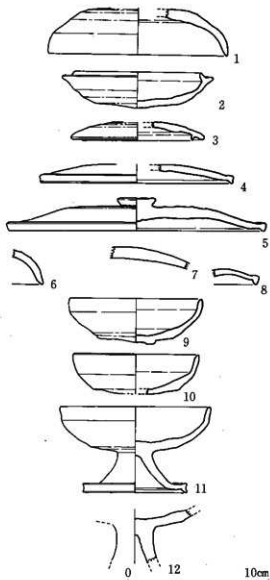
(1) 土器

須恵器 (第34図～第35図)

第34図1・3～8は坏蓋である。1は天井部ヘラ切り、肩部の境ヘラ削り、ほかは全てナデ。口縁端部は丸味をもって尖る。推定口径13.8cm、推定器高3.6cm。3は天井部ヘラ切り、肩部との境ヘラ削り、ほかは全てナデ。推定口径8.6cm、推定受部径10.4cm、かえり高0.1cm、推定器高1.4cm前後と思われる。4は天井部ヘラ削りの後ナデ、ほかは全てナデ。つまみは欠失していると思われる。推定口径14.8cm、器高は1.5～2.5cm前後であろう。5はつまみを有し、天井部丁寧なヘラ削り、肩部～口縁部までを丁寧なナデ、内面ナデ調整。口縁端部は4に比して丸味をもつ。推定口径19.8cm、器高2.5cm。つまみは偏平である。6は1と同形態のかえりのないもので天井部は不明、肩部との境ヘラ削り、ほかはナデ。7～8は4～5と同形態のものと思われ、7は全面ナデ調整、8もナデ調整されている。

1・3～4・8は前庭部出土とされるが出土地点は不明。5～7は出土地点不明。5は64ページ2～5行に該当。そのほかは記載されていない。

2・9～10は坏である。2は底部ヘラ切り、肩部との境ヘラ削り、ほかは全てナデ。推定



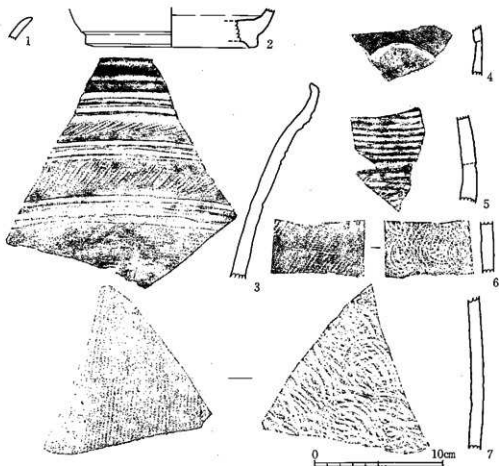
第34図 37号横穴墓出土土器実測図(1) (1/3)

第35図 1～2は壺の口縁部片及び底部片と思われる。1はナデ調整され口縁端部はわずかに面取りされる。2は上げ底の底部から直立気味に体部がのびるものである。全面ナデ。推定底径13.4cm。1～2は前庭部出土とされるが出土地点不明。

3及び5～7は別個体の壺の口縁部片と体部片である。3は外面に2条を単位とする沈線

口径9.8cm、推定受部径11.8cm、たちあがり高0.3cm、器高2.8cm。前庭部出土とされるが地点不明。9は底部ヘラ切り、体部にかけてヘラ削り、口縁部から内面はナデ。口縁端部はあまい稜をなして立ちあがり丸味をおびる。口径10.2cm、器高3.4cm。10は底部ヘラ切り、ほかは全面ナデ。口縁端部は外傾して立ちあがり丸味をおびる。推定口径9.6cm、推定器高は3.1cm前後と思われる。9は羨道部中央右側壁隙で出土し、65ページ6行に記載されている。10は前庭部出土とされるが詳しい出土地点は不明。記載はない。

11～12は高坏である。11は全面ナデ。口縁部はあまい稜をなして外傾気味に立ちあがり端部は丸い。脚部には透しはみられず、端部は尖り気味に直立する。坏部下半には粘土帯の接合痕がみられる。推定口径11.6cm、推定脚裾部径8.1cm、器高6.7cm。前庭部出土とされるが出土地点は不明。64ページ9～13行に記載されている。12は全面ナデ。坏部口縁と脚部下半は欠失している。両者の接合部の径は2.9cmである。前庭部出土とされるが出土地点は不明。46年報告書にも記載されていない。



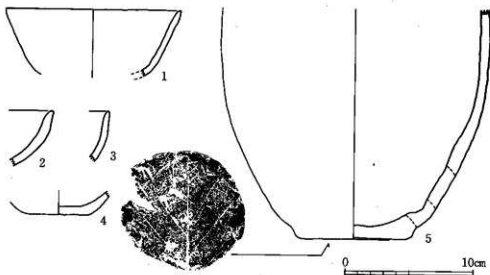
第35図 37号横穴墓出土土器実測図・拓影(2) (1/3)

が3ヶ所みられ、その間にはクシ状工具によると思われる刺突文帯が施される。ほかの部位は全面ナデ。口縁端部は短くたちあがり丸味をおびる。5は焼成があまり風化が著しい。外面横方向の平行線文タタキ、内面は不明。6は内面同心円文、外面は風化しているが格子目タタキの後ナデか。7は外面格子目タタキ、内面同心円文。これらはいずれも前庭部出土とされるが出土地点は不明。46年報告書にも記載されない。

4は瓶類の体部片と思われる。内面に粘土板で塞いだ際の円形の接合痕がみられる。全面ナデ調整。前庭部出土とされるが出土地点は不明である。

土師器 (第36図)

1~4は坏である。1は口縁部が外傾しつつ直線的にたちあがるもので内面ナデ、外面は粗いナデ調整。底部は欠失。推定口径13.6cm。2~3は口縁端部が直立するもので2は外面



第36図 37号横穴墓出土土器実測図・拓影(3) (1/3)

にあまい稜をなす。2は風化著しく調整不明、3はナデ。4は平底の底部片である。焼成はあまい。ナデ調整されている。底径4.5cm。

5は甕の胴部～底部である。胴上半部は若干内湾する。外面は板状工具で削る様にナデを行い、内面は粗いナデで仕上げる。底部には木の葉の圧痕がみられわずかに上げ底になる。胎土に1～5mmの砂粒を混入させている。胴部推定最大径21.0cm、底径8.0cmを測る。これは59ページ21～23行記載の弥生土器とされたものであるが、胎土や器形など土師器の甕と思われる。狭道入口に横たわる溝の左端で出土。

28. 38号横穴墓

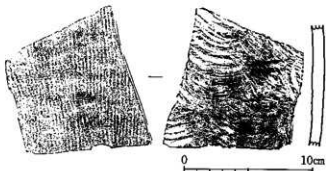
遺物は出土していない。

29. 39号横穴墓

(1) 土器 (第37図)

須恵器

甕の体部片である。外面格子目と思われるタタキ、内面同心円文。前庭部出土とされるが出土地点は不明。記載されていない。



第37図 39号横穴墓出土土器実測図・拓影(1/3)

30. 40号横穴墓

(1) 土器 (第38図)

土師器

1～3は坏蓋である。1は内面丁寧なナデ。外面は肩部と口縁部の境に稜をなし口縁部丁寧なナデ、肩部ナデ。天井部はナデと思われる。2～3は外面肩部と口縁部の境が稜をなし天井部から肩部にかけてヘラミガキ。2は口縁部内面横ヘラミガキ、外面丁寧なナデ。3は口縁部外面横ヘラミガキ。ともに内面はヘラミガキ。1～2の口縁端部は丸く、3は尖り気味になる。1は口径15.0cm、器高3.6cm。2は口径15.4cm、器高4.0cm。3は口径14.3cm、器高4.1cm。

4～5は坏蓋と坏のセットと思われるものである。4は内面ナデの後粗いヘラミガキ。外面は肩部と口縁部の境にあまい稜をなし口縁部ナデの後横ヘラミガキ。天井部から肩部にかけてヘラミガキ。口縁端部は丸くおさまる。5は底部ヘラミガキ。底部から口縁部にかけては稜をなして張り出し外反気味に大きく内傾、端部は丸くおさまられる。ナデの後横ヘラミガキ、内面ナデの後丁寧なヘラミガキ。4は口径14.2cm、器高3.9cm。5は口径12.0cm、受部径13.7cm、器高4.2cm。

6～8は坏である。6～7は底部ヘラミガキ、口縁部内外面横ヘラミガキ。蓋受部は大きく張り出し稜をなす。7の底部内面ヘラミガキ。8は底部ヘラミガキ。底部は丸味がある。口縁部内外面は風化しているがナデかと思われる。6・8の底部内面はナデ及び部分的にヘラミガキ。6～8の口縁部はいずれも丸く仕上げられ、8の底部厚は極めて薄い。6の推定口径12.6cm、受部径14.5cm、器高5.1cm。7は口径12.5cm、受部径14.6cm、器高4.7cm。8は推定口径12.6cm、推定受部径14.0cm、器高4.2cm。

これらのうち1～7の天井部あるいは底部は、それぞれ最終調整の前段階としてヘラ削りが行われたような凹面や砂粒の移動痕等がみられる。

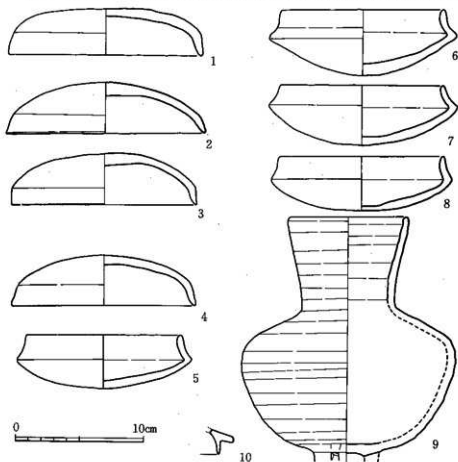
土師器は玄室中軸線より左側中央付近で7個体、奥壁の礎敷上左端部で1個体出土しているが、これら1～8が遺構原図上のどの遺物に相当するのかが特定は困難である。ただ、8は1/2個体程度の破片であるため玄室中軸線上中央付近出土であることが明白である。46年報告書では1は61ページ23行に、2は62ページ4行、3は62ページ5行、4は62ページ1行、5は62ページ3行、6は62ページ19～20行、7は62ページ2行記載のものにそれぞれ該当すると思われる。8は記載されていない。

須臾器

9は脚台付の長頸壺である。胴部上半に最大径がある。頸部から口縁部にかけて外傾しながら内湾気味に直立し端部は丸く仕上げられる。外面の調整は全て横ナデ。頸部より下位の胴～底部はその前段階としてヘラ削りを行ったような痕跡がみられる。内面は全て横ナデと思われる。脚台は欠失。接合部は円筒形で径5.0cm。接合部に長方形になるとと思われる透しが3ヵ所みられる。腹部下位に透しを切り取った際のヘラ痕が残る。脚台部内面も横ナデされる。頸部及び胴部には自然釉が付着している。口径9.1cm、頸部径7.4cm、最大径16.7cm、口縁～底部高18.6cm。玄室奥壁際中央（礎敷上右端）で出土。63ページ14～16行に記載。

その他

10は陶器の蓋と思われる破片である。受端部とかえり及び内面は無釉で外面は釉薬が施さ



第38図 40号横穴墓出土土器実測図(1/3)

れる。前庭部埋土出土とされる。46年報告書には記載されていない。

(2) 鉄器 (第39図)

刀子

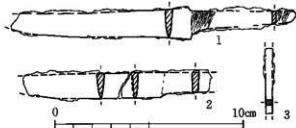
1は平造り、角背、両関。切先を欠く。錆が著しい。現存長15.2cm、背幅0.4cm、茎長5.6cm。茎には2ヵ所に細かな織維痕がみられ、刃関側は深くすき取られる。

2は平造り、角背。関部は錆のため不明瞭であるが刃関側が浅めにすき取られる片関のものと思われる。身部と茎との境の錆にかすかな柄の痕跡が認められる。背幅は身部も茎も殆ど変わらない。途中で折損、直接には接合できない。切先側現存長5.6cm、背幅0.4cm、茎側現存長4.6cm、背幅0.4cm、茎背幅0.4cmを測る。

鉄 鏝

3は鏝の茎片と思われる。端部を欠く。現存長3.5cm。断面長方形で錆のためやや膨らんでいるものと思われる。幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。

これら1～3は出土地点不明。58ページ14行に鉄鏝片多数とあるが、40号横穴墓出土とされる鉄鏝片は3のみであった。



第39図 40号横穴墓出土鉄器実測図 (1/2)

31. 41号・42号・43号横穴墓

遺物は出土していない。

32. 44号横穴墓

(1) 土器 (第40図)

須恵器

1・5～7は坏である。1は全面ナデ調整。体部外面には自然軸がかかる。たちあがりは深く内傾し端部は直立して丸い。たちあがり高0.7cm。5は底部へら切りで平底を呈する。口縁部は外傾しつつ直線的のび端部は丸くおさまる。内面及び外面体部ナデ調整。ロクロ回転は時計まわり。推定口径9.2cm、推定底径6.6cm、推定器高3.0cm。6は表面が風化しているが全面ナデ調整と思われる。焼成不良。口縁端部はわずかに外反し丸く仕上げられる。推定口径12.1cm、推定器高は3.7cm前後と思われる。底部には「×」印のへら記号がみられる。65ページ8～9行の記載内容とは異なるが一部近い表現もあるためこれが該当するか。7は高台を有し体部から口縁部が大きく外傾しながら開く。高台端部は丸く外に張り出す。

焼成はややあまい。全面ナデ調整。推定口径14.1cm。高台径8.7cm、器高4.6cm。1は出土地点不明。5～7は玄室内出土とされるが、玄室内での須恵器坏の出土は奥壁際で記録されているのでこれに該当するものであろう。

2～3はつまみを有する坏蓋である。いずれもかえりがかなり小さく3はつまみも萎縮している。2は天井部ナデ、肩部ヘラ削り、口縁部から内面にかけてナデ調整。焼成はややあまい。受端部は先太りに膨らんで丸い。口径11.8cm、受部径14.2cm、器高3.4cm、つまみの径2.5cm。3も焼成不良で外面は風化のため殆ど調整不明。ナデか。内面全てナデ調整。推定口径12.3cm、推定受部径14.4cm、器高2.7cm、つまみ径1.5cm。2～3は玄室内右側壁付近の奥壁寄りと右袖部寄りに出土している。個々の位置の特定はできない。2は66ページ11～12行に、3は66ページ13～14行に記載。

4は天井部ヘラ削り、肩部から内面ナデ。天井部の整形の様子からは短頸壺の蓋とも考えられるが短頸壺自体は出土していない。推定口径9.4cm、器高3.1cm。玄室内出土とされるが5～7同様玄室奥壁付近出土か。

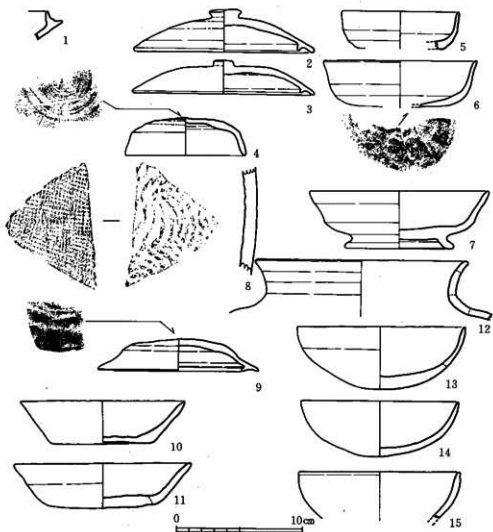
8は甕体部片である。外面格子目タタキ、内面は大きな同心円文がみられる。焼成はあまい。羨道左側壁入口近くで出土。

土師器

9～11は坏蓋及び坏である。9は須恵器坏蓋の模倣品で天井部中央は不明だがほかは全てナデ。かえりはかなり内傾し端部は丸味をおびて尖る。外面肩部から口縁部にかけて「ㄱ」印のヘラ記号がみられる。推定口径10.1cm、かえり高0.1cm、推定受部径12.7cm、推定器高は2.6cmと思われる。62ページ21～22行に記載。10は外面かなり風化し調整不明。内面はナデ。11は底部ヘラ切り、ほかは全てナデ。10～11は底部から外傾しつつ直線的に口縁部がのび、底部は10が上げ底気味の平底、11も平底になる。10は推定口径12.9cm、器高3.5cm。11は口径13.9cm、器高3.6cm。11は羨道部中軸線上排水溝の左側で玄門に近い地点に出土。63ページ3行に記載。10は玄室内出土とされているが出土地点は特定できない。63ページ4行に記載されている。

12は壺形土器の口縁部～頸部片である。ナデ調整される。口縁部外面には粘土帯の接合痕がみられる。口縁部は外反し端部が丸く、胴部は大きく張るようである。推定口径16.5cm。玄室内出土とされるが出土地点不明。60ページ7～8行の記載に該当か。

13～15は坏で13～14は丸底になる。13は口縁部外面横ナデ、ほかは全てナデ。14は外面口縁部横ナデ、ほかはナデ。内面は不明。風化著しい。13～14は底部から内湾気味に開きな



第40図 44号横穴墓出土土器実測図・拓影 (1/3)

がら口縁部がたちあがり端部は丸い。15は全体に風化しているが内面はヘラミガキまたはヘラナデである。13~14に比して丸味に欠けるが口縁部は内湾しながら開き端部付近でややくぼむ。13は口径13.3cm、器高5.1cm。14は推定口径12.5cm、器高4.5cm。15は推定口径12.8cm、推定器高はおおよそ5cm前後になると思われる。13・15は支室内出土とされ、14は44号横穴墓出土とされるのみでこれらの出土地点は不明である。13は61ページ13行に、14は62ページ6行に該当し、15は62ページ6行の坏に該当するか。

33. 45号横穴墓

(1) 土器 (第41図)

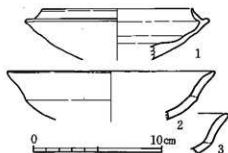
須恵器

1は坏で底部ヘラ削り、体部から内面にかけてナデ。たちあがりは内傾、端部がわずかに直立し丸く仕上げられる。推定口径11.7cm、推定受部径14.4cm、たちあがり高0.8cm、推定器高は4.2cm前後になると思われる。

土師器

2～3は高坏の坏部片と思われる。2は体部外面ナデ、内面ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。3は体部外面ヘラナデ。口縁部から内面はナデ調整。ともに体部と口縁部の境にあまい稜を有し、口縁部は外反して丸くおさまられる。2の推定口径16.1cm。

これら1～3は前庭部出土とされるが出土地点は不明。46年報告書には記載されていない。



第41図 45号横穴墓出土土器実測図 (1/3)

34. 46号横穴墓

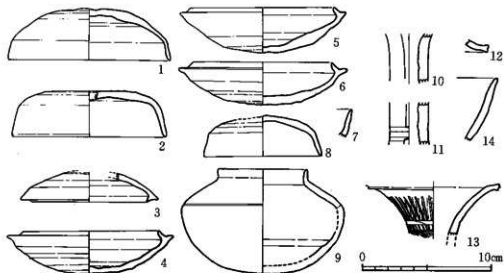
(1) 土器

須恵器 (第42図 1～13)

第42図 1～3は坏蓋である。1は天井部ヘラ削り、ほかは全てナデ。口径12.5cm、器高4.0cm。焼成はあまい。前庭部出土とされる。2は天井部ヘラ切り、まわりをヘラ削りし、ほかは全てナデ。推定口径11.8cm、推定器高3.6cm。ともに記載されていない。3は天井部不明、肩部ヘラ削り、ほかは全てナデ。口径8.9cm、受部径10.7cm、かえり高0.2cm、推定器高2.3cm前後と思われる。66ページ19行に記載されている。

4～6は坏である。いずれも底部ヘラ切り、その周囲をヘラ削りしほかは全てナデ調整される。4は口径10.5cm、受部径12.9cm、たちあがり高0.4cm、器高3.3cm。5は推定口径11.1cm、推定受部径12.9cm、たちあがり高0.4cm、器高3.5cm。焼成があまくたちあがり端部も丸くなっている。ともに記載されていない。6は口径10.8cm、受部径13.1cm、たちあがり高0.5cm、器高3.3cm。66ページ18行の記載に該当するものと思われる。4は体部～受部に、6は受部外面の凹部にそれぞれ自然軸が付着している。

7は坏蓋片の可能性が強いが一応坏口縁部片としておく。全てナデ。記載されていない。



第42図 46号横穴墓出土土器実測図(1) (1/3)

8～9は短頸壺の蓋と身である。8は天井部へラ切り、肩部へラ削り、ほかは全てナデで天井部には「≡」印のへラ記号がみられる。推定口径9.1cm、器高3.1cm。9は底部を1部欠くが胴部下半までへラ削り、胴部上半～口縁部及び内面はナデである。肩部に沈線が1条巡る。口径6.8cm、最大径12.7cm、推定器高8.1cmを測る。63ページ20行記載の埴に該当するか。

10～11は同一個体と思われる高坏の脚部である。外面ナデ調整。径は3.0cm前後。中央の浅い2条の沈線の上下に長方形と思われる透しが2ヵ所対置される。12は高坏の脚端部と思われるナデ調整されている。外面には自然軸がみられる。

13は甕の頸部～口縁部付近である。口縁部下位に突帯が1条巡り、その下にはクシ状工具によるとと思われる上広がりのカキ目が幾重にも重なる。その下位には同工具の刺突と思われる文様帯がみられ、上位のカキ目下部に沈線が1条巡る。推定突帯部径は約10.1cm。67ページ7行に記載。

土師器 (第42図14)

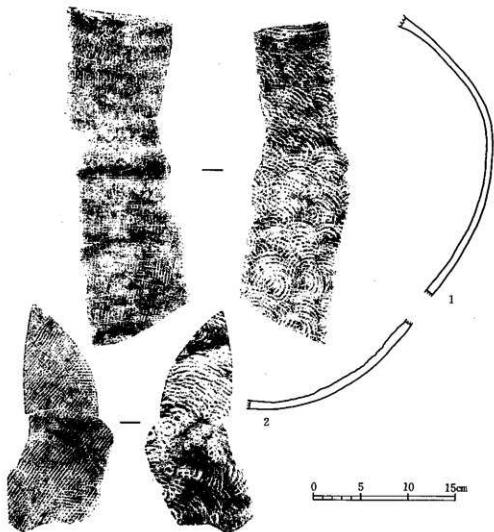
14は坏片である。内外面ナデ。焼成は不良。前庭部出土とされる。

上記1～14の出土地点については詳細不明である。

須恵器 (第43図～第45図)

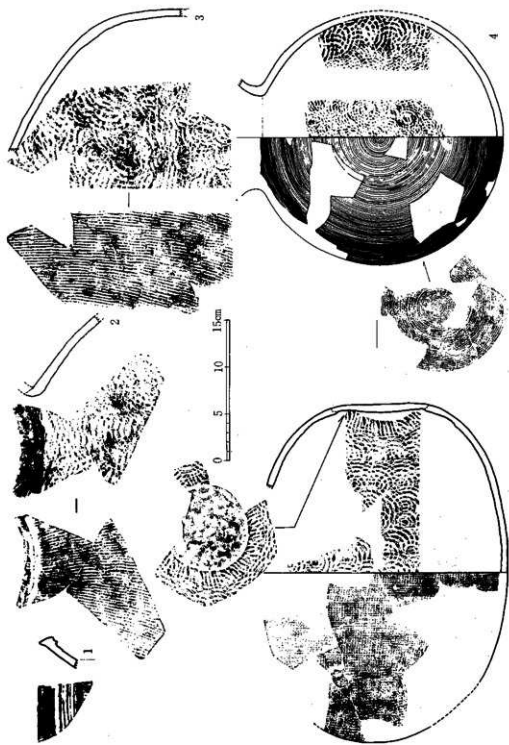
第43図1～2は同一個体と思われる甕の肩部～底部付近の破片である。1は頸部直下～胴下半部片で内面上端は頸部に続くと思われるナデ。ナデはその下位の胴上部内面の同心円文

上にも及ぶ。胴中央部～下部の内面は同心円文。2の内面も引続き同心円文がみられるが胴下半部にはより明瞭な部分もみられる。1～2の外側は格子目と思われるタタキの上に胴下半部までカキ目が施される。胴部～胴上半部までは自然釉が付着。器厚は0.7～1.1cmを測る。63ページ9行の記述に該当するものと思われる。

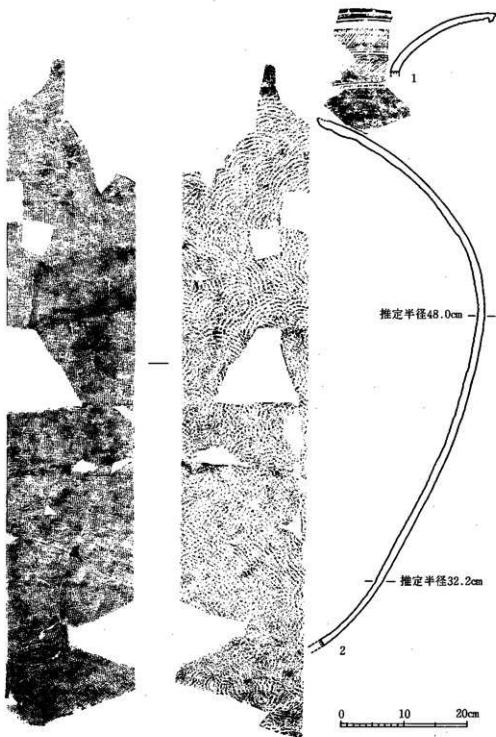


第43図 46号横穴墓出土土器実測図(2) (1/4)

第44図1～3は同一個体と思われる甕の口縁部片及び頸部～胴部片である。1は全面ナデ調整。口縁部外面の肥厚部に1条、その下位に2条沈線が巡り、口縁端部はつまみあげられ



第44图 46号横穴墓出土土器实测图(3) (1/4)



第45图 46号横穴墓出土土器实测图(4) (1/6)

る。2は外面平行線文タタキ、内面同心円文がみられるが、頸部内面は口縁部同様ナデ調整される。頸部外面の口縁部接合面にも外面同様の平行線文タタキが残っている。器厚0.8cm前後である。3は外面平行線文タタキ、内面同心円文。器厚は0.7~1.0cmを測る。63ページ9行に記載。

4は横瓶の接合資料である。横長の長胴部の上面に頸部推定径約10.9cmの外反する口縁をつけ、長胴部の一方は球形に成形し、他方は円形の偏平な粘土板で塞いでいる。胴部は全面格子目タタキされていると思われるが、 $\frac{1}{2}$ 程はナデ消され、その上に偏平部を中心に同心円状にカキ目がみられる。内面のあて板は同心円文であるが、球胴部を中心に $\frac{1}{2}$ 程は他の $\frac{1}{2}$ の内面と異なる小型の同心円文を用いる。また、偏平な閉塞部は内面ナデ調整され、下部は接合面をヘラ状工具で押さえ短沈線が刻み込まれているが、上部は同心円文のみ残る。外面偏平部径約10.3cm、胴部最大径約27.0cm、胴部長軸約35.9cmを測る。出土地点不明。記載もない。

第45図1~2は同一個体と思われる大甕の口縁部片及び頸部~胴下半部片である。推定復元できる程破片が接合しないが、胴部中央及び下半部での推定径は大体96cm前後及び65cm前後になるものと思われる。調整は、1の内面から2の内面上端部がナデ、2の内面は太く大きな同心円文である。1の外面は口縁端部の肥厚部に1条、頸部にかけて2条単位で2ヵ所の沈線が巡り、その間を斜方向のヘラ描短沈線文帯が2条巡る。最下位の沈線から下はナデ調整される。2の外面は頸部の口縁接合面に格子目タタキが残るほか全面に格子目タタキがみられる。63ページ9行に記載されている。

これら第43図及び第44図1~3、第45図の須恵器破片は遺構実測図原因によると狭門塞閉石付近で出土しているようである。

(2) 鉄器・装身具類 (第46図~47図)

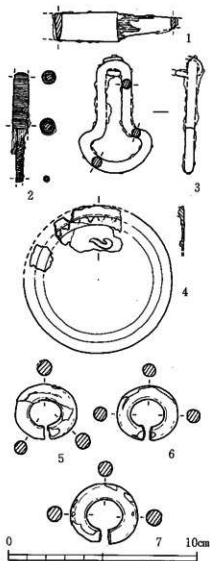
第46図1は刀子である。平造り、角背、両開。茎にはわずかに木質痕が残る。現存長6.6cm、背幅0.4cm。58ページ11行記載。

2は鉄鍔の茎片である。茎に斜方向に織維を巻き矢竹に挿入、その上を糸状の織維質のもので巻く。現存長5.8cm、上部断面での茎幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。

1~2は玄室内出土とされるが出土地点不明。

3は馬具の鉸具と思われる。断面円形で径0.5cm前後である。縦幅6.0cm、横幅3.9cmを測る。前庭部床面出土とされる。59ページ13~14行に記載。

4は鏡片である。破片から強いて直径を復元すれば推定径7.9cm前後になると思われる。厚さ0.1cm。主文圏帯には勾玉状の文様がみられ鋸歯文帯もみられる。縁辺は剥離している。



第46図 46号横穴墓出土鉄器
・装身具・その他実測図(1/2)

35. 50号横穴墓

(1) 土器

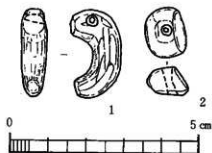
須臾器(第48図1~8. 10)

1~8は坏蓋及び坏である。1~2はセット
と思われる。天井部及び底部は中央へラ切り、

前底部排土中採集とされ出土地点は不明である。
55ページ9~11行に記載。

5~7は銀環である。銅地に銀色の箔が張られて
いるが剝離が著しく緑青におおわれている。銀
色の箔は銀そのものではないように思える。断面
はいずれも円形である。5が長径3.3cm、短径2.9
cm、断面径0.7~0.8cm、6は長径3.2cm、短径2.9
cm、断面径0.7~0.8cm、7は長径3.6cm、短径3.2
cm、断面径0.8cm。支室内出土とされるが出土地
点は不明。56ページ21行~57ページ4行に記載。

第47図1は半透明で薄い褐色を呈するメノウ製
と思われる勾玉である。全体に研磨痕が顕著であ
る。穿孔は片方からなされている。支室内排土中
採集とされ出土地点は不明。55ページ14~15行に
記載。2は白っぽい部分の混じる薄青緑色不透明
な硬玉製かと思われる玉である。自然石を利用し
たかのようにいびつな形である。穿孔は両方から
なされたようである。支室排土中採集とされ出土
地点は不明。56ページ1~4行に記載。



第47図 46号横穴墓出土玉類実測図(1/1)

そのまわりをヘラ削り、ほかは全てナデ。1の口縁端部、2の受端部、たちあがり端部とも丸く仕上げられる。1は口径14.0cm、器高3.2cm。2は口径12.0cm、受部径15.0cm、たちあがり高0.8cm。器高3.8cm。1は65ページ11行に、2は49ページ15行、66ページ終行に記載。3～4は天井部ヘラ削り、そのまわりをヘラ削り、ほかは全てナデ。4は天井部から肩部にかけて自然釉がみられる。ロクロの回転方向はいずれも時計まわりである。3は推定口径13.3cm、器高3.6cm。4は口径13.0cm、器高3.5cm。3～4とも記載はない。5～6は受部及びたちあがり付近の破片であるが全てナデ調整。5は推定口径11.2cm、推定受部径13.8cm、たちあがり高0.4cm、6はたちあがり高0.9cmを測る。5は支室土中採集、6は羨道部出土とされる。7は底部ヘラ削りで平底を呈し、ほかは全てナデ。口径10.5cm、器高3.5cm。49ページ14行及び65ページ11～12行に記載。8は7と同形態の坏口縁部片と思われ全てナデ調整されている。

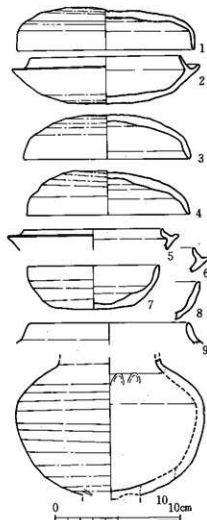
10は脚台付の壺形土器になると思われるが口縁部と脚部は欠失している。内面及び外面胴下半部までナデ調整。胴下部から脚台接合部までヘラ削り。底部付近に一部「=」印のヘラ記号がみられる。

胴部上半部には横ナデの前に斜方向のタタキがなされた痕跡が観察できる。現存高10.7cm、胴部最大径15.1cm、脚接合部径4.6cm。49ページ12～13行、63ページ17～19行に記載。

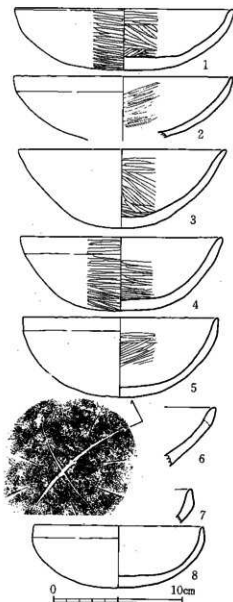
須恵器の出土地点については、1～2は支室左袖礎床の上で出土し、7はそのやや奥壁寄り、10は支室入口右側の溝上で出土しているようである。

土師器 (第48図9・第49図～第50図)

第48図9は短頸壺あるいは埴形土器の口縁部片と思われるもので全てナデ調整されている。推定口径約12.7cm前後と思われる。



第48図 50号横穴墓出土土器
実測図(1) (1/3)



第49図 50号横穴墓出土土器実測図(2)
(1/3)

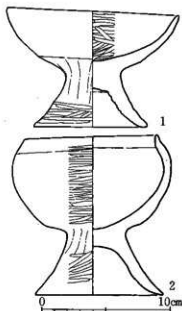
第49図2及び第50図は高坏もしくは脚台付埴である。第49図2は脚部が欠失していると思われ、外面接合部付近に縦方向のハケ目痕らしいものが、そしてその上を口縁下部から斜方向のヘラミガキで消しているのがみられる。口縁部外面及び内面はナデ。内面には一部ヘラミガキもみられる。口径17.0cm。49ページ5行、60ページ21～22行に記載されている。

第49図1及び3～8は坏もしくは坏口縁部片と思われるものである。1は内外面ともヘラミガキ。3は内面及び口縁部外面ヘラミガキで底部は風化のため剥離。4は底部外面ナデ、ほかはヘラミガキ。5は風化が著しく表面がかなり剥離しているが、口縁部内外面ナデ、口縁下内面ヘラミガキが観察できる。底部には「×」印のヘラ記号がみられる。6も風化のため口縁部外面ナデのほかは調整不明。7は全てナデ調整。8は底部外面ヘラミガキのほかは表面剥離のため調整は不明。このうち、3～4は口縁部がわずかに外反し、1・6はやや内湾気味に、5・7～8は直立気味に立ちあがる。口縁端部は8がやや尖り気味になるほかは全て丸くおさめられる。また、4～8の口縁部外面にはあまい稜がみられる。1の推定口径16.9cm、器高4.8cm。49ページ10行、62ページ10行に記載。3は口径16.2cm、器高6.2cm。49ページ6～7行、62ページ8行に記載。4は口径15.6cm、器高5.8cm。49ページ10行、62ページ11行に記載。5は口径15.2cm、器高6.3cm。61ページ14～15行に記載。6～7は羨道部出土とされるが出土地点不明。8は口径13.1cm、器高4.8cm。49ページ8行、62ページ9行に記載される。

これら坏類は支室右側の中央よりやや右袖寄りに出土している。

第50図1は坏部内面ヘラミガキ、口縁部外面ナデ。

口縁部下位から脚部中位程は板ナデと思われる縦方向の調整が行われ、口縁部下位はその上をさらにナデ調整。脚裾部はヘラミガキがみられる。口径13.4cm、脚部最小径4.25cm、脚裾部径8.6cm、器高9.0cmを測る。49ページ1～2行、60ページ17～20行に記載。2は口縁部内外面ナデ、内器面丁寧なナデ。坩部と脚部の接合部は板ナデと思われる縦方向の器面調整の後ナデ調整がなされる。坩部外面、脚部外面はヘラミガキ、脚裾部内面はナデ。脚部内面は板状工具による整形がなされる。口径10.1cm、胴部最大径12.4cm、脚部最小径4.5cm、脚裾部推定径9.9cm、器高12.3cm。49ページ2～4行、61ページ1～4行に記載。1は支室入口左袖寄りに、2は支門中央より左壁寄りに出土している。



第50図 50号横穴墓出土土器
実測図(3) (1/3)

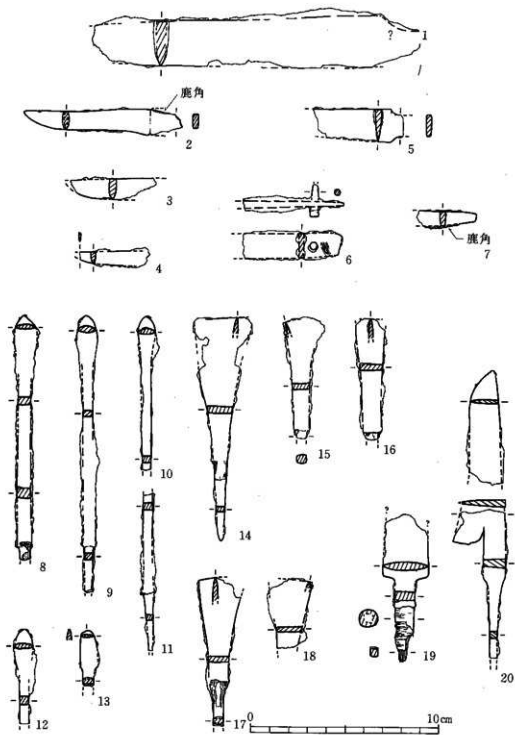
(2) 鉄器 (第51図～第52図)

直刀・刀子

第51図1は直刀の身部片と思われるが背闊が深くすき取られたようになっており、あるいは大型の刀子片かもしれない。平造り、角背。錆化剥離が著しい。現存長17.4cm、背推定幅0.5cm前後。2～5は刀子片と思われる。2は平造り、角背。茎に鹿角製装具痕がみられる。現存長8.3cm、身長6.7cm、背幅0.3cm。3は切先付近く平造り、角背。現存長4.5cm、背幅0.4cm。4は錆化著しいが先端部断面でみる限り刃部があるようで、刀子あるいは鉄鎌かもしれない。平造り・角背で現存長3.7cm、先端での背幅0.1cm。5は関部付近で平造り、角背、両関。現存長4.9cm、背幅0.4cm、茎厚0.3cm。6は直刀あるいは刀子の茎端部と思われる。目釘が1ヶ所残存し目釘孔近くには繊維痕もみられる。現存長5.3cm、茎厚0.3cm、目釘頭部径0.4cm。7は刀子の茎端部である。現存長3.2cm、背側幅0.3cm、刃部側幅0.2cm。下部に鹿角製装具と思われる細胞痕がみられる。50号横穴墓出土土刀破片については48ページ16～19行、57ページ16～終行に記載されているが、1は57ページ18～19行記載のものが折損したものと認め、6は48ページ16～17行、57ページ22～23行記載のものに該当する。

鉄鏃

8～10・12は同形式である。身部は錆で膨らむが一樣に錆化しているとすれば両丸造であ



第51图 50号横穴墓出土铁器实测图(1) (1/2)

ろう。また、身部と篋被ぎの境も不明。篋被ぎと茎の境は段を有し篋被ぎ端部にまで樹皮巻きされる。13は身部と篋被ぎの境が段を有しやや形式を異にするものと思われるが、あるいは59ページ5～6行記載の縄とされるものの折損部片か。14・16・18は方頭、15・17は円頭の広根斧箭式である。14は身部と茎との境がみられず、縦方向の竹繊維痕からすると茎端部から約4.3cmのところまで竹に挿入してあったものと思われる。15～17は段を有し茎と区別されているものでこの段のところに樹皮巻きや矢竹痕が残存する。19は両丸造で短い篋被ぎと茎は段で区別されているものと考えられる。竹繊維の上に樹皮巻きがみられる。20は篋被片刃脇袂式とでもいうものである。篋被ぎと茎の境は袂りを有する。身部先端は刀子の切先のようなものであるが同一個体とされていたもので直接には接合しない。11は10と同一個体の可能性があるが篋被ぎがやや長くなりすぎるようである。それぞれの現存長は次のとおりである。8は13.1cm、9は14.7cm、10は8.2cm、11は8.4cm、12は5.0cm、13は2.9cm、14は11.9cm、15は6.5cm、16は6.5cm、17は7.9cm、18は3.7cm、19は7.8cm、20は身部先端側6.1cm、茎側7.9cm。いずれも錆化著しい。

第52図1～8は鉄鎌の篋被ぎ片と思われる。まだ接合する可能性もあるが現状では困難であった。いずれも錆化著しい。現存長は次のとおりである。1は6.2cm、2は2.0cm、3は4.5cm、4は2.1cm、5は3.7cm、6は2.8cm、7は4.3cm、8は4.2cm。9は両端幅が極端に異なるが前述の50号横穴墓で出土しているとされる縄の一部かもしれない。現存長3.5cm。10～19は篋被ぎ～茎片である。1～8同様接合する可能性もある。篋被ぎと茎の境は段を有すると思われる。基本的にはほかの鎌同様茎に繊維を巻き竹に挿入、上を樹皮巻きしている。現存長はそれぞれ次のとおりである。10は10.1cm、11は5.4cm、12は4.5cm、13は5.8cm、14は5.6cm、15は5.4cm、16は4.6cm、17は2.5cm、18は3.5cm、19は4.6cm。これらの中に48ページ20～21行、58ページ21～22行記載の刀身形の鎌は見当たらないようである。

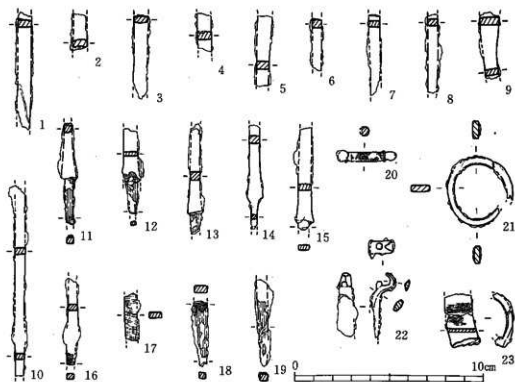
その他の鉄器

20は県内の地下式横穴墓などで出土例の知られる鉄飾り弓の鉄金具とされるものである。現存長3.1cm、断面径0.5cm。両端頭部間は木質繊維痕と思われるものが付着している。

21は幅約1.0cmで楕円形を呈し内側には一部木質痕が残る。腰巾の類か。長径3.7cm、短径約3.1cm前後と思われる。58ページ1～3行に記載。

不明鉄器

22～23は用途不明の鉄器である。22は尖り気味の先端部を持ち断面三角形の半円形の金具に円筒形の短い突起が付くものである。断面三角形の部分は特に刃部らしい鋭利さはない。



第52図 50号横穴墓出土鉄器実測図(2) (1/2)

23は内面に木質痕が残り足金物類の可能性もある。

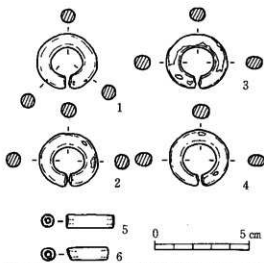
これら鉄器の出土地点については特定できないが、第51図5・15~16・18、第52図3~5・8~9・13~14・16~17・20・23は支室内出土とされる。遺構実測図原因によると尖根鐵は支室左側壁左袖寄りに、方(円)頭広根鐵は支室中央右袖寄り及び奥壁中央部付近のいずれも礎床上で出土している。

(3) 装身具 (第53図)

1~4は耳環である。1~2は銅地に金色の箔が張ってある金環であるが金そのものではなく合金であろう。緑青が著しい。ともに断面は円形である。3~4は銅地に銀色の箔が張ってある銀環である。3は剥離が著しい。全体に緑青は少なく4は黒錆状のものもみられる。ともに断面楕円形である。1は長径3.2cm、短径2.9cm、断面径0.8cm。2は長径3.1cm、短径2.8cm、断面径0.8cm。3は長径3.2cm、短径2.9cm、断面長径0.9cm、断面短径0.7cm。4は長径3.1cm、短径3.0cm、断面長径0.9cm、断面短径0.7cm。1は支室入口右側、2は支室中央や左寄り、3は支室中央入口寄りて出土。4は支室排土中採集とされる。48ページ14~15行、

57ページ5～10行に記載。

5～6は管玉である。5は硬玉製と思われ両側から穿孔される。6は表面がなめらかで滑石製かと思われ、やはり両側から穿孔されたと思われるものである。5は長さ2.5cm、径6.5mm、6は長さ2.2cm、径は約7.0mmでやや楕円形である。5は2の出土地点より30cm程入口寄りて出土。6は玄室排土中採集とされる。48ページ12～13行、55ページ16～17行に記載されている。

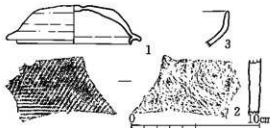


第53図 50号横穴墓出土装身具実測図(1/2)

36. 51号横穴墓

(1) 土器 (第54図)

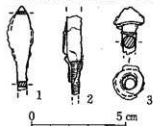
1～2は須恵器である。1は坏蓋で天井部へら切り、ほかは全てナデ。かえり端部は直立し受部は横に開く。口径8.8cm、受部径10.5cm、かえり高0.3cm、器高3.0cm。2は甕の体部片と思われる。外面横方向の平行線文タタキ、その上を



第54図 51号横穴墓出土土器実測図・拓影(1/3)

斜方向のタタキ、内面同心円文。器厚0.8～0.9cm。1は54ページ19行、67ページ2～3行に記載され、出土地点は54ページ18行に記載。2は記載されていない。

3は土師器坏口縁部片である。口縁部は直立、端部は丸く尖る。外面ナデ、内面は不明。



第55図 51号横穴墓出土鉄器実測図(1/2)

(2) 鉄器 (第55図)

1～2は鉄鏃である。錆化著しく形状は不明瞭だが、両丸造篋被柳葉式と思われる。茎には横方向の繊維痕がみられる。現存長は1が4.5cm、2は4.2cm。

3は頭部が円錐形の丸釘状の鉄製品である。

これらはいずれも出土地点は不明である。46年報告書にも記載されていない。

37. 52号横穴墓

(1) 土器 (第56図)

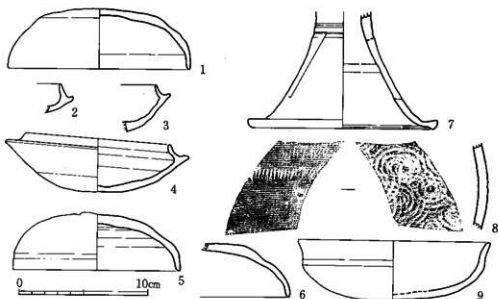
須恵器

1・5～6は坏蓋である。1は天井部内外面風化のため調整不明。肩部～口縁部内外面ナデ。焼成はあまい。推定口径14.0cm、器高4.8cm。65ページ13行記載。5～6は天井部ヘラ切り、ほかは全てナデ。口縁端部は丸い。5は肩部に沈線が1条巡る。推定口径12.9cm、器高4.4cm。6は推定器高4.2cm前後。ともに焼成はあまい。5は65ページ14行に記載。

2～4は坏である。2～3は全てナデ。たちあがり高は2が0.8cm前後、3は0.7cmを測る。4は底部ヘラ削り、ほかは全てナデ。たちあがり端部は先太で丸い。口径11.2cm、受部径14.3cm、たちあがり高0.7cm、器高4.2cm。4は25ページ6行、67ページ4～5行に記載され、出土地点は24ページ19～20行に記載されている。

7は高坏脚部である。脚中央部に沈線が2条巡りほかは全てナデ。長方形と思われる透しが2～3ヵ所入ると考えられる。焼成はあまく白っぽい。推定脚裾部径14.1cm、現存高9.1cm。64ページ16～18行に記載。

8は瓿体部片と思われる。外面は縦方向のタキキの上を横方向のカキ目で消すが一部にタキキ痕が残る。内面は同心円文。器厚約0.7cm。63ページ9～11行に記載。



第56図 52号横穴墓出土土器実測図・拓影 (1/3)

土師器

9は坏である。底部丸底、口縁部はあまい稜をなし外反、端部は丸く仕上げられる。全面ナデ調整。口径14.8cm、器高4.6cm。薄手である。62ページ12行に記載

(2) 鉄器 (第57図)

刀子

1～3は身部である。平造り、角背。1は現存長4.1cm、背幅0.4cm、2は現存長8.9cm、背幅0.4cm、3は現存長3.3cm、背幅0.4cm。4～6は関部付近である。平造り、角背。4は両関が深くすぎとられ、5～6は背関が深く刃関が浅くすぎ取られる両関のものである。5は茎に鹿角製装具痕がみられる。茎の背側には横巻きの繊維痕らしきものがみられるところから装具は上面が開き下から茎をはさむ形式のものであったと考えられる。6は茎に斜方向の繊維痕及び把木が残存。4の現存長4.6cm、背幅0.5cm、5は現存長6.1cm、背幅0.5cm、6は現存長6.3cm、背幅0.4cm、茎長推定4.9cm前後と思われる。7～9は刀子茎端部と思われる。7は目釘孔及び目釘が残存。その周囲に鹿角製装具痕がみられる。現存長3.3cm、目釘径0.3cm。8は錆化著しいが鹿角製装具が付着している。現存長6.6cm。9は錆のためか断面やや膨れ気味である。現存長4.8cm。

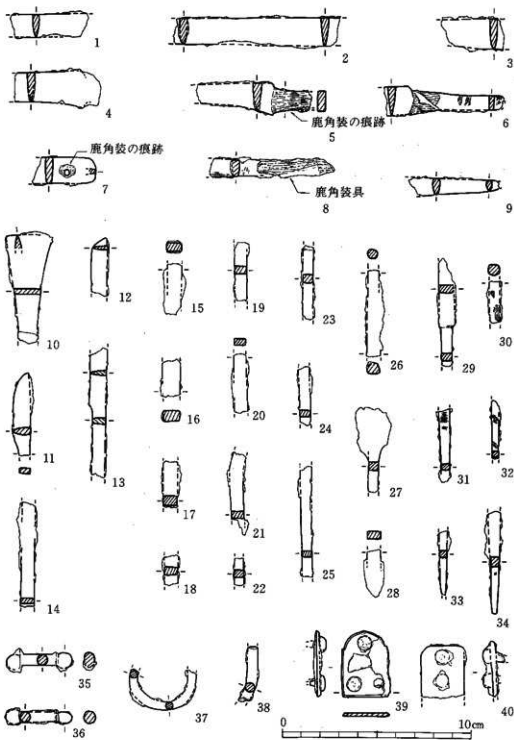
鉄鏃

10は方頭広根斧箭式で現存長5.9cm。錆化著しく、鏃の具合から端部0.5cm前後まで口巻であったとおもわれる。11～12は篋被片刀箭式の身部と思われ、13は直接接合できないが12の下部と思われる。11の現存長4.4cm。平造り、角背で背幅0.3cm。12の現存長3.1cm。平造り、角背で背幅0.2cm。13の背幅0.3cm、現存長6.9cm。14～34はこれら鏃の篋被ぎ～茎片である。29は 被ぎと茎の境に段を有し樹皮痕が残る。30は茎に矢竹が付着。31～32・34には茎に斜めあるいは横方向の繊維痕がみられる。34の茎端部は丸い。それぞれの現存長は次のとおりである。14は5.5cm、15は2.7cm、16は2.0cm、17は2.5cm、18は1.6cm、19は3.1cm、20は3.2cm、21は4.4cm、22は1.5cm、23は3.9cm、24は3.2cm、25は5.8cm、26は4.6cm、27は4.4cm、28は2.5cm、29は5.7cm、30は2.2cm、31は3.9cm、32は3.1cm、33は3.4cm、34は5.4cm。58ページ14行に記載。

その他の鉄器

35～36は50号横穴墓にもみられた鉄筋り弓の鉄金具とされるものである。35の長さ3.5cm、径0.6cm。36の長さ3.5cm、径0.6cm前後。

37～38は馬具の鉸具の一部と思われる。断面円形で径は37が0.4cm、38は0.5cmを測る。



第57図 52号横穴墓出土鉄器実測図 (1/2)

39～40は馬具の辻金具かと思われる。39は厚さ0.2cm。方形の一辺に半円形を足したような形状で3ヵ所に鉾がみられる。表面には緑青がみられ、裏面は錆化著しい。40は隅丸方形状で一辺が欠失している。現存部には2ヵ所鉾がみられる。両面錆化著しい。

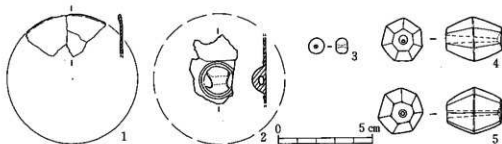
これらの鉄器のうち13と36は支室内出土とされるがその詳細な出土地点は不明で、ほかの大部分のものは出土地点が全くわからない。46年報告書にも記載されていない。

(3) 装身具・その他(第58図)

1～2は同一個体と思われる鏡片であるが緑青が著しく剝離もすすんでいるためか直接には接合し難い。1は文様帯には何らの文様もみられない。厚さ0.1cm。2は鈕及び鈕座がみられる。厚さ0.1cm、鈕座外径2.0cm。1～2の推定径は6.9cm前後になるとと思われる。24ページ22行～25ページ1行、55ページ7～9行に記載されている。

3は丸玉で黒色の光沢のない石材を用いている。径0.8～0.9cm、厚さ0.6cm。両側から穿孔している。25ページ5行、55ページ終行に記載されている。

4～5は無色透明な水晶製かと思われる切子玉である。ともに磨耗が激しく稜がつぶれ傷も多い。一方の研磨面から穿孔、他方は打ち欠きにより開口させている。25ページ3～4行、55ページ19～21行に記載されている。



第58図 52号横穴墓出土鏡・玉類実測図(1/2)

III おわりに

今回の報告は総合博物館収蔵の「蓮ヶ池横穴群出土遺物」の中から昭和44年に発掘された遺物を選別し図化したものである。これらの遺物実測図は今回が初出である。しかし、これ以前に須恵器については福尾正彦氏により第IV期のものが比較的多いと述べられ、⁽¹⁾須恵器編年に基づく造営年代については長津宗重氏によりIVB期が最盛期であると考察されている。⁽²⁾

ここで一応比較的多数出土している須恵器蓋坏類について主に完形資料を中心に形態分類

を行い、編年案を提示してまとめとしたい。

取りあげた蓋坯は12号横穴墓を中心に14横穴墓65個である。主に口径、受部径、器高等の法量差をもとにたちあがりやかえり、調整等の状態を比較して分類した(表参照)。

身a類—全体に均整がとれ、たちあがりも高く力強い。たちあがり高0.8~0.9cm、受部径14.7~15.8cm、口径12.0~13.4cm、器高約3.4~4.2cm。受部径とたちあがり端部の形態に多少違いがみられ、a₁類：受部径15.5cmより大。受部短くたちあがり高い。端部にわずかな面取り。a₂類：受部径15.0cmより大。a₁類とほぼ同形態。たちあがり端部は尖る。a₃類：受部径15.0cmより小。少々小ぶりでたちあがりは少し力強さを失う。端部にわずかな面取り。一部に削りの簡略化もみられる。この身a₃類にはセット関係から蓋A₃類が考えられる。

身b類—a₃類よりやや小ぶりでありa₁・a₂類よりはひとまわり程小さい。たちあがり高0.7~1.0cm、器高3.3~4.2cmでa類とあまり変わらないが、たちあがりはやや内傾化する傾向がみられ、受部径は14.1~14.3cm、口径11.2~11.8cmと小さくなる。身b類にはセット関係から蓋B類が考えられよう。

身c類—b類よりさらに小ぶりでたちあがりも小さい。受部径11.8~13.8cm、口径9.8~11.2cm、器高2.8~3.8cm。たちあがり高は0.2~0.7cmと多少格差がみられる。たちあがり受部の形態に2類みられる。c₁類：たちあがりが受部よりも大きく高い。外面全体に自然釉が付着し坏蓋として焼かれたのではないかと考えられるものもみられる。たちあがりの形態から一応身として報告した。c₂類：たちあがり受部の大きさがほぼ等しい。たちあがりの形態から蓋としての機能も想定されるが詳細な出土状態等不明なため身として報告した。セット関係及び法量差から身c₁類には蓋C₁類が、身c₂類には蓋C₂類がそれぞれ妥当であろう。この身c類は分類した中で最も法量格差が大きく、また、たちあがりの形態や自然釉の付着状況からはこの段階ぐらいで蓋受けと身受けの関係が逆転するのではないかと考えられる。

蓋D類—分類した中では最も法量の小さな一群である。受部径10.2~10.7cm、口径8.3~8.9cm、器高約1.4~3.0cm。つまみはない。かえりと器高の形態から、(1)かえりが明瞭で器高が高い、(2)かえりが明瞭で器高が低い、(3)かえりは形骸化し極めて小さく器高が低いものの3類がみられる。第8図2は形態的特徴は(3)に類似するが法量は身c類に近いなどやや特異な存在である。ここでは法量に古い特徴(小型化する前段階の特徴)を残しているものとみなした。蓋D類にはセット関係などから身d類が考えられる。身d類は(1)丸底気味で若干内湾しつつ口縁部が開くものと(2)平底で口縁部が直立して開くものがあり、それぞれ法量に大小がみられる。

蓋E類一つまみを有し短く小さなかえりが付くもの。法量は蓋D類より大きい。法量に2類みられる。第28図1はつまみの有無は不明だが口縁部付近の形態からこの類に入れる。蓋E類(2)には法量からみて身e類が考えられるが、まだ高台がみられない。

蓋F類一つまみを有し、かえりはなく口縁端部が垂直に短く折れ曲がるもの。口縁端部の形態によりF₁類と退化の著しいF₂類に分類できよう。法量差が大きい。蓋F₁類には高台端部や体部の形態から身f₁類が妥当であろう。

さて、以上のように分類したが、この中で蓋D類は宝珠状つまみが全くみられないという特異性はあるものの、佐土原町土器田東1号横穴墓出土須恵坏蓋A類の法量に類似し、また、出土蓋坏類の中で最も法量が小さくなることなどから、蓋坏類の小型化が一般化する第V期に相当する時期に比定しておきたい。そして、明確に蓋受けと身受けの逆転は把握できなかったもの身c類はIV期相当とみなし、法量的にも大型で均整のとれた身a・b類をⅢB期に、つまみを有しまだかえりが残る蓋E類をVI期に、かえりが消滅し口縁端部に段が出現、または退化する蓋F₁・F₂類をそれぞれVII期・VIII期に比定しておきたい⁽⁴⁾。最後に、完形の須恵器蓋坏類による編年ではあったが、IV期の須恵器が多くみられるという先学諸賢の御指摘と時期的に若干ぶれが生じてしまった。このことについては上記編年案に対する御批判、御教示等仰ぎつつ、また稿を改めて考えてみたい。

註 (1) 福尾正彦 『宮崎県内出土の須恵器——地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として——』

古文化談叢 第6集

九州古文化研究会 1979

(2) 長津宗重他 『土器田西横穴墓群』 佐土原町文化財調査報告書 第2集

佐土原町教育委員会 1982

長津宗重 『高千穂地方の横穴墓』 『海と里と山の考古学——日・豊・肥・古文化研究会資料3——』

高千穂シンポジウム実行委員会 1983

(3) 有田辰美他 『一般国道10号佐土原バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 (土器田横穴古墳)』

佐土原町教育委員会 1981

この中で有田氏は坏蓋A類をつまみの有無で2類にわけ、つまみのある方を伊藤田窯跡群及び天鏡寺山窯跡1区出土資料との類似ということでV様式に想定している。つまみのないものも法量はほぼ同じである。

(4) 長津宗重他 『市の瀬地下式横穴墓群』 (国富町文化財調査資料 第4集 国富町教育委員会

1985) この中の『宮崎平野部の須恵器編年図(案)』を参照した。

器種	類別	図一番号	遺構番号	器種	類別	図一番号	遺構番号	編年素
坏	a ₁	16-8~9	12号	坏	A ₁		-	IIIb
	a ₂	16-10~11	12号		A ₂		-	
	a ₃	14-2、48-2 16-12~14	12号 50号		A ₃	14-1、48-1 16-3~6、34-1 56-1	12号 37号 50号 52号	
	b	14-4、16-15~17 41-1、56-4	12号 45号 52号		B	14-3、48-3~4 56-5	12号 50号 52号	
身	c ₁	14-6、16-18 48-5	12号 50号	蓋	C ₁	14-5、42-1	12号 46号	IV
	c ₂	8-1、23-3 34-2、42-4~6	8号 18号 37号 46号		C ₂	16-7、29-1 42-2	12号 34号 46号	
坏	D	(1)16-1、54-1 (3)8-2 (2)23-1、22-1~2 34-3	8号 37号 12号 46号 16号 51号 18号	坏	d	34-9、48-7 8-3 (1)16-2、23-2 (2)16-19 34-10 40-5	8号 44号 12号 50号 18号 37号	V
	E	(1)28-1 (2)40-2~3	31号 44号		e	40-6	44号	VI
蓋	F ₁	25-1	24号	身	f ₁	40-7	44号	VII
	F ₂	34-4~5	37号		f ₂		-	VIII



2-1 (1号)



3-2 (1号)



7-1 (7号)



8-5 (8号)



8-2 (8号)



8-3 (8号)



12-4 (11号)



8-6 (8号)



12-3 (11号)



14-1 (12号)



14-2 (12号)



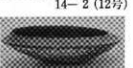
14-3 (12号)



14-4 (12号)



14-5 (12号)



14-6 (12号)



16-1 (12号)



16-2 (12号)



16-3 (12号)



16-4 (12号)



16-5 (12号)



16-7 (12号)



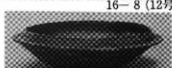
16-8 (12号)



16-9 (12号)



16-10 (12号)



16-13 (12号)



16-14 (12号)



16-15 (12号)



16-16 (12号)

1号・7号～8号・11号～12号横穴墓出土土器



16-18(12号)



16-19(12号)



17-1(12号)



17-2(12号)



17-3(12号)



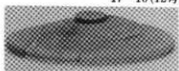
17-10(12号)



22-1(16号)



23-1(18号)



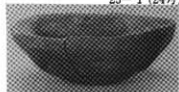
25-1(24号)



25-3(24号)



29-1(34号)



29-7(34号)



34-5(37号)



34-9(37号)



34-11(37号)



36-5(37号)

12号·16号·18号·24号·34号·37号横穴墓出土土器



38-1 (40号)



38-5 (40号)



38-2 (40号)



38-6 (40号)



38-3 (40号)



38-7 (40号)



38-4 (40号)



38-8 (40号)



38-9 (40号)



40-2 (44号)



40-4 (44号)



40-7 (44号)



40-3 (44号)



40-10 (44号)



40-13 (44号)



40-9 (44号)



40-11 (44号)



40-14 (44号)

40号・44号横穴墓出土土器



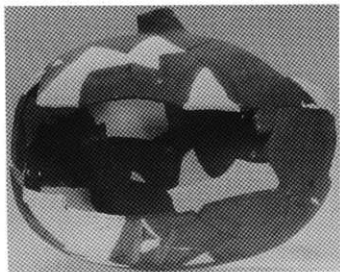
42-3 (46号)



42-6 (46号)



42-8 (46号)



44-4 (46号)



42-9 (46号)



44-4 (46号)



48-1 (50号)



48-2 (50号)



48-3 (50号)

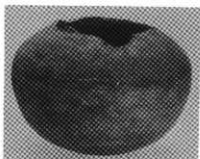
46号·50号横穴墓出土土器



48-4 (50号)



48-7 (50号)



48-10 (50号)



49-1 (50号)



49-2 (50号)



49-3 (50号)



49-4 (50号)



49-5 (50号)



49-8 (50号)



50-1 (50号)



50-2 (50号)



54-1 (51号)



56-1 (52号)

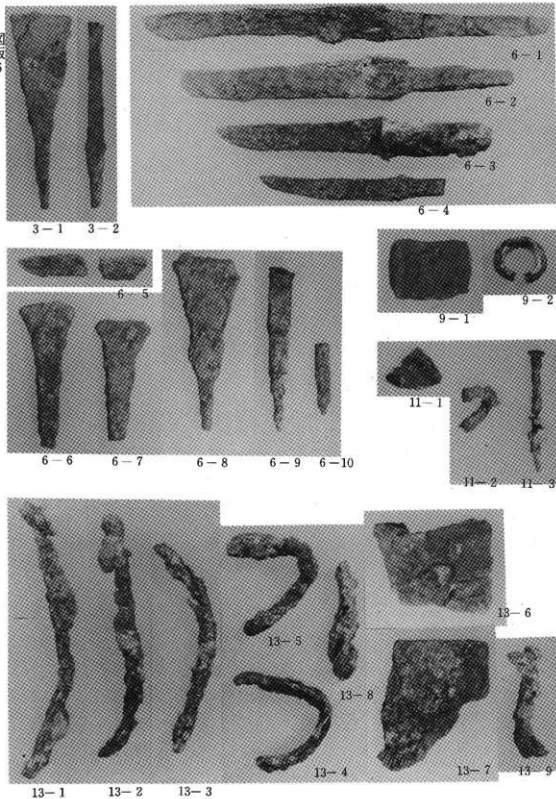


56-4 (52号)



56-9 (52号)

50号～52号横穴墓出土土器



1号·6号·8号·11号横穴墓出土铁器·装身具